

今宿五郎江遺跡IV

—第5次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集

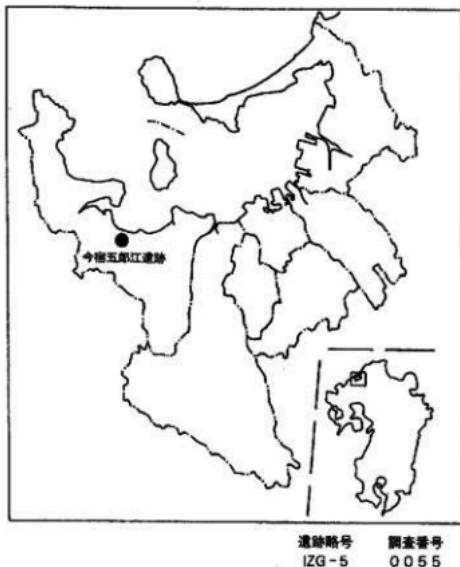
2003

福岡市教育委員会

今宿五郎江遺跡 IV

—第5次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集



2003

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、数多くの遺跡が残されています。そのような中、西部に広がる今宿平野、糸島平野には大陸との交流の痕跡をとどめる遺跡が見つかっています。これまでの今宿五郎江遺跡では弥生時代後期の環濠が確認され、小銅鐸やガラス玉が発見されています。

本書は今宿小学校のプール改築工事に伴い実施された今宿五郎江遺跡第5次調査の記録を報告するものです。調査ではこれまでの時代をやや遡る弥生時代中期末から後期にかけでの溝が発見でき、当地の歴史を解明する上での貴重な資料を得ることができました。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

調査に際しましては、関係機関の多くの方々のご協力を賜りました。心より感謝の意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

- 1 本書は福岡市教育委員会が西区今宿137における今宿小学校プール改築工事に伴い、発掘調査を実施した今宿五郎江遺跡第5次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

次数	調査番号	遺跡略号	遺跡調査原因	所在地	調査面積	調査期間
5次	0055	IZG-5	今宿小学校プール改築工事	西区今宿137	150m ²	20001219～20010131

- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は星野恵美、米倉秀樹、藏富上寛が行った。
- 4 本書に掲載した遺物実測図の作成は下原幸裕、濱石正子、撫養久美子、星野が行った。
- 5 本書に掲載した遺構・遺物写真的撮影は星野が行った。
- 6 本書に掲載した挿図の製図は林山紀子、星野が行った。
- 7 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21'西偏する。
- 8 遺構の呼称は溝をSD、土坑をSKと略号化した。
- 9 遺構・遺物番号は通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
- 10 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 11 本書の執筆、編集は星野が行った。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の立地と環境	1
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 造構と遺物	5
1) 溝 (SD)	5
2) 土坑 (SK)	58
IV.まとめ	60

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
第2図 今宿五郎江遺跡位置図 (1/5,000)	3
第3図 今宿五郎江遺跡第3次調査・第5次調査位置図 (1/400)	4
第4図 第5次調査遺構配置図 (1/150)	5
第5図 SD01 21層・9層遺物出土状況実測図 (1/40)	6
第6図 SD01 10層・11層遺物出土状況実測図 (1/40)	7
第7図 SD01 土層実測図 (1/40)	8
第8図 SD01 21層出土遺物実測図① (1/4)	10
第9図 SD01 21層出土遺物実測図② (1/4)	11
第10図 SD01 21層出土遺物実測図③ (35~37は1/3、38は1/2、他は1/4)	12
第11図 SD01 9層出土遺物実測図① (1/4)	14
第12図 SD01 9層出土遺物実測図② (1/4)	15
第13図 SD01 9層出土遺物実測図③ (1/4)	16
第14図 SD01 9層出土遺物実測図④ (1/4)	17
第15図 SD01 9層出土遺物実測図⑤ (1/4)	18
第16図 SD01 9層出土遺物実測図⑥ (1/4)	19
第17図 SD01 9層出土遺物実測図⑦ (87が1/6、他は1/4)	20
第18図 SD01 9層出土遺物実測図⑧ (1/4)	21
第19図 SD01 9層出土遺物実測図⑨ (1/4)	22
第20図 SD01 9層出土遺物実測図⑩ (1/4)	23
第21図 SD01 9層出土遺物実測図⑪ (1/4)	24
第22図 SD01 9層出土遺物実測図⑫ (1/4)	25
第23図 SD01 9層出土遺物実測図⑬ (1/3)	26
第24図 SD01 10層出土遺物実測図① (1/4)	28
第25図 SD01 10層出土遺物実測図② (173~175は1/6、他は1/4)	29
第26図 SD01 10層出土遺物実測図③ (1/4)	30
第27図 SD01 10層出土遺物実測図④ (1/6)	31
第28図 SD01 10層出土遺物実測図⑤ (190・192は1/6、他は1/4)	32
第29図 SD01 10層出土遺物実測図⑥ (1/4)	33
第30図 SD01 10層出土遺物実測図⑦ (1/4)	34

第31図	SD01 10層出土遺物実測図⑤ (1/4)	35
第32図	SD01 10層出土遺物実測図⑨ (1/3)	36
第33図	SD01 11層出土遺物実測図① (1/4)	37
第34図	SD01 11層出土遺物実測図② (1/4)	38
第35図	SD01 11層出土遺物実測図③ (1/4)	39
第36図	SD01 11層出土遺物実測図④ (257・258は1/6、他は1/4)	40
第37図	SD01 11層出土遺物実測図⑤ (252・263は1/6、他は1/4)	41
第38図	SD01 11層出土遺物実測図⑥ (264は1/6、他は1/4)	42
第39図	SD01 11層出土遺物実測図⑦ (1/4)	43
第40図	SD01 11層出土遺物実測図⑧ (286は1/2、他は1/3)	44
第41図	SD01 17層出土遺物実測図 (1/4)	45
第42図	SD02 7層・9層遺物出土状況実測図 (1/40) および土層実測図 (1/40)	46
第43図	SD02 7層出土遺物実測図① (1/4)	48
第44図	SD02 7層出土遺物実測図② (305・306は1/6、他は1/4)	49
第45図	SD02 7層出土遺物実測図③ (1/4)	50
第46図	SD02 7層出土遺物実測図④ (1/4)	51
第47図	SD02 7層出土遺物実測図⑤ (1/3)	52
第48図	SD02 9層出土遺物実測図① (1/4)	54
第49図	SD02 9層出土遺物実測図② (1/4)	55
第50図	SD02 9層出土遺物実測図③ (1/4)	56
第51図	SD02 9層出土遺物実測図④ (374は1/6、他は1/4)	57
第52図	SD02 9層出土遺物実測図⑤ (1/3)	58
第53図	SK03～08実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	59

図版目次

図版 1	(1) 調査区周辺（北から）	(2) 調査区全景（北から）
	(3) SD01 21層遺物出土状況（東から）	
図版 2	(1) SD01 9層遺物出土状況（東から）	(2) SD01 10層遺物出土状況（東から）
	(3) SD01 11層遺物出土状況（東から）	
図版 3	(1) SD01 実掘状況（北から）	(2) SD01 東壁土層（西から）
	(3) SD01 西壁土層（東から）	
図版 4	(1) SD02 7層遺物出土状況（北から）	(2) SD02 7層遺物出土状況（東から）
	(3) SD02 7層遺物出土状況（南から）	(4) SD02 9層遺物出土状況（南から）
	(5) SD02 9層遺物出土状況（東から）	(6) SD02 9層遺物出土状況（東から）
図版 5	(1) SD02 実掘状況（東から）	(2) SD02 東壁土層（西から）
	(3) SD02 西壁土層（東から）	
図版 6	(1) SK09（西から）	(2) SK04（東から）
	(4) SK06（東から）	(3) SK05（西から）
	(5) SK07（西から）	(6) SK08（西から）
図版 7	出土遺物 I	
図版 8	出土遺物 II	
図版 9	出土遺物 III	
図版10	出土遺物 IV	
図版11	出土遺物 V	
図版12	出土遺物 VI	
図版13	出土遺物 VII	
図版14	出土遺物 VIII	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

2000年7月31日付けで、福岡市教育委員会施設計画課より今宿小学校プール改築工事に伴う当地における埋蔵文化財の有無についての事前審査願が本市教育委員会に提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、当地が埋蔵文化財包蔵地に含まれることにより、2000年8月23日に試掘調査を行った。その結果、弥生時代の遺構、遺物を確認した。その後、両者で協議を行い、建物建築部分の150m²を対象として記録保存のための発掘調査を実施することになった。今宿五郎江遺跡第5次調査は2000年12月19日より2001年1月31日まで行った。

2. 調査の組織

調査委託：福岡市教育委員会施設計画課

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男

同課第1係長 山口謙治（前任）力武卓治（現任）

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦（前任）川村浩旭（現任）

事前審査：同課事前審査係長 田中壽夫（前任）池崎謙二（現任）

同係文化財主事 瀧本正志（前任）大塚紀宜（現任）

調査担当：同課調査第1係文化財主事 星野恵美

調査作業：井上ムツ子 牛尾二三子 宮原邦江 結城千代子 西畠盛行 末松美佐子 井上忠久

當修一 土斐崎道人 西島マツ子 西嶋洋子 平田千鶴子 橋坂ミサヲ 西嶋利規

整理作業：馬場イツ子 橋口勝子 橋口三恵子 松田弘子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで、関係機関の多くの方々のご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

今宿五郎江遺跡の位置する今宿平野は糸島平野の東側に位置する小平野である。東側を背振山系より北に派生する飯盛・長垂山山塊によって早良平野と両され、南・西側は高祖山の山塊によって区切られる。北側の今津湾に面した海浜部には砂丘が弧状に展開し、後背地にはラグーンが広がる。また、平野東部には小河川によって小規模な扇状地が形成される。

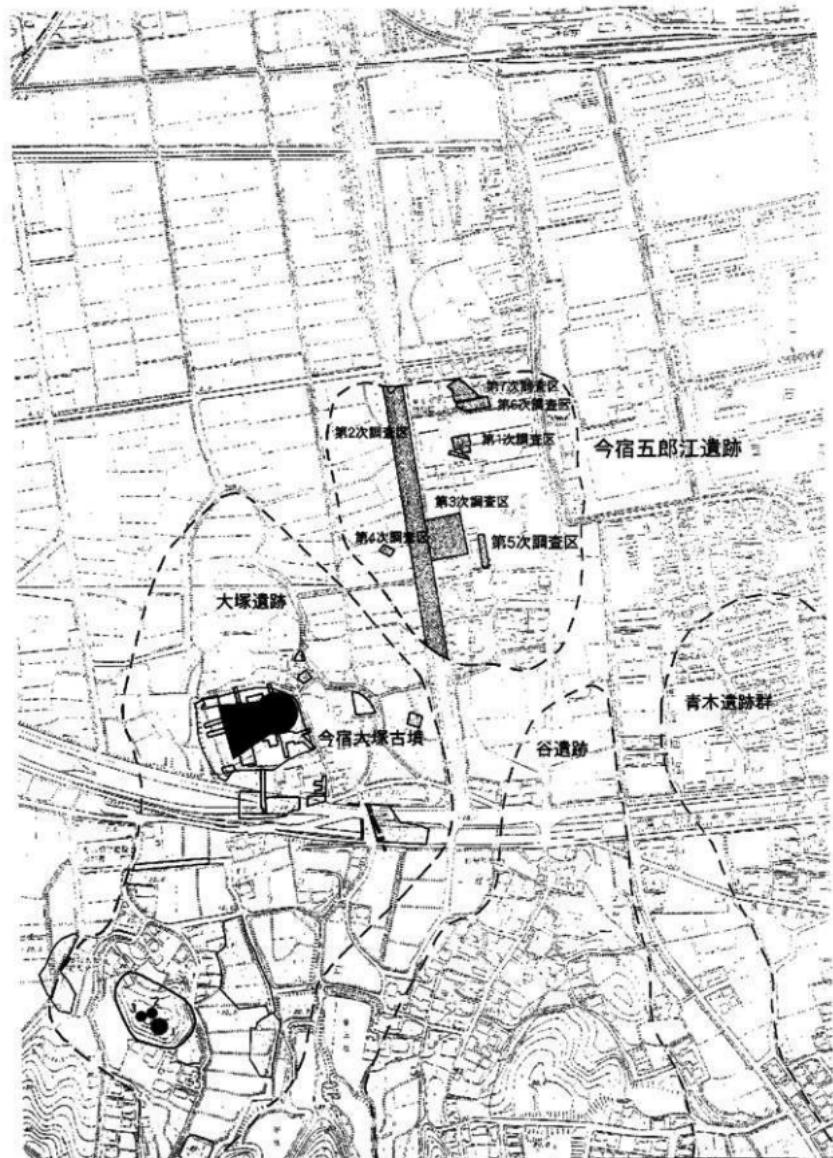
本遺跡は高祖山から北へ延びる丘陵の末端部にあたる低台地上に立地する。この低台地は第2次調査で検出されたSD100によって北台地と南台地にさらに区切られる。第1次調査によって西側の低地部分は耕地としての可能性が推察される。これまで今宿五郎江遺跡は第7次調査まで行われている。概観すると、第1次調査では弥生時代後期初頭～中葉の台地上を巡る環濠が検出され、多量の土器が投棄されていた。他にこの時期の遺構は確認されていないが、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落が確認された。第2次調査では前述した南台地で弥生時代中期中葉の堅穴住居・掘立柱建物で構成された集落が検出され、これは後期初頭まで続く。SD100もほぼこの時期にあたり、SD100が埋没した後期初頭には新たにSD50が掘削される。SD100は台地を開拓する谷状の流路と考えられ、ここから小銅鏡が出土している。他に鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物をもつ集落が確認される。第3

次調査では弥生時代中期後半から後期初頭にかけての溝（SD02）が検出され、この溝にも多量の土器が投棄されていた。このSD02は第2次調査で確認されたSD100に合流すると考えられる。また、今回の第5次調査でもこの溝の続きを確認した。この溝にはほぼ直交する南北方向に走る同時期の溝（SD01）も検出されている。他に弥生時代後期の土坑、掘立柱建物、古墳時代前期の整穴住居、古代の掘立柱建物がある。第4次調査では台地の周縁部から弥生時代中期末～後期初頭の土坑、ピットを検出し、台地落ち際から谷部にかけての包含層からは後期前半を主体とした遺物が出土する。また、包含層中からは赤色を呈したガラス玉も出土する。第6・7次調査は遺跡の北側に位置し、鎌倉時代～室町時代にかけての遺構が検出されている。今回報告する第5次調査は遺跡中央（北台地）に位置し、西側には第3次調査地点が隣接する。遺構面の標高は約5mを測る。

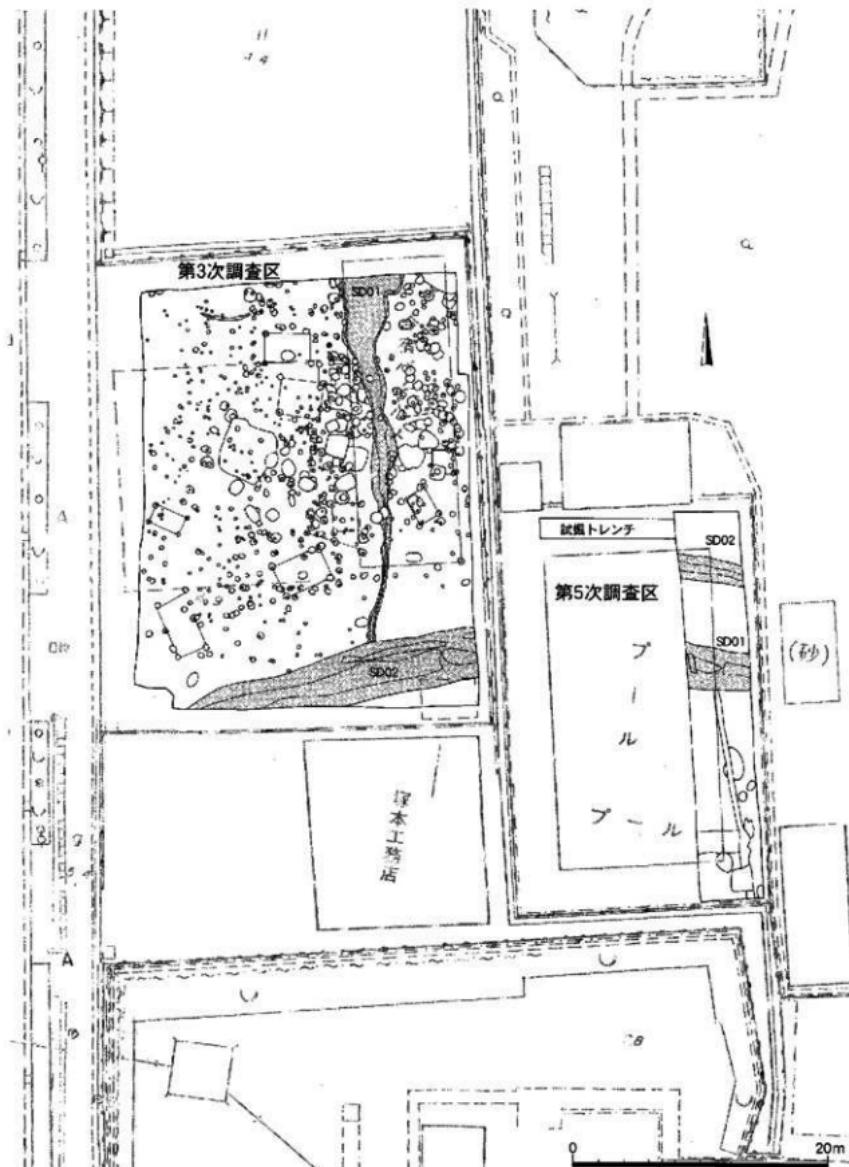
周辺の弥生時代の遺構は前期～中期にかけての玄武岩製石斧の製作所として知られる今山遺跡が北西約2kmのところに立地する。北側の砂丘上の今宿遺跡群・生ノ松原遺跡では弥生時代前期～中期の箱式石棺墓や甕棺墓が多数見つかっている。南東側の今宿青木遺跡で弥生時代中期～後期の集落、南西約500mに所在する大塚遺跡（今宿高田遺跡）では弥生時代後期後半の堅穴住居が検出される。古墳時代になると、平野と丘陵地帯には今宿大塚古墳、九隈山古墳、若八幡古墳、龜崎古墳などの前方後円墳が多数造営される。旧石器時代～绳文時代の遺跡はまだ確認されていないが、遺物は少数であるが、散見されている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第2図 今宿五郎江遺跡位置図 (1/5,000)



第3図 今宿五郎江遺跡第3次調査・第5次調査位置図 (1/400)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

第5次調査地点は今宿五郎江遺跡の中央部に位置し、調査前の標高は約6mを測る。現況はプール建設に伴い、1m近い盛土が行われていた。遺構面の標高は南側で5.2m、北側で4.6mを測り、南側から北側にかけて緩やかに傾斜している。調査区の基本層序は第1層—バラス混じりの明赤褐色土（盛土）、第2層—暗青灰色粘質土・黄色土・灰色土（水田耕作土）、第3層—黄褐色粘質土・灰褐色粘質土・灰黄色粘質土のローム層（地山）である。遺構は第3層の上面で検出した。中世の土坑6基・溝1条・少數のピット、弥生時代中期末～後期初頭の溝2条である。中世の遺構の遺存状況は悪く、遺構は大きく削平されていると考えられる。ピットの覆土は中世の土坑と類似しており、遺物からも時期は中世に位置づけられる。弥生時代中期末～後期初頭の溝は、調査区西側で行われた第3次調査で検出されている溝に統くものである。遺物は弥生土器がコンテナ150箱、須恵器・土師器・青磁・白磁の小片、石製品、石器、鐵器が出土する。

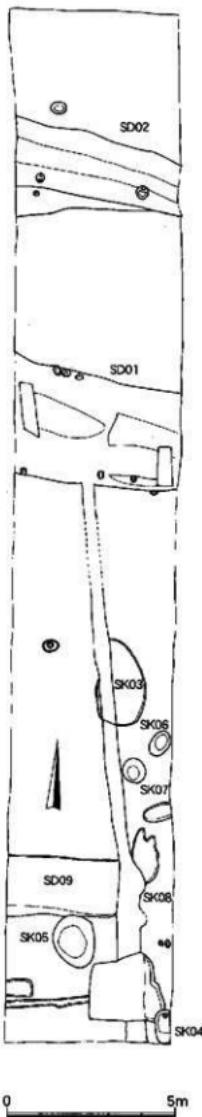
調査は平成12年12月19日に重機による表土剥ぎを行い、遺構精査、掘り下げを開始した。高所作業車により全景写真を撮影し、平成13年1月31日に重機で調査区を埋め戻し、調査を終了した。

2. 遺構と遺物

1) 溝

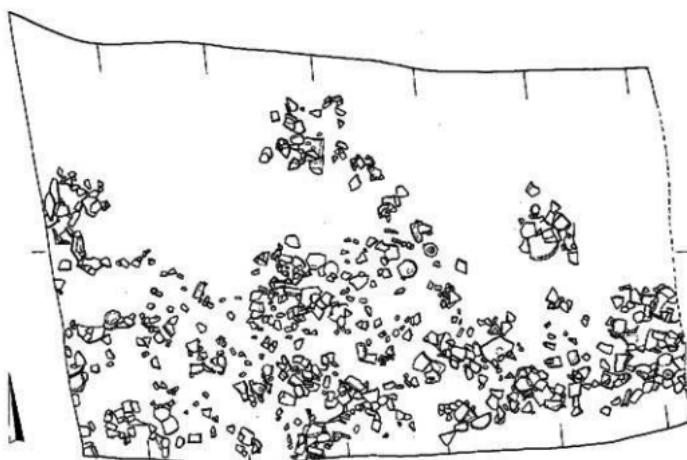
SD01（第5～7図、図版1～3）

調査区の中央を東西方向に走る溝である。長さ約5mを検出した。この溝は西側で調査された第3次調査区の溝に統くものと考えられる。東側は調査区外へ延びる。溝は緩やかに北側に弧を描き、規模は東側で幅2.8m、深さ50cm（標高4.5m）、西側で幅3.2m、深さ80cm（標高4.1m）を測る。西側の方が幅広で、深くなる。溝の断面は「U」字状を呈する。溝には大量の土器が投棄され、西壁の土層図（第7図）からは、土器を含んだ層と層の間に遺物をほとんど含まない層がみられる。東壁の土層図では遺物の含まない層は見られない。遺物を含んだ層は西壁の土層でいくと、上から21層（暗褐色土）、9層（茶褐色土）、10層（黄褐色土）、11層（灰色粘質土）である。21層は北側ではほとんど検出されず、南側に偏っている。特に東側ではそれが顕著である。土器は南側の溝の壁に貼り付くように出土している。層の厚さも北側に較べ、南側がわずかに厚くなっている。このことからこの土器群は南側からの廃棄が考えられる。土器は破片が多く、大量の弥生土器に混ざっ

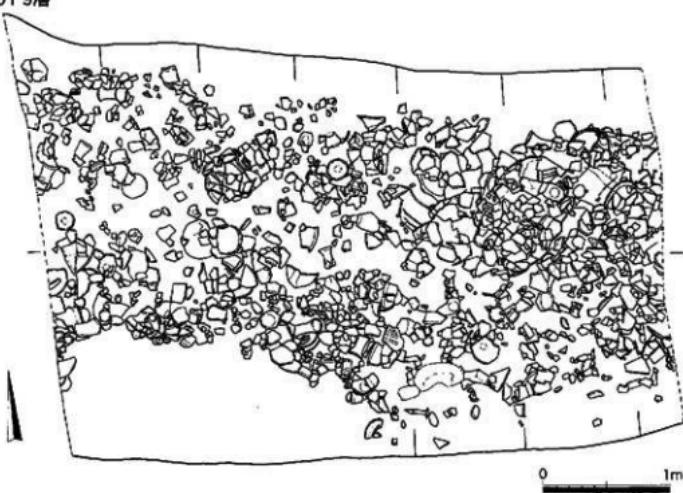


第4図 第5次調査遺構配置図 (1/150)

SD01 21層

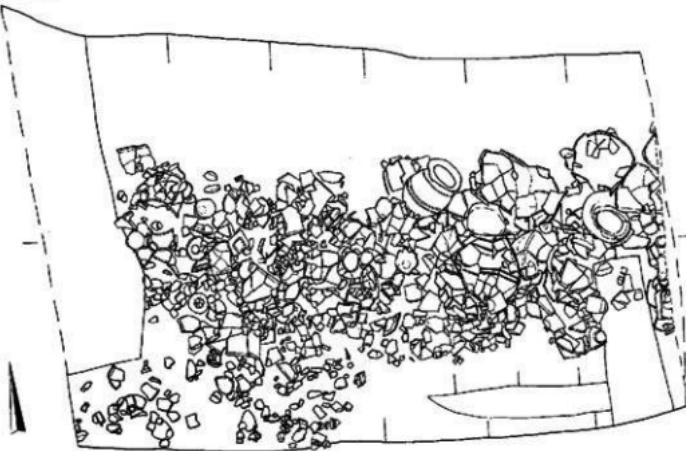


SD01 9層

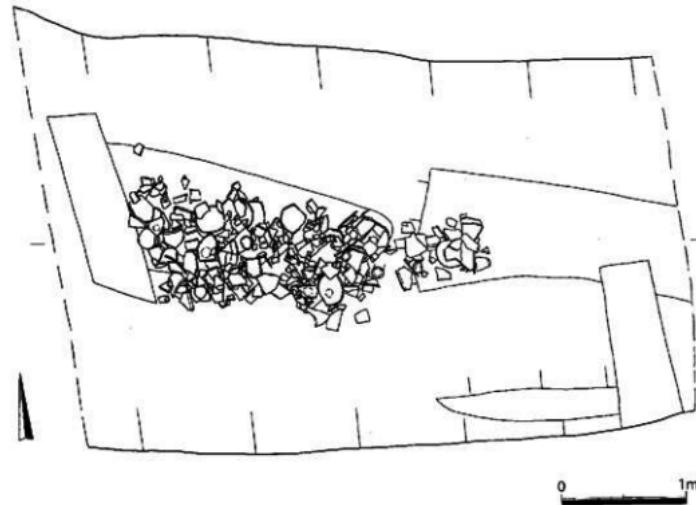


第5図 SD01 21層・9層遺物出土状況実測図 (1/40)

SD01 10層



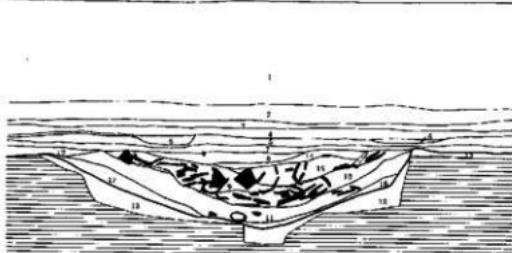
SD01 11層



第6図 SD01 10層・11層遺物出土状況実測図 (1/40)

SD01 東壁

H=6.60m

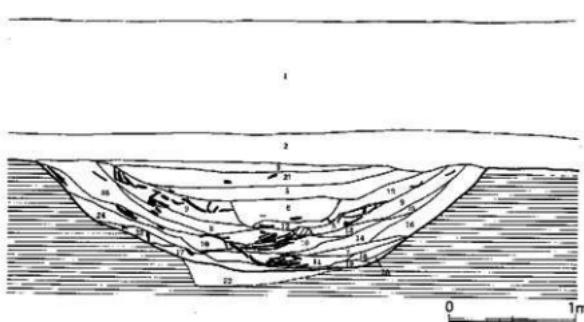


SD01 東壁

1. 暗赤褐色土、パラス(底土)
2. 暗赤褐色粘土(砂質土混入)
3. 黄褐色土(底土)
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土(やや硬い)
6. 黄褐色土(砂質土混入)
7. 黄褐色粘土(底土)
8. 雜褐色土(遺物少含む)
9. 雜褐色土(遺物、炭化物多く含む)
10. 黄褐色土(底土)下層に多く含む)〈西壁10層〉
11. 黄褐色土(底土)下層に多く含む)〈西壁11層〉
12. 黄褐色土(底土)下層に多く含む)〈西壁12層〉
13. 黄褐色土(底土)〈北山〉
14. 雜褐色土(底土)少含む)〈西壁21層〉
15. 黄褐色土(底土)少含む)
16. 黄褐色土(底土)少含む)
17. 黄褐色土、砂土(遺物少含む)
18. 雜褐色粘土

SD01 西壁

H=6.40m



SD01 西壁

1. 暗赤褐色土、パラス(底土)
2. 暗赤褐色粘土(砂質土混入)
3. 黄褐色土(底土)
4. 黄褐色粘土、黄褐色粘土(地山)
5. 黄褐色土(底土)遺物少含む)
6. 黄褐色粘土(底土)遺物少含む)
7. 黄褐色粘土
8. 黄褐色土
9. 雜褐色土(遺物、炭化物多く含む)
10. 黄褐色土(底土)下層に多く含む)
11. 黄褐色土(底土)下層に多く含む)
12. 雜褐色土(底土)少含む)
13. 黄褐色土(底土)少含む)
14. 黄褐色土(底土)少含む)
15. 黄褐色土
16. 黄褐色土
17. 黄褐色土、灰黑色粘土(炭化物多く含む)
18. 黄褐色土
19. 从色粘土
20. 黄褐色土
21. 黄褐色土(遺物多く含む)
22. 黄褐色土(地山)
23. 黄褐色土
24. 黄褐色土
25. 黄褐色土

第7図 SD01 上層実測図 (1/40)

て繩文土器が1点(34)出土する。他に石製品、鑿と思われる鉄製品が出土する。時期は後期初頭である。9層は厚さが20cm程あり、隙間無く、大量の土器が出土した。また、炭化物も多く見られ、3~6cmと厚く堆積する。西側ではこの9層が堆積し、21層が堆積する前に、再度掘削された状況が窺える。9層では土器は全面に出土するが、やや南側で少なくなる。21層に較べ北側の方に土器は多く貼り付いているよりも見られるが、土層は北側からの明確な投棄を現していない。この段階になると、小型の鉢の出土が顕著になる。弥生時代中期末の遺物も見られるが、大半は後期初頭のものである。その下の10層では完形品の土器が多く出土する。特に北西の一角に広口壺、袋状口縁壺、器台が集中する。完形品のため、上の9層の段階から出土している土器も多い。最も厚い部分で20cmを測り、南側の壁面に沿って堆積する。北側の壁面ではみられない。10層は南側からの廃棄が考えられる。遺物は中期末~後期初頭のものが見られる。石器も多く出土しているが、その中に32×25×13cm、14.8kgの玄武岩が出土した。二次加工等の痕跡は窺えないが、台石に使用した可能性は考えられる。その直下の11層の遺物は西側に集中する。図上では大部分を取り上げてしまっているが、東側では閑散となる。この層までいくと、水が少量しみ出すようになる。弥生時代中期末の土器が主体となり、石器も

少量であるが出土する。最下層の17層（西側）では灰黒色砂質土と灰黒色粘土となる。この層には多くの炭化物が含まれる。遺物は少量出土する。最下層では水性堆積物がみられ、水の流れている痕跡が窺える。溝の底面の高さからいくと、東から西に向かって流れている。その後、上器の投棄を始めた頃には水の流れはほとんどなかったと考えられる。西側の第3次調査区では溝の底の標高は西側が3.85m、東側が3.65mを測り、東側の方が低くなっている。その部分からは、木器が出土している。東側から流れてきた水がこの部分に溜まっていた痕跡が窺える。この溝の掘削時期はこの17層から出土する弥生時代中期木かやや先行する時期と考えられる。後期初頭には埋没し、溝としての機能は果たしてなかつたと考えられる。

21層出土遺物（第8～10図、図版7）

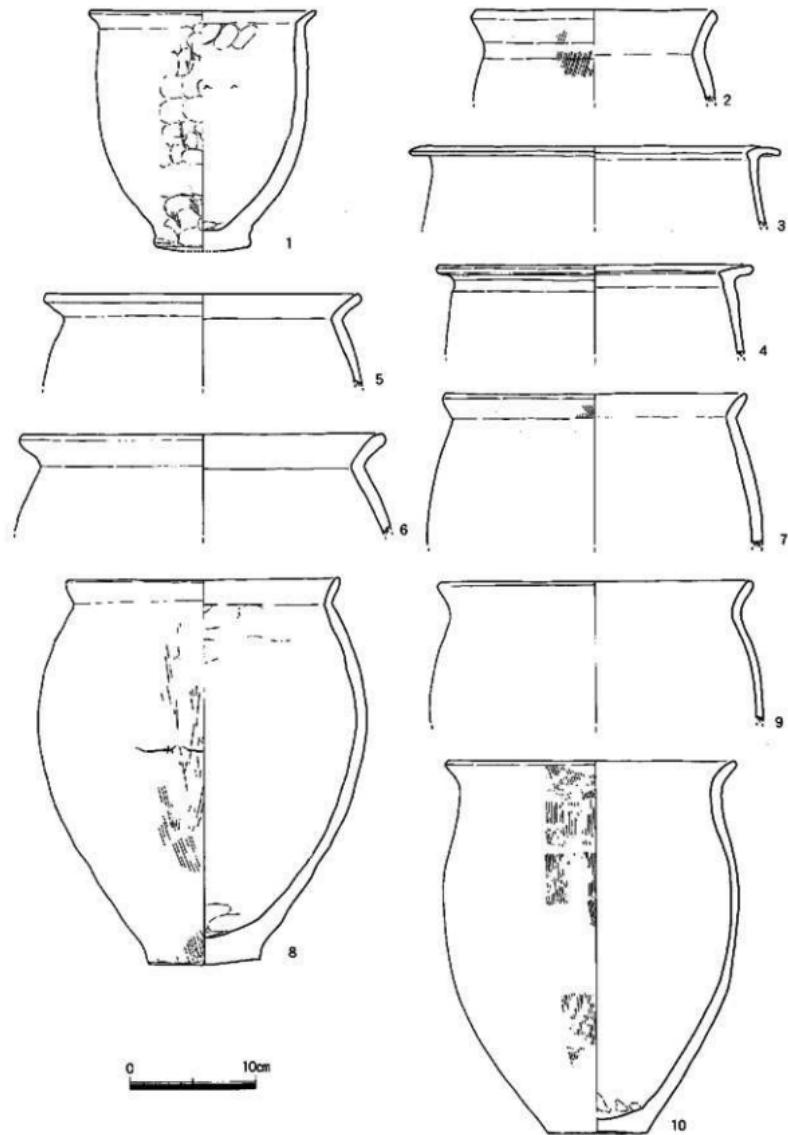
1・2は口径20cm以下の小型の壺である。ともに器壁が厚く、内面の稜はやや不明瞭である。1は指押さえの痕跡が内外面に多く残る。また、外面には煤が付着する。3・4は逆「L」字口縁を有し、3の端部は丸味をもって下方へ垂れる。4の口縁部は内傾し（B）、口縁部内面下の強い横ナデによって内唇部が内側に張り出している。5～10は口縁部が「く」字状を呈する壺で、5・6は内面の屈曲部が明瞭（E-1）、7・8はやや不明瞭（E-2）となる。9・10に関しては内面の稜はなくなり、長く上方に引き延ばした口縁（E-3）となる。6の口縁端部は肥厚して丸くおさめている。8は胴部が中位よりやや上方で張り、底部は凸面気味の平底を呈し、胴部へ内湾気味に立ち上がる。10は胴部の張りが弱く、口縁から緩やかな「S」字を描きながら底部に至る。底部は平底である。11～13は胴部が張り、口縁下に三角突帯を巡らすものである（C）。11は大型の壺で、口縁部内面が凹面を呈し、端部は丸くおさめている。また、口縁部内面下の強い横ナデによって内唇部が内側に張り出している。

14は広口壺の口縁部片である。口縁部は鋤先状を呈し、やや外傾する。口唇部には横方向に1条の沈線を巡らした後、工具による刻目を施している。外面には赤色顔料を塗布し、口縁部から頸部にかけて暗文を施しているが、ほとんど遺存していない。15・16は複合口縁壺の口縁部片である。15は内外面に緩い稜線をもち、内面頸部付近には強い指押さえが残る。16は頸部のすぼまりが急で、口縁部は逆「く」字状を呈する。外面には煤が多量に付着する。

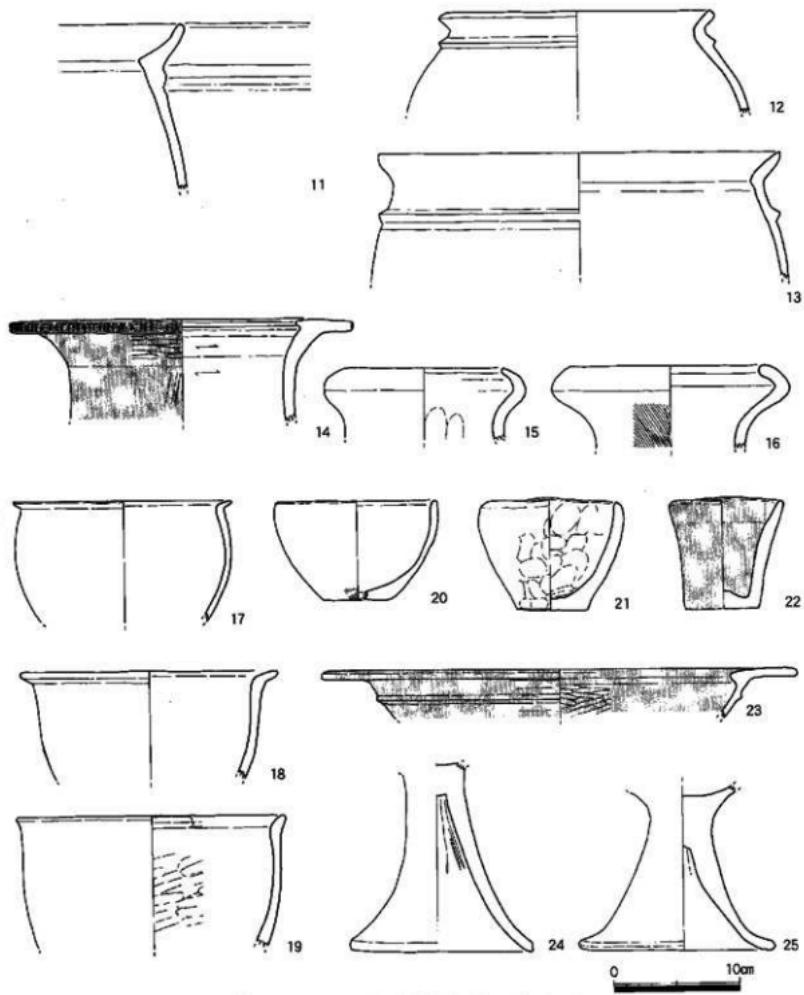
17～22は鉢である。17は口縁部を短く「く」字状に屈曲させている。内外面の稜線は緩く、体部に丸味をもつ。18は口縁部の屈曲は弱く、口縁端部は丸くおさめている。内外面に煤が付着する。19は口縁部を短く外反させる。内面は灰黒色を呈し、体部下位には丁寧に横方向にナデた痕跡が残るが、内面上位から外面にかけては器面が荒れている。20～22は素口縁を呈する小型の鉢である。20は平底の底部から外方へ開き、胴部から口縁部へ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。21は完形品で、平底の底部から内湾気味に胴部へ移行し、口縁部は内傾して端部は丸くおさめている。器面には指押さえの痕跡が残り、内外面には煤がわずかに付着する。22は完形品で、口径8.7cm、器高8.8cm、底径5.8cmを測る。口径に比して身の深い鉢で、平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面には赤色顔料の付着がわずかに見られ、煤も付着する。

23～25は高杯である。23は鋤先状の口縁部を呈する杯部片である。体部は丸味をもち、口縁部はやや内傾する。口縁下位に三角突帯を巡らし、体部内面には横方向の研磨痕が見られる。内外面には赤色顔料を塗布する。胎土は細かい金雲母、白色砂粒を含み、精良である。24・25は長脚の脚部片である。24は細身で底部は緩やかに開くが、25は太身で、脚端部が大きく外方にラッパ状に開く。どちらも内面にシボリ痕がみられる。

26～30は円筒形の器台である。26・27は小型で、上下対称に近い器形を呈する。26は完形品で上位外面には板状のものでナデた痕跡が残る。内外面ともに指押さえで調整する。わずかであるが、内外



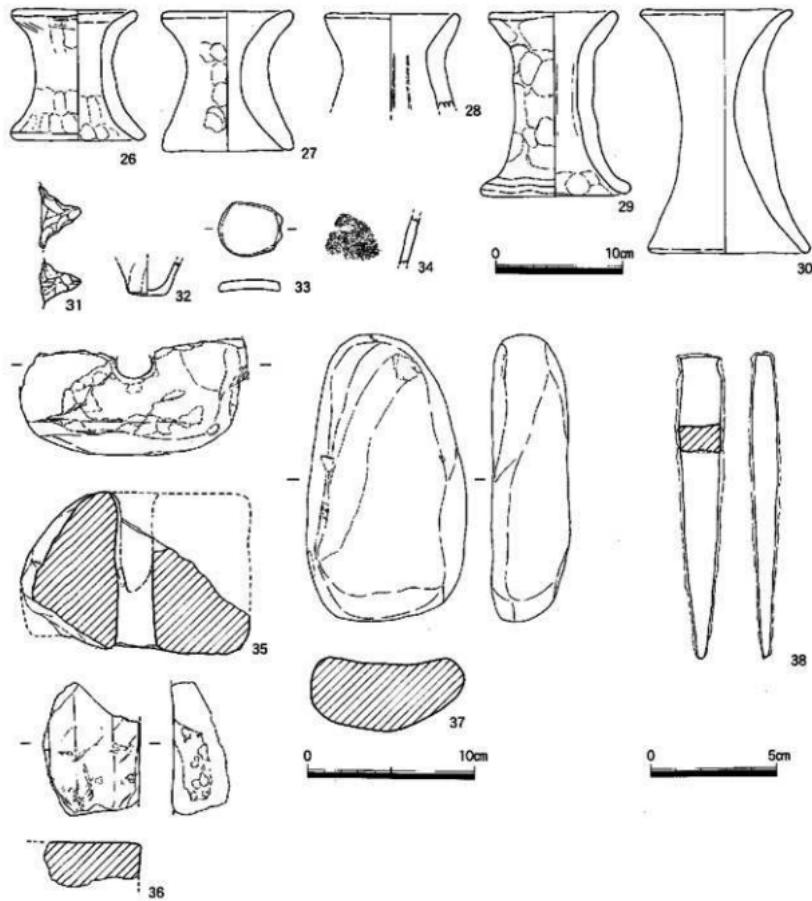
第8図 SD01 21層出土遺物実測図① (1/4)



第9図 SD01 21層出土遺物実測図② (1/4)

面に煤の付着がみられる。28・29は中型で、28は受部が明瞭となる。内面にはシボリ痕が残る。30は大型で、一部欠損するがほぼ完形品である。器面が荒れ、調整は不明であるが、指押さえ等の痕跡は残っていない。

31は把手の破片である。下図面の把手下方には煤の付着が見られる。指押さえで調整する。32は手捏ね土器の底部片である。底部は凸面気味の平底を呈し、外面には指押さえが残る。33は円整形土製品で、ナデで仕上げる。



第10図 SD01 21層出土遺物実測図③ (35~37は1/3, 38は1/2, 他は1/4)

34は1点のみの出土であるが、縄文上器の胸部片と思われる。外面上位には2個所連続して擦んだ痕跡が残る。胎土には1~3mm大の滑石を多量に混入し、わずかながら金雲母、赤褐色粒も含む。阿高系の土器と思われる。外面は赤褐色、内面はやや黒味を帯びた褐色を呈する。

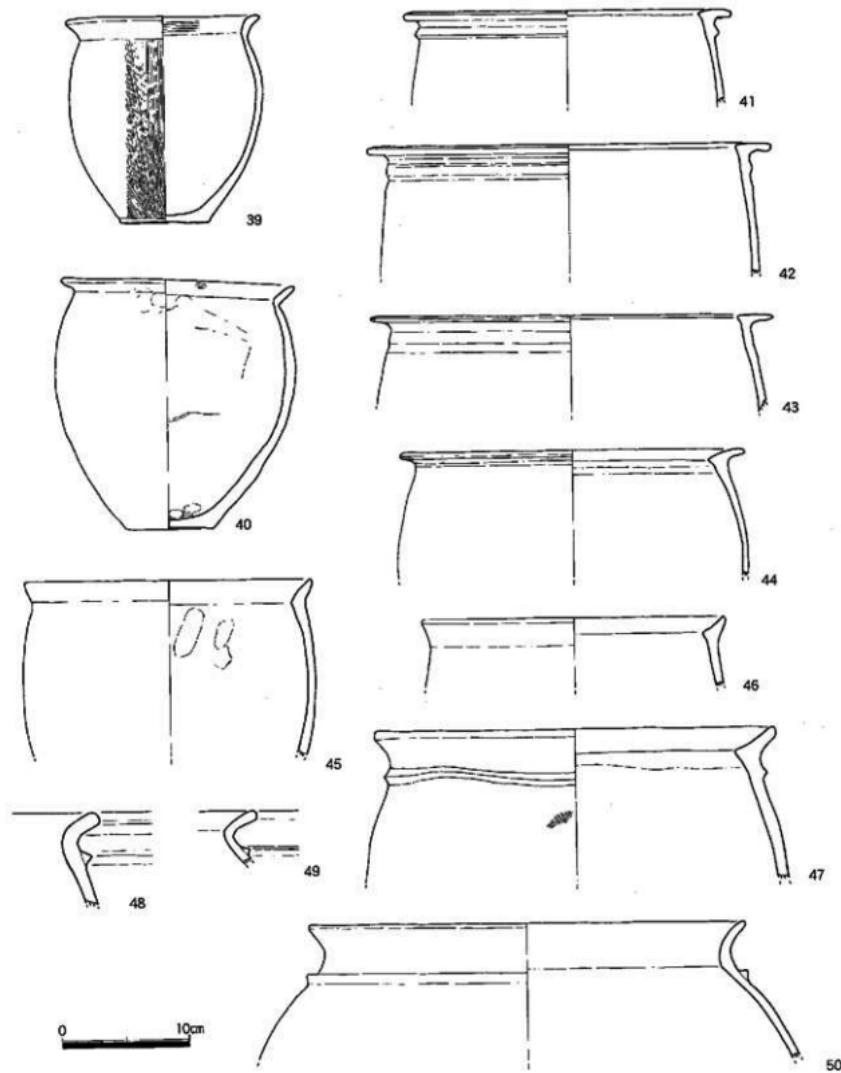
35~37は石器である。35は滑石製で、方形気味の環状を呈し、中央部に両面からの穿孔をもつ石錐である。約1/2の遺存で、断面は台形状をなす。重さは922.34gを量る。36は粘板岩製の砥石片で、砥面には擦痕が残る。37は玄武岩製の石皿で、中央部が凹状に窪む。

38は鉄製の盤と思われる。断面は方形を呈し、上部側面がわずかに窪んでいる。上部は平坦で、先端にかけて徐々に細くなっている。長さ12.1cm、幅1.6cm、厚さ1.1cmを測る。

9層出土遺物（第11～23図、図版7～9）

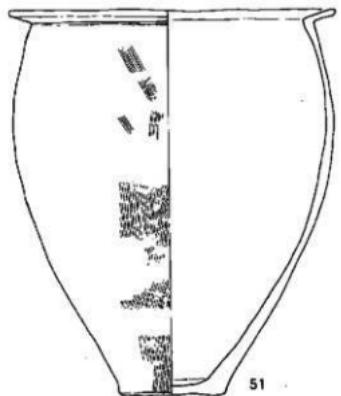
39～73は甕である。39・40は小型の甕で、39は口径15.2cm、器高16.4cm、底径7cmを測り、ほぼ完形品である。口縁部は胸部から緩やかに外反し、端部で肥厚する。外面ともに弱い稜線が入る。口縁部内面は横向方向の刷毛目、胸部外面には縱方向の刷毛目で調整する。外面に煤の付着が見られる。40は口径17.9cm、器高19.8cm、底径6.9cmを測り、口縁部を一部欠損する。口縁部は「く」字状を呈し、内面には稜線が入る。外面にわずかに煤の付着が見られる。41～44は逆「L」字口縁を有し、41～43は上面がほぼ水平（A）、44は内傾している（B）。41・42は口縁部下に三角突帯を持つが、41は貼り付けによって、42は突帯の上下を強く横ナデすることで突帯を作り出している。また、41の口縁端部は丸味をもって下方へ垂れる。43は口縁部下に強い横ナデを行い沈線状に窪ませている。44の口縁はやや丸味をもち、端部は丸くおさめる。また、口縁部内面下の強い横ナデによって内唇部が内側に張り出す。45・46は口縁部が上方に短く立ち上がるものである（D）。45の口縁部内面はやや凸面を呈し、端部は尖り気味におさめている。外面には煤の痕跡がある。46は口縁部内面が凹面を呈し、端部は尖り気味におさめ、内唇部は鈍く張り出す。47～50は胸部が張り、口縁下に三角突帯を巡らす甕の口縁部片である（C）。47は口縁部内面が凹面を呈する。口縁部下の三角突帯は上下に振りながら歪んで貼られている。48～50は口縁部が緩やかに外反し、49・50の内面には弱い稜線が残る。48・49の口縁部は肥厚し、端部は丸くおさめる。50の内外面には煤の付着が見られる。51～67は口縁部が「く」字状を呈する甕である（E）。51～59は内面の屈曲部が明瞭（E-1）、60～62はやや不明瞭（E-2）となる。63～67は内面の稜はなくなり、長く上方に引き延ばした口縁（E-3）となる。（E-1）のうち、51～55の口縁部内面は直線的で、56～59は凸面を呈する。胸部は54・57・59のように張るものと、55のように口縁部からほとんど膨らまず、底部に至るもの、その中間のものに区分できる。56は口径22.5cm、器高34.5cm、底径8.2cmを測るが、大きく器形が歪んでいる。（E-2）の口縁も（E-1）同様、直線的なもの（60・62）と凸面を呈するもの（61）がある。61はほぼ完形品で、口径27.4cm、器高31.2cm、底径9.7cmを測るが、56同様、大きく歪んでいる。「く」字状を呈する甕の大部分は口縁の中心に底部がくるものは少量で、歪んだものが多い。（E-3）のうち、63は小型の甕で、復元口径は19.2cmを測る。63～65はやや脛が張り、66・67は長脛で、66に至っては胸部がほとんど張らず、底部に至る。66は脛部が部分的に欠損するが、ほぼ完形である。口径23.8cm、器高28.2cm、底径8.1cmを測り、わずかに歪んでいる。（E）はすべて内面に焦げ、外面に煤が付着する。68～73は底部片である。すべて内面に焦げ、外面に煤が付着する。

74～84は広口壺である。74～77の口縁部は鷲先状を呈し、76はやや外傾、他は内傾する。74は頸部のつけねと胸部中位に三角突帯を巡らすが、胸部中位のものは長く下に垂れたような突帯である。外面全面には細かい刷毛目調整を行うが、口縁部内面も横向方向の刷毛目が残っている。底部は刷毛の小口を強く当てているため、円盤状となっている。外面には煤が多量に付着する。口径23.7cm、器高39.3cm、底径8.8cmを測る。75は胸部が一部欠損するが、ほぼ完形品である。口径19.4cm、器高32.3cm、底径9cmを測る。器壁は磨滅しているが、74同様、細かい刷毛目調整が部分的に残る。胸部内面には粗い横方向の刷毛目調整を施す。頸部のつけねに低い三角突帯をもつ。鷲先状口縁の内唇部は複数の横ナデによって、張り出しが鈍くなっている。口縁部内面から脣部外面にかけては部分的に赤色顔料が残る。また、少量であるが、頸部内面から脣部外面にかけては煤が付着する。76は大型の壺の口縁部片である。口唇部には横方向に1条の沈線を巡らす。頸部外面には暗文を施し、口縁部内面から外面にかけては赤色顔料を塗布する。77は頸部のつけねに三角突帯が巡り、外面に煤がわずかに付着する。78の口縁部は大きく内傾し、脣部の張りがなく、脣部に移行する。頸部下には「M」字状突帯が巡

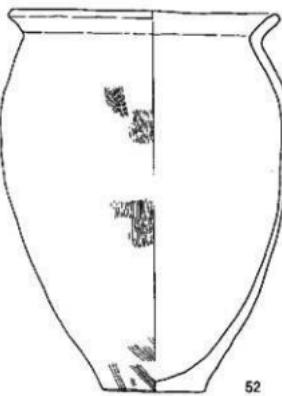


第11図 SD01 9層出土遺物実測図① (1/4)

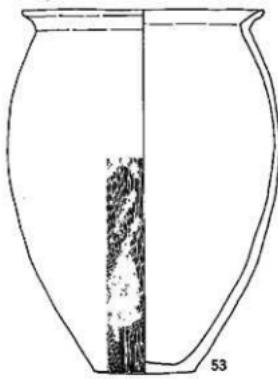
る。口縁部内面から外面にかけて赤色顔料が塗布される。また、内外面に煤が付着する。79~84は口縁部が素口縁をなす。79は頭部のつけねに三角突帯を巡らす。器壁は磨滅し、底部外面付近に縱方向



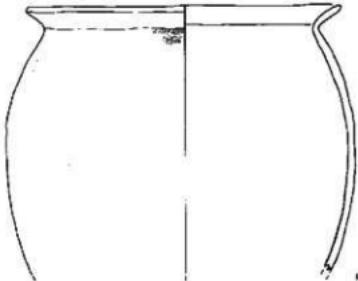
51



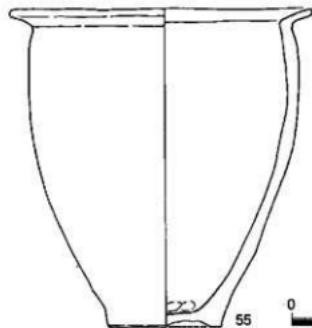
52



53

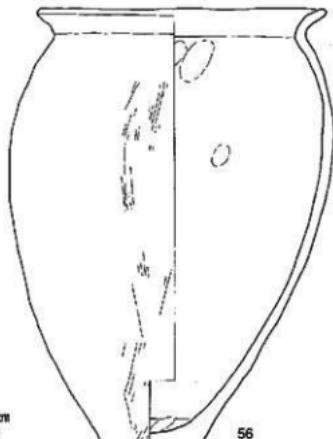


54



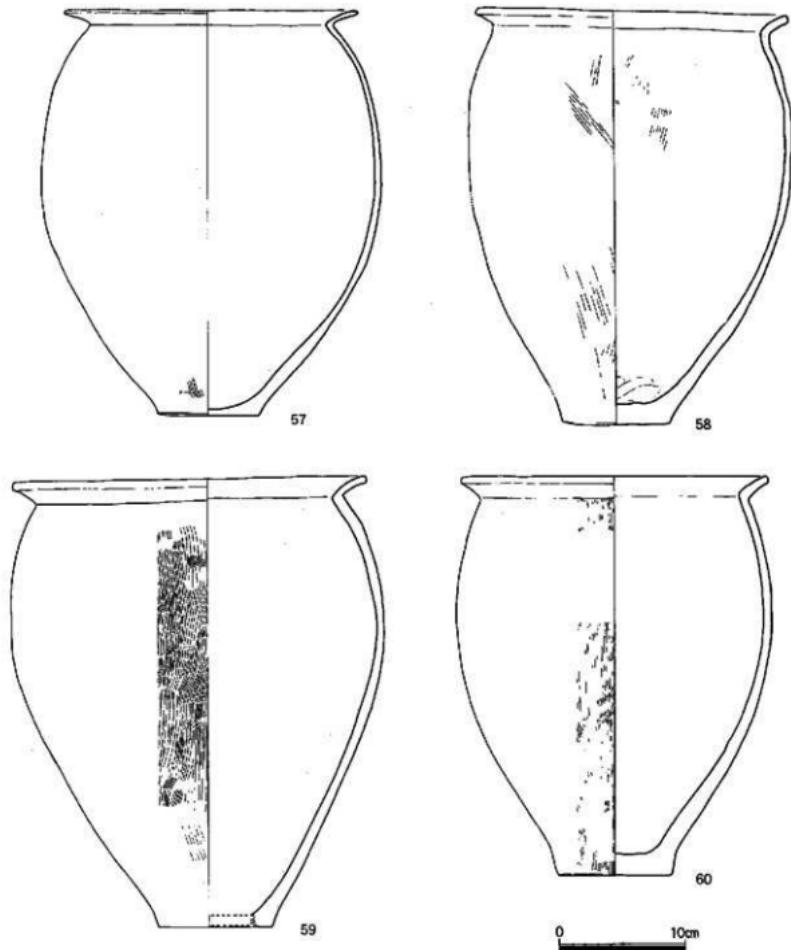
55

0 10cm



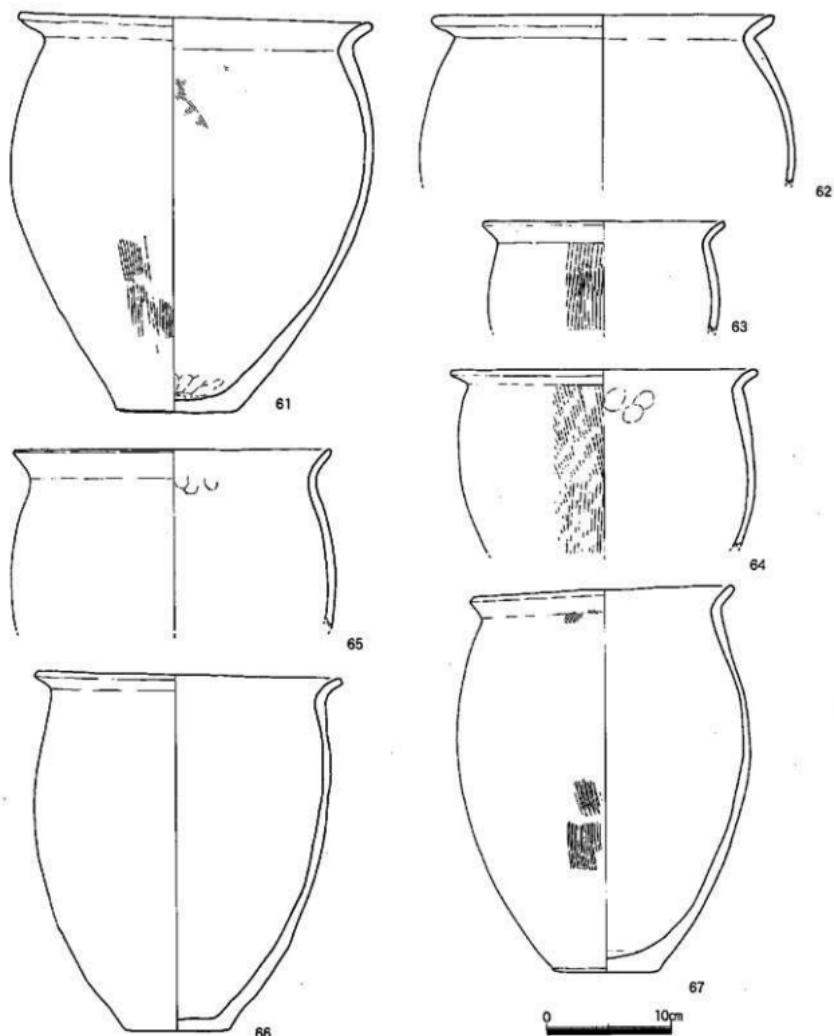
56

第12図 SD01 9層出土遺物実測図② (1/4)



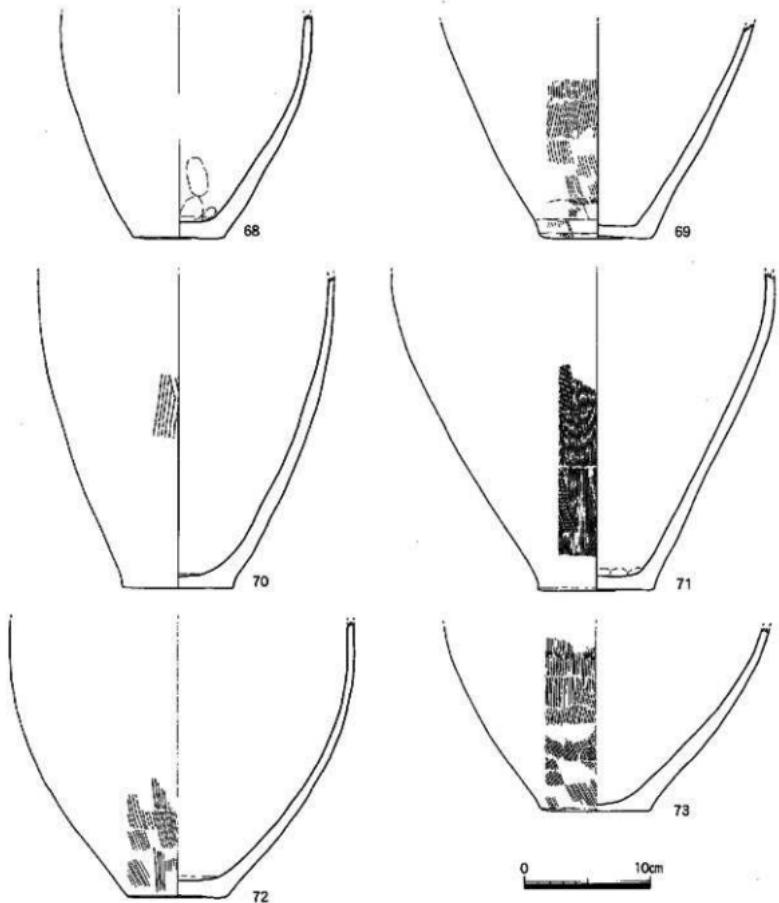
第13図 SD01 9層出土遺物実測図③ (1/4)

の研磨調整が残る。内外面には煤が付着する。口径22.5cm、器高30.3cm、底径8.8cmを測る。80は肩部の張りがなく、ゆるやかに胴部に移行し、胴部の張りが大きい。肩部下には三角突帯が巡り、外面にはわずかに煤が付着する。81は口縁部片で、口唇部には工具による刻目を斜めに施す。82の頸部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。頸部のつけねと胴部には三角突帯を巡らし、胴部はほぼ球状を呈する。ほぼ完形品で、口径24.8cm、器高34.5cm、底径10cmを測る。83は最大胴部径が中位より上にあり、頸部は締まり、口縁部は直接頸部から外に閉く。外面はナデ、口縁部は横ナデ、内面底部付近は指押さえが残るが、上位はナデ調整である。外面には赤色顔料が塗布される。また、わずかに煤



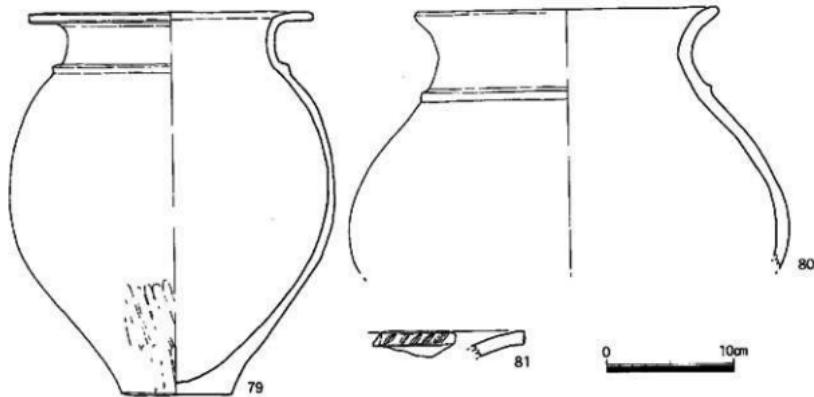
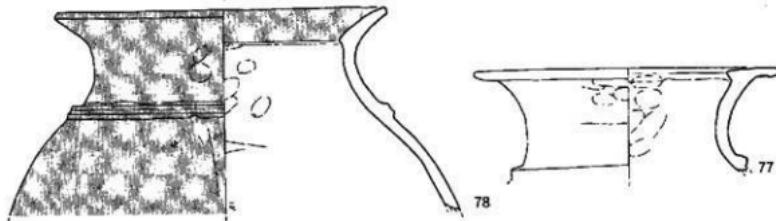
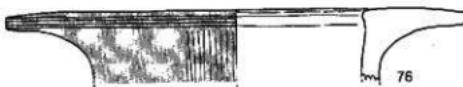
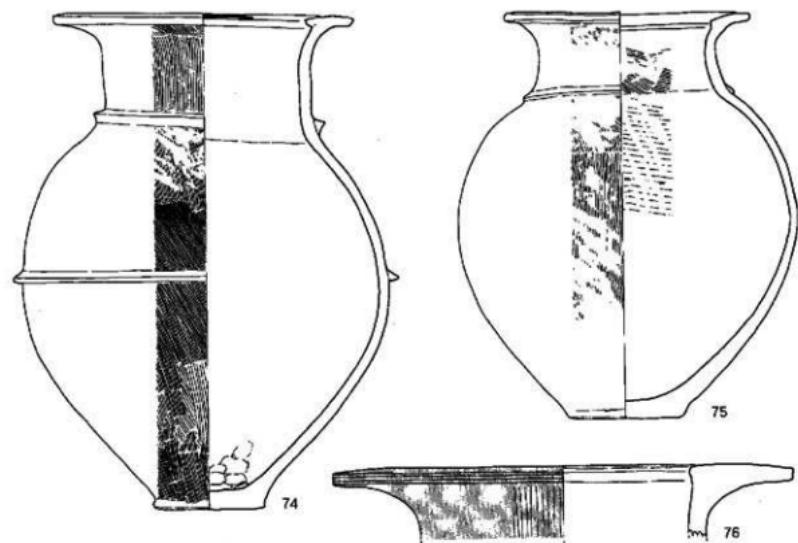
第14図 SD01 9層出土遺物実測図① (1/4)

が付着する。84は頸部があまり締まらず、直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。頸部外面から口縁部内面にかけて部分的に赤色顔料が残る。85は直口壺で、口縁端部は打ち欠いている。短い口縁部をもち、ナデ肩の体部で底部に向かって直線的にすぼまる。内外面に煤が付着する。86は底部片である。87は大型で、口縁部を欠損する。球状の胴部中位に太い「M」字状突帯が巡る。外面底部付近に

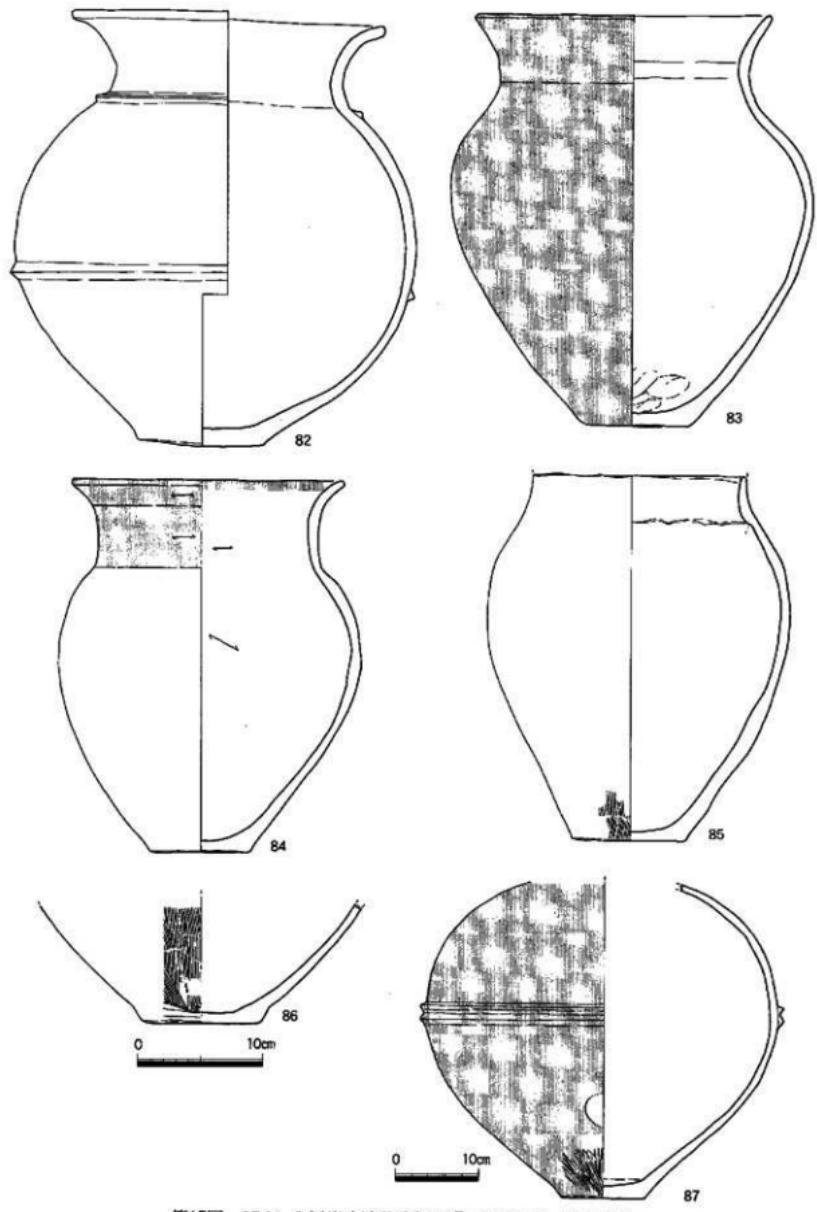


第15図 SD01 9層出土遺物実測図⑤ (1/4)

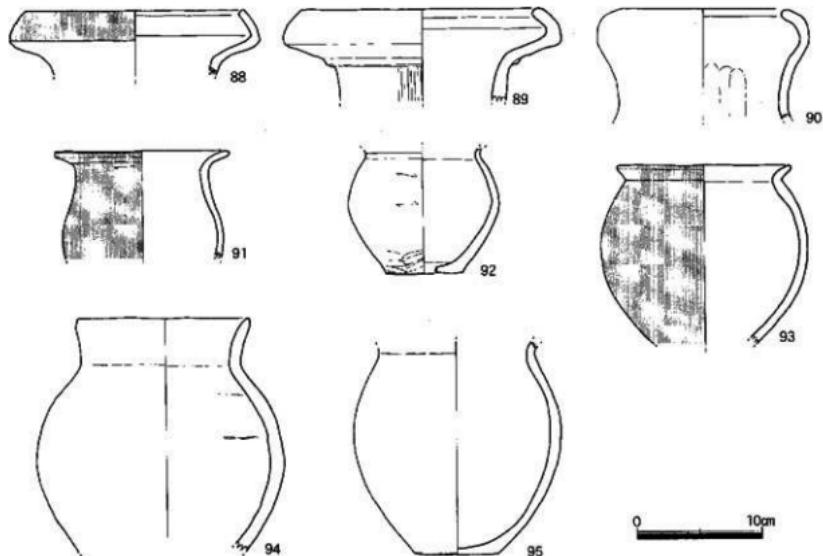
は斜方向の研磨調整が見られる。外面には赤色顔料が塗布される。頸部下半には径約5cmの内側から打ち欠きが見られる。88・89は複合口縁壺の口縁部片である。頸部のすぼまりが急で、口縁部は明瞭な稜をなす。89は頸部上位に鈍い三角突帯が巡る。90は袋状口縁壺の口縁部片である。頸部はほとんど締まらず、胴部に至ると考えられる。91～95は小型品である。91は偏球状の頸部に口縁部が緩やかに外反する。外面には赤色顔料が塗布され、内面にも一部垂れている。92・93は球状の体部に短く「く」字状に外反する口縁部を有する。92の外面にはわずかに赤色顔料の痕跡がある。93の外面は赤色顔料が施される。94は球状の体部から口縁部が緩やかに外反する。器壁が厚く、重量感がある。色調はにぶい灰褐色を呈する。95は口縁部を欠損し、やや胴長の体部を呈する。



第16図 SD01 9層出土遺物実測図⑥ (1/4)

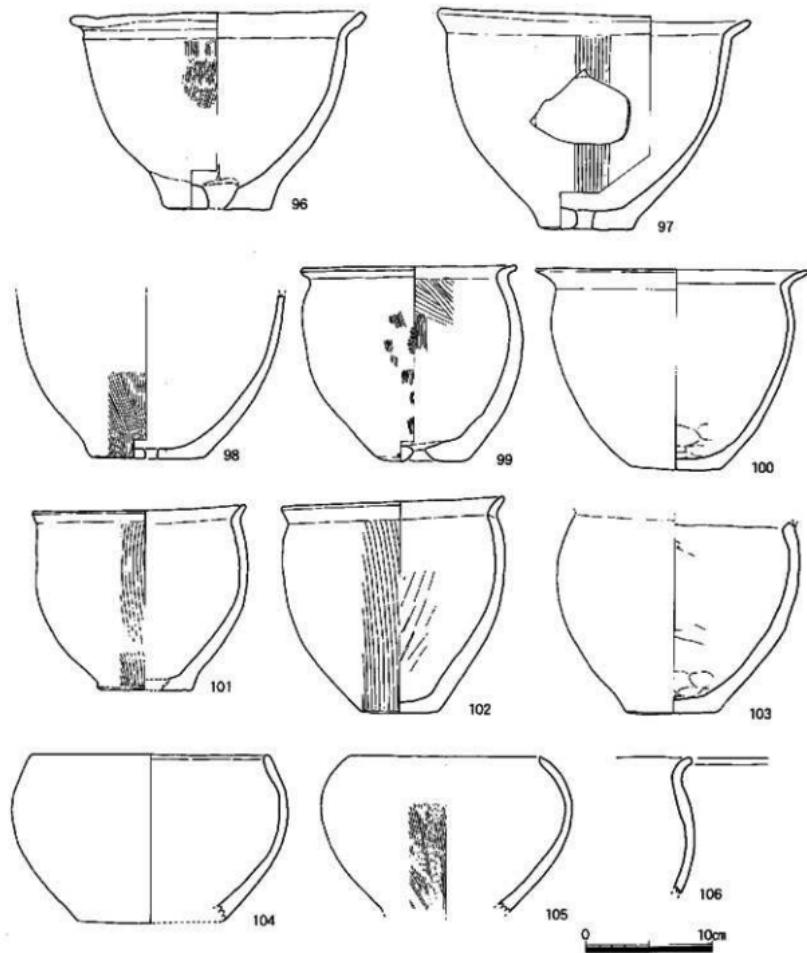


第17図 SD01 9層出土遺物実測図⑦ (87が1/6, 他は1/4)



第18図 SD01 9層出土遺物実測図⑧ (1/4)

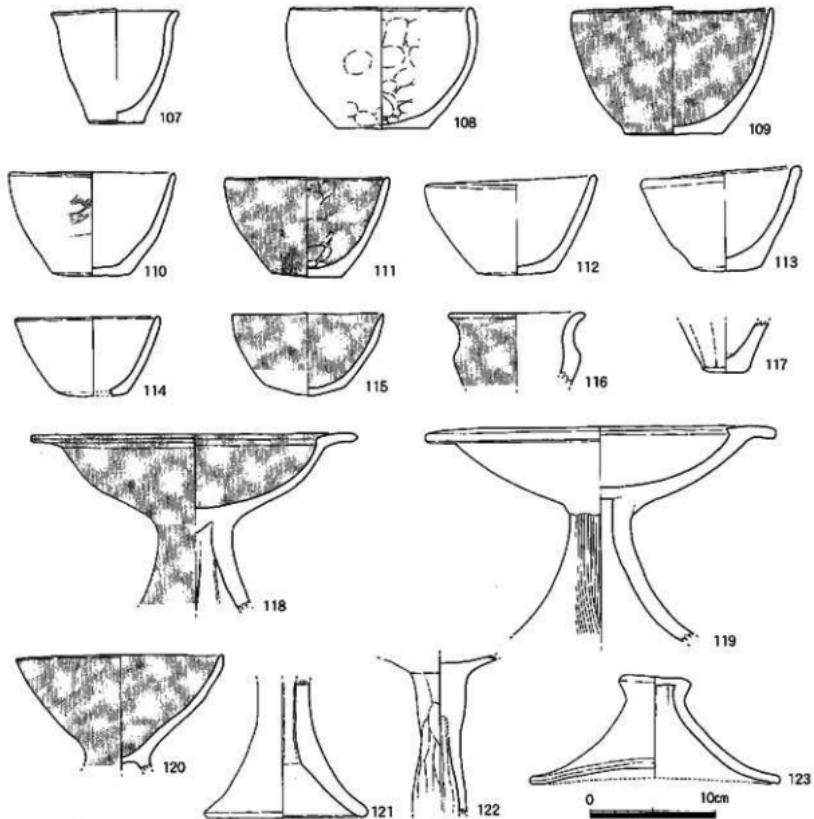
96～116は鉢である。96～103は口縁部を「く」字状に外反させ、そのうち96～99は底部に焼成前の穿孔をもつ。96は厚い平底の底部中央に穿孔を持ち、穿孔部内面は指押さえが残る。やや丸味を帯びた体部に口縁は引き延ばした様に作られる。そのため、厚みもまちまちで、口縁は波打っている。穿孔部内面と外面に煤の付着がある。97は底部中央部に丁寧な径1.7～2cmの両面穿孔をもつ。外面は粗い縱方向の刷毛目で調整する。体部中位には一部欠損するが、丸い打ち欠きがある。口径24.8cm、器高17.5cm、底径7.5cmを測る。98は他と較べ、底部の器壁は薄く、穿孔が中央よりややずれている。外面には細かい刷毛目調整が見られ、煤が付着する。99は胴部から底部にかけて器壁が厚く、口縁部は短く外反する。穿孔部付近には96と同様、指押さえが残る。内外面に煤が付着する。100はやや不安定な平底から丸味をもって立ち上がり、口縁部は長く延びる。器面は著しく磨滅する。101～103は口径に比して器高がやや高めである。器壁は厚く、底部は不安定な平底である。101・102は外面に煤、内面に焦げが多量に付着する。104・105は素口縁を呈し、胴部がやや張り、口縁は内湾して丸くおさめる。106は胴部が張らず、口縁が緩やかに頸部から外反する。外面には多量の煤が付着する。107～116は小型の鉢である。107は口径に比して器高がやや高めの器形である。完形品で、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁は外反し、端部は丸くおさめる。器面は風化する。108～115は口径に比して器高が低く、素口縁を有する。108は口縁部がわずかに内湾して端部は丸くおさめる。指ナデ、指押さえが残り、外面には煤が付着する。109は完形品で、口縁部が体部から直線的に延びる。外面には赤色顔料が塗布され、内面にも部分的に残る。また、外面には少量の煤の付着が見られる。110～112は109と類似した器形で、底部は不安定な平底を呈する。ともに口縁部を一部欠損する。110は外面にわずかに刷毛目調整が見られ、内外面に多量の煤が付着する。111は外面は刷毛目、内面は指押さえで調整し、内外面には赤色顔料を塗布する。外面底部付近には煤の付着が見られる。113はほぼ完形品で、器壁が厚く、底



第19図 SD01 9層出土遺物実測図⑨ (1/4)

部は不安定な平底を呈する。器形は大きく歪んでおり、器面は凸凹を呈する。口縁部外面直下は強い指壓さえにより、部分的に肥厚する。胎土には5mm大の白色砂粒を多量に含む。114は口径11.4cmを測り、器形は112に類似する。115は丸底を呈し、口縁部へと直線的に延びる。内面には赤色顔料が良好に遺存する。外面は大半が磨滅しているため残っていないと思われる。116は胴部から口縁部にかけての破片である。頸部で屈曲し、口縁部は外反する。器壁が厚く、胎土には白色砂粒、赤褐色粒を多量に含む。外面には丁寧なナデと赤色顔料がわずかに残る。

117はミニチュア土器の底部片である。不安定な平底の小さな底部から外湾気味に外に開く。外面に

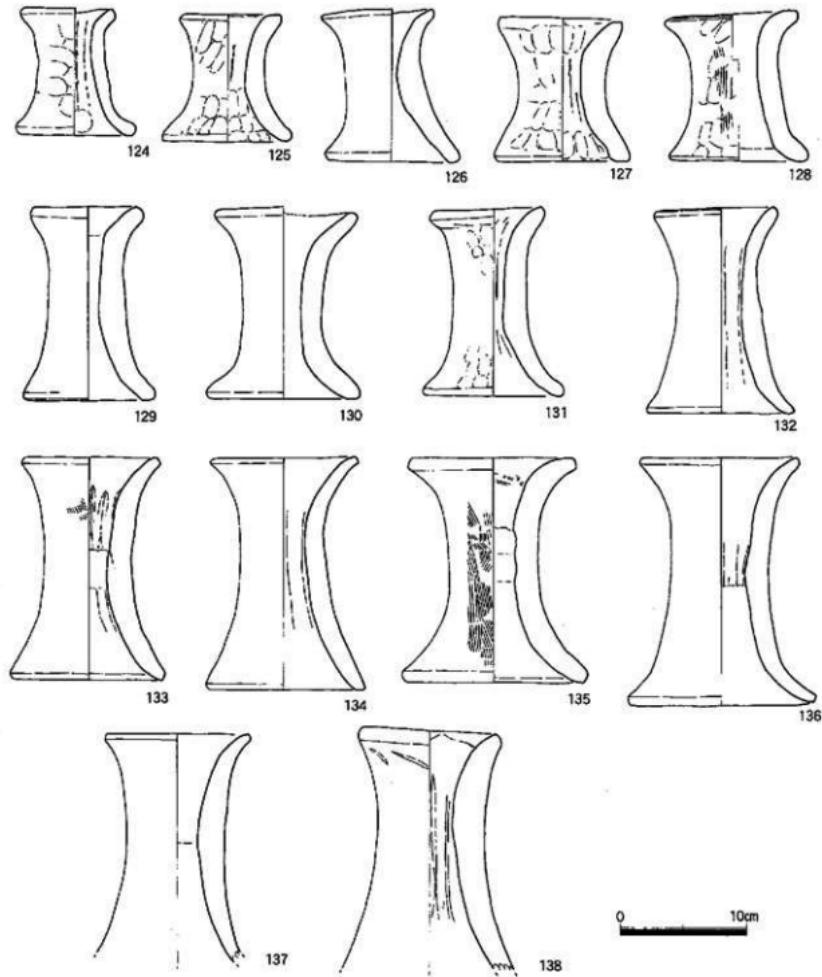


第20図 SD01 9層出土遺物実測図⑩ (1/4)

は縦方向のケズリのような調整が見られる。白色砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。

118～122は高坏である。118・119は鋤先状の口縁部を呈し、脚部を欠損する。118は体部に丸味をもち、内唇部の張り出しが弱い。脚部内面にはヘラナデと思われる小口痕が残る。内外面に赤色顔料が塗布される。また、わずかであるが内外面に煤が付着する。119は器壁が厚く、体部は直線的である。内唇部の張り出しが強く、口唇部は一部面取りをする。器面は著しく磨滅しているが、脚部外面上には一部縦方向の刷毛目調整が残る。120は椀状を呈する坏部片である。坏部は直線的に広がり、口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。器面は磨滅するが、内面の一部と外面に赤色顔料が見られる。121・122は長脚の脚部片である。121は器壁が厚く、内面は中位から裾部にかけ直線的に開く。内面にはシボリ痕が見られる。122は器面の風化が著しく、内面のシボリ痕のみが認められる。

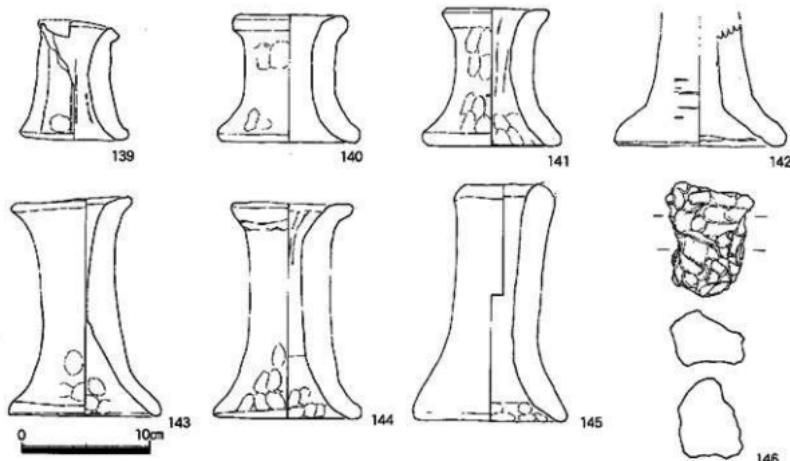
123は甕の蓋で、天井部につまみを有し、裾部は大きく歪んでいる。器面は磨滅のため調整不明であるが、内面は天井部にシボリ痕を残す。内外面にわずかに煤の付着が見られる。つまみ部径5.6cm、器



第21図 SD01 9層出土遺物実測図⑩ (1/4)

高8.5cm、裾部径19.8cmを測る。

124～138は円筒形の器台で、上下対称に近い器形を呈する。137・138以外はほぼ光形品である。124～128は、器高10.2～12.2cmの小型の器台である。外面に一部縦方向の刷毛目調整が見られるものもあるが、大半は内外面ともに指ナデ、指押さえで仕上げる。124は器壁が薄い。127は器壁が厚く、内面の指押さえが強いため端部は平坦となる。129～132は器高15～16.3cmを測る中型の器台である。器面は磨滅するが、小型のものと較べ、指頭がほとんど残っていない。133～138は器高17.6cm以上の大型品



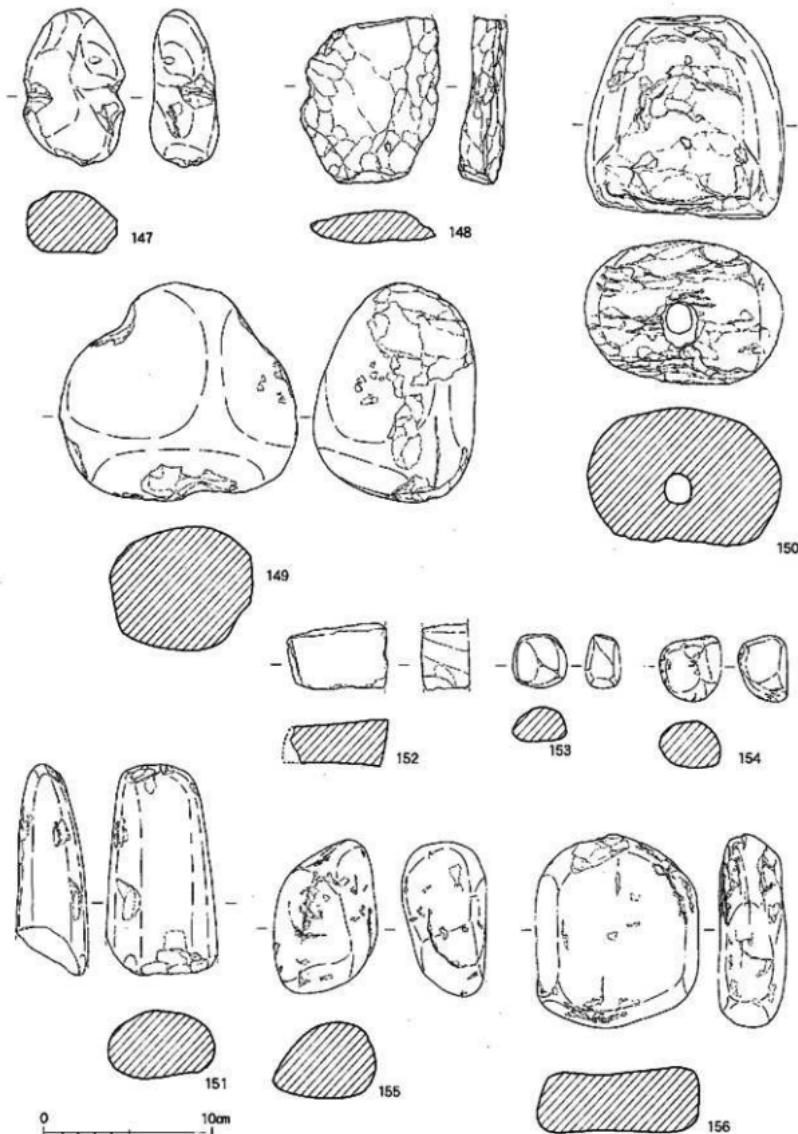
第22図 SD01 9層出土遺物実測図⑫ (1/4)

である。中型のものと同様、指頭痕がなく、外面には刷毛目調整が残る。

139～145は支脚である。器台と較べ、器壁が厚く、指頭痕が多く残り、焼成を受けているものを支脚とした。139～141は、器高10～11cmの小型の支脚である。139は受部の端部が平坦面をなし、一部突起状に外方に突出する。141は完形品で、一部外面が赤変する。142～145は器高17cm以上の大型品である。すべて脚中位から器部にかけて大きく広がるが、器台に較べ、穿孔径は小さく、143はわずかに開通している状況である。143・144の受部は上面がほぼ平坦面を呈する。器面は磨滅しているが、刷毛目調整はみられない。確認できる調整は指ナデ、指押さえである。

146は粘土塊で、指頭痕、指ナデが多く残る。他に3cm程の粘土塊が1点出土する。

147～156は石器である。147～149は打欠石錐である。147は砂岩製で、一部欠損する。側面に2個所、対になるように抉りを入れる。長さ9.3cm、幅5.9cm、重さ241.57gである。148は玄武岩製で、147同様、両側面に2個所、対になるように浅い抉りを入れる。上部は一部欠損する。幅8cm、厚さ2～2.8cmを測り、重さは現存で252.68gである。149は花崗岩製で、3個所抉りを入れる。長さ13cm、幅14cm、厚さ最大で9.5cmを測る。重さは2280gである。150は滑石製で、横長の環状を呈した石錐である。中央よりややずれて、両面からの穿孔をもつ。下方からの穿孔はもう一個所みられ、中位で止まっていることから失敗して、再度行ったものと思われる。断面は丸味をもった台形状をなす。長さ12cm、上辺5cm、下辺10.5cmを測る。側面がわずかに欠損するが、重さは1678.81gである。151は玄武岩製の石斧の基部片である。側面の調整は敲打によっておこなわれ、部分的に研磨によって仕上げている。重さは現存で514.02gである。152は砂岩製の砥石片である。3面砥面として遺存する。側面は研磨によって、幅1～1.2cm程浅く窪んでいる。153～155は磨石である。緑色の堆積岩で、非常に硬質である。河原石をそのまま用いたと思われ、磨いた面は平坦となっている。153は34.65g、154は67.08g、155は419.24gである。156は玄武岩製の小型の石皿である。一部欠損するが、ほぼ完形品で、上面・下面ともに使用によって窪んでいる。長さ11.5cm、幅10.7cm、厚さ3.5～3.8cmを測り、最も薄い部分は3.3cmである。重さは839.94gを量る。

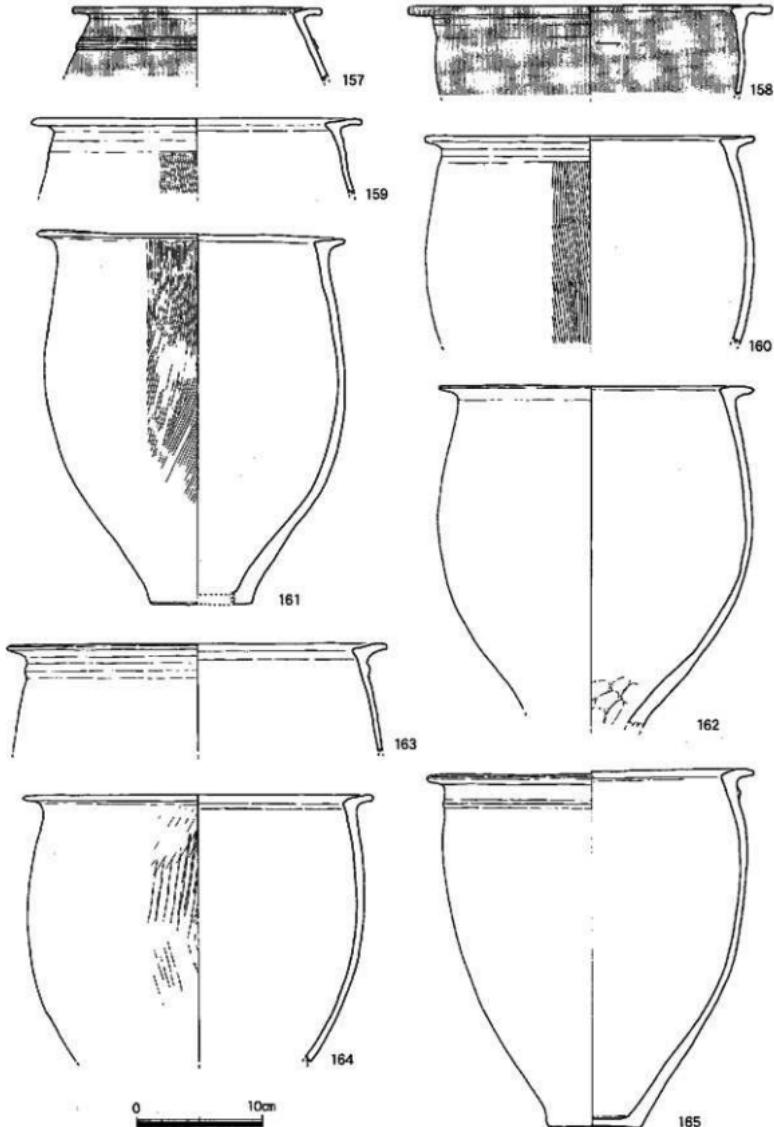


第23図 SD01 9層出土遺物実測図⑩ (1/3)

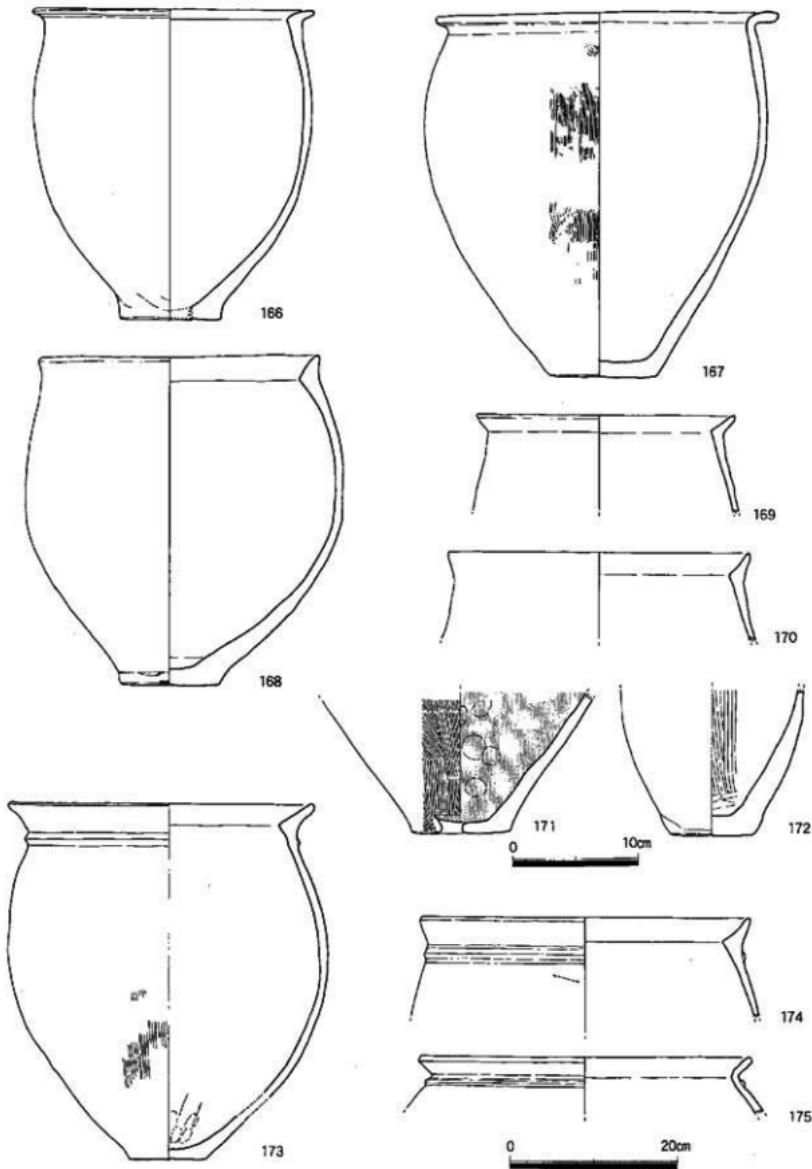
10層出土遺物（第24～32図、図版9～11）

157～182は壺である。157は復元口径19.8cmを測る小型の壺である。逆「L」字口縁を有し、口縁部はやや内傾する。胴部は大きく膨らみ、口縁下に鈍い「M」字状突帯を巡らす。胎土には赤褐色粒を多量に含み、外面には赤色顔料が塗布される。158～167は逆「L」字口縁を呈し、158～162は上面がほぼ水平（A）、163～167は内傾する（B）。158～160は口縁下に強い横ナデを行っているため沈線状の窪みが巡る。また、口縁部内面下の強い横ナデによって内唇部が内側に張り出す。158の外面は磨滅しているため不明であるが、内面には赤色顔料が塗布される。161はほぼ完形品で、外面には煤、内面には焦げが付着する。163・165は口縁下に1条の鈍い三角突帯が巡る。164は内面の稜が弱くなり、165・166の口縁部は肥厚し、外方への延びも弱くなる。167は胴部が一部欠損するが、ほぼ完形品である。全体のバランスが悪く、口縁部も逆「L」字口縁がやや内傾気味の部分と「く」字状に近い部分があり、胴部の張りもまちまちである。底部は不安定な平底から直線的に胴部に至る。168～170は口縁部が上方に短く立ち上がるるものである（D）。168の口縁部内面はやや凸面を呈し、丸味を帯びた胴部から平底の底部に至る。170の口縁部内面は強い横ナデで凹状に窪む。171・172は底部片である。171は不安定な平底の底部中央に焼成後、両面から穿孔を施す。内面底部付近にはわずかに赤色顔料が残る。内面は指押さえ、外面は刷毛目で調整する。172は丸底を帯びた底部からほとんど開かず、胴部が直線的に立ち上がる。器壁が厚く、内面には多量の焦げが付着する。173～175は胴部が張り、口縁下に三角突帯を巡らす大型の壺である（C）。173はほぼ完形品で口径36.7cm、器高43.2cm、底径9cmを測る。174は口縁部内面が凹面を呈し、内唇部は強く内側に張り出す。それに較べ、175は口縁端部が面取りされ、口縁部内面の稜も弱くなる。176～180は口縁部が「く」字状を呈する壺である（E）。177は内面の屈曲部が明瞭（E-1）、176・178はやや不明瞭（E-2）となる。179・180は内面の稜はなくなり、長く上方に引き延ばした口縁（E-3）となる。176は口縁端部を面取りし、口唇部に横方向に1条の沈線を巡らす。178の口縁部は肥厚し、端部は丸くおさめる。最大胴部径が中位より上に位置する。（F）は遺存している外面の器面はすべて刷毛目調整が施される。また、内面に焦げ、外面に煤が付着する。181は「く」字状口縁をもっと上方にまのびさせた口縁をもつ。内面の稜は無く、器壁が全体的に厚く、重量感がある。外面に煤、内面に焦げが付着する。182は直口壺に似た器形をもつ壺である。口縁部がほとんど開かず、直立気味に緩やかに外反する。内面には焦げの付着が認められる。

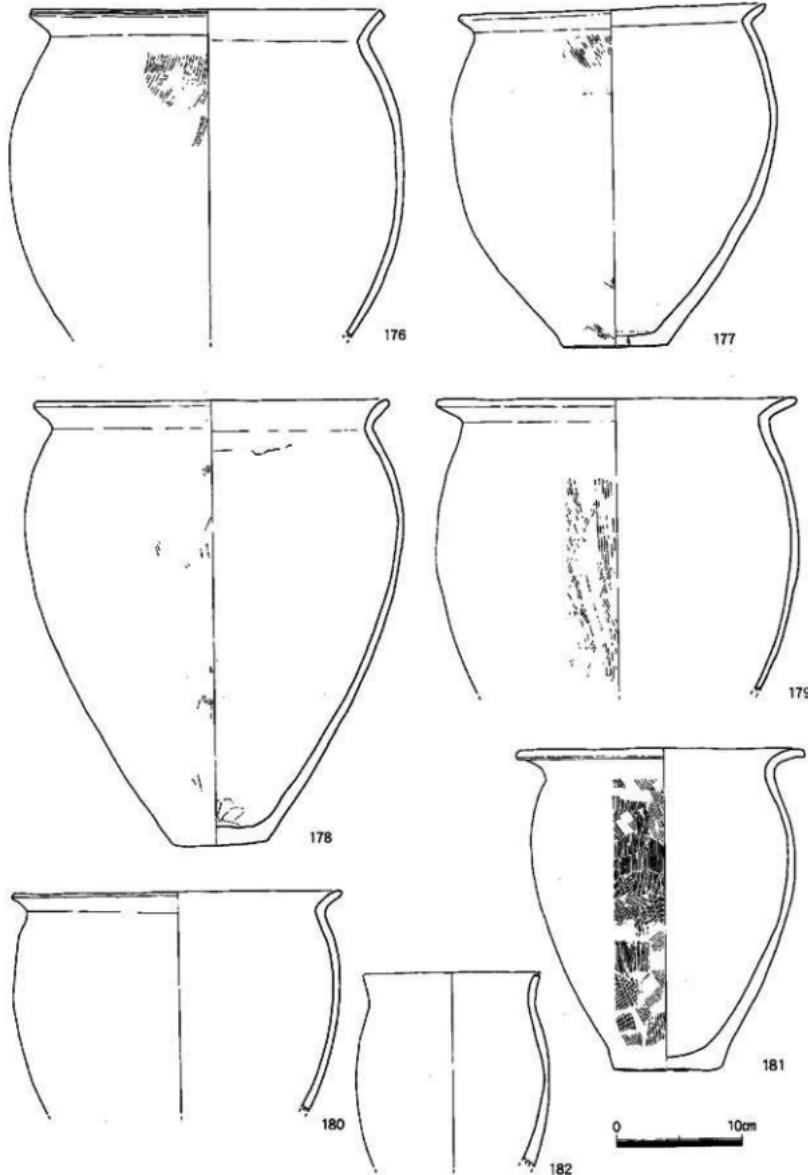
183～190は広口壺である。183～187の口縁部は鋤先状を呈し、183は水平、184は内傾、185～187はやや外傾する。183は内唇部の張りではなく、明瞭な稜線が残る。ほぼ球状の胴部で、頸部のつけねに三角突帯をもつ。184～187は大型品である。184は頸部下と胴部に三角突帯が巡る。内唇部の張り出しあは鈍く、頸部はほとんど立ち上がらず、そのまま肩、胴部に移行する。185は口唇部に横方向の1条の沈線を巡らした後、工具による刻目を施す。頸部と頸部下、胴部に3条、鈍い「M」字状突帯が巡る。突帯は雑な貼り付けのため大きく上下に波打っている。肩に張りがなく、そのまま胴部に移行する。外面には赤色顔料が塗布される。186はほぼ完形品で、胴部の張りが弱く、縦にまのびした器形である。頸部の縮まり、肩部の張りもなく、平底の底部に至る。頸部下と胴部に2条、鈍い「M」字状突帯が巡る。185同様、雑な貼り付けである。口縁部内面から外面に赤色顔料が見られる、胴部中位には外方向からの打ち欠きがある。187は口唇部に工具による刻目を施す。頸部のつけねと胴部に2条「M」字状突帯が巡る。頸部には暗文が施される。188～190は口縁部が素口縁をなす。188は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。器面は磨滅しているが、外面には赤色顔料が塗布される。底部内面には指押さえが残る。190は胴部に比して、頸部が細く縮まり、口縁部が外反する。頸部下には三角突帯、胴部には「コ」字状の突帯が巡る。外面には赤色顔料がわずかに残る。191・192は口縁部を打



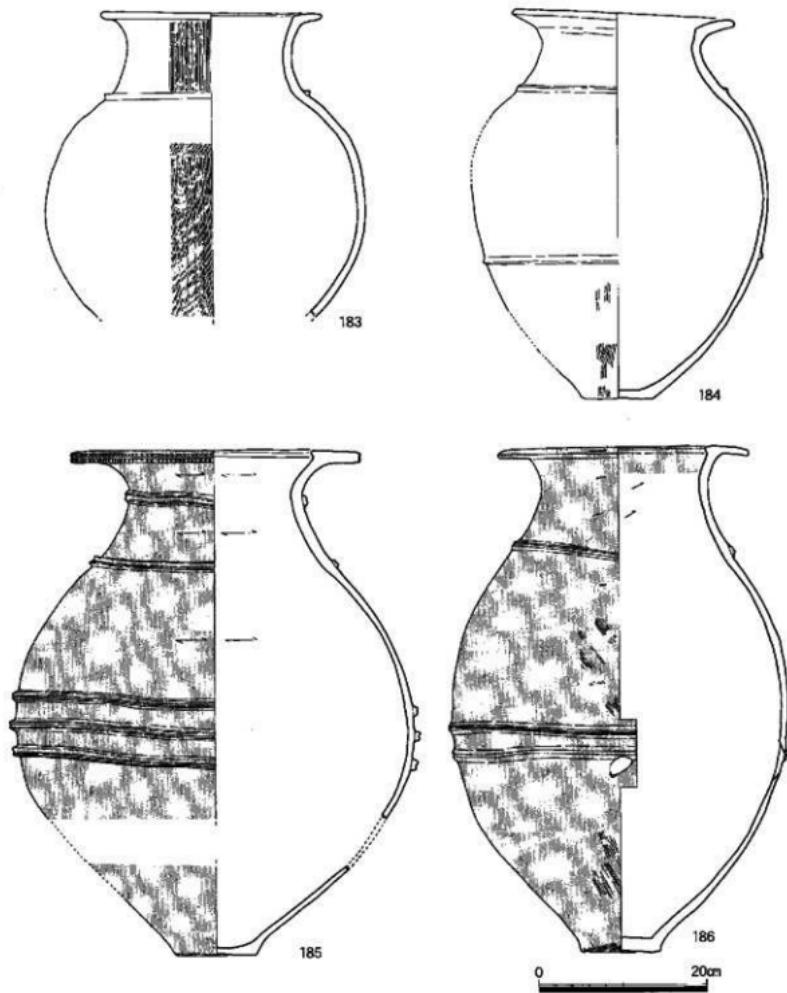
第24図 SD01 10層出土遺物実測図① (1/4)



第25図 SD01 10層出土遺物実測図② (173~175は1/6、他は1/4)

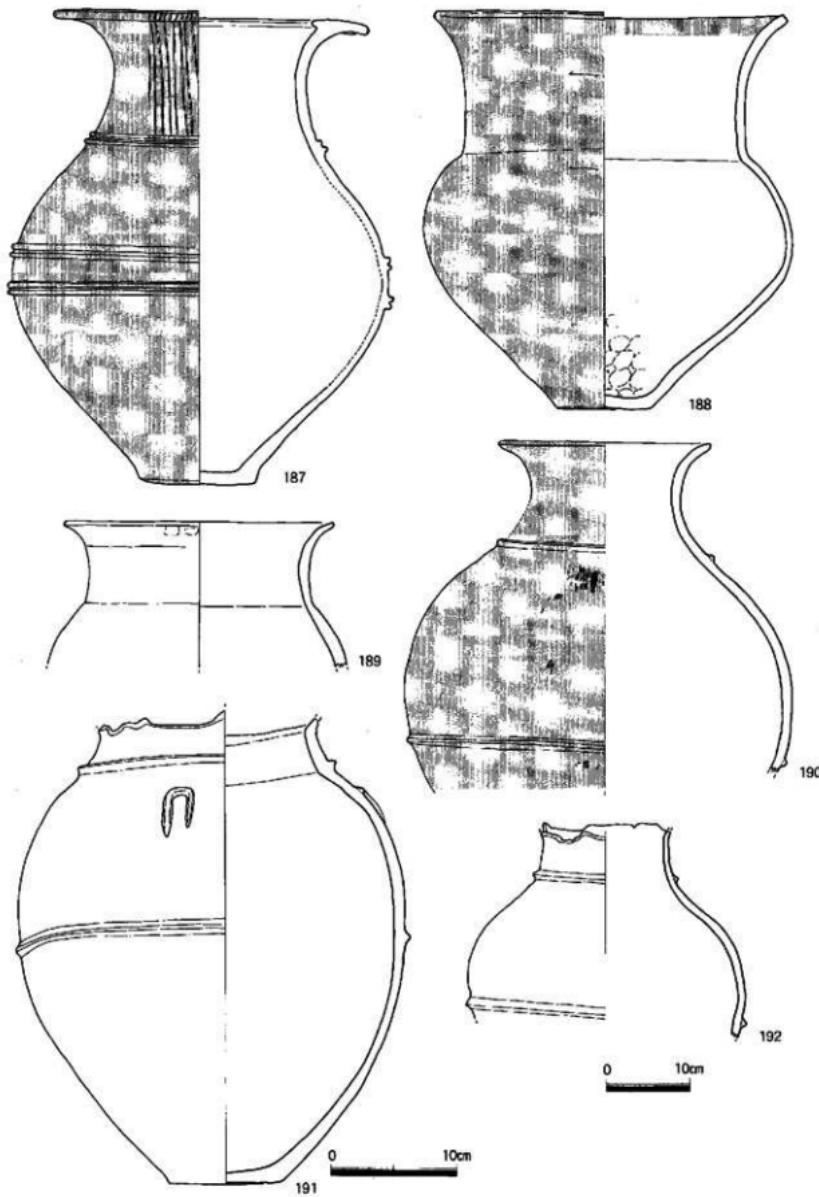


第26図 SD01 10層出土遺物実測図③ (1/4)

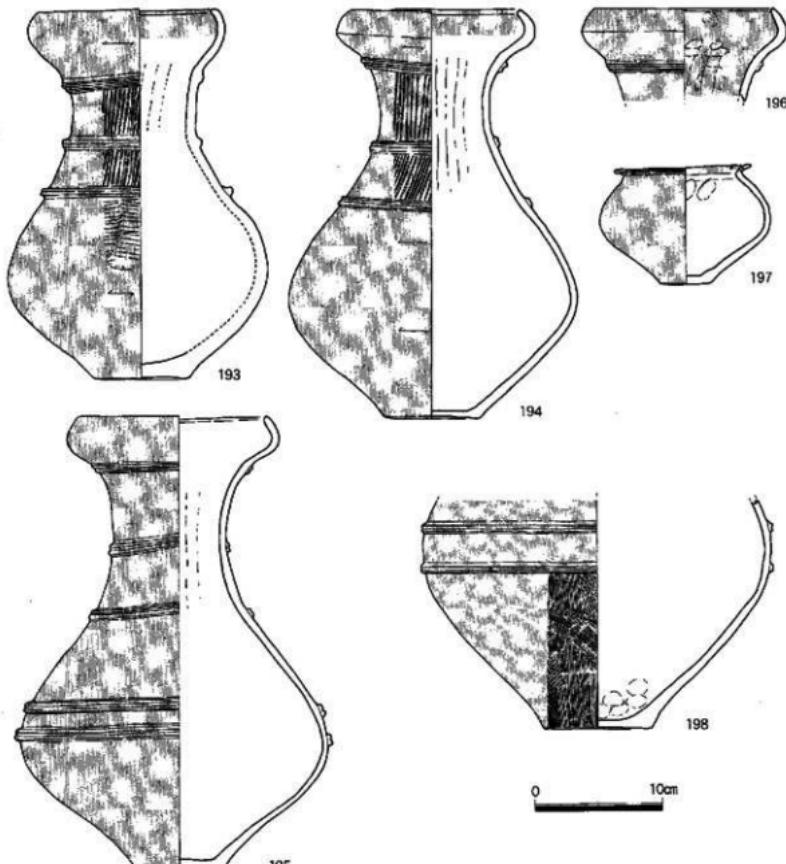


第27図 SD01 10層出土遺物実測図④ (1/6)

ち欠いたものである。191は長胴を呈し、頸部つけねに端正な三角突帯、胴部に鈍い三角突帯を巡らす。肩部には1個所逆「U」字状の浮文を貼り付ける。頸部外面に一部研磨痕が残るが、大部分は器面が磨滅している。192は191と類似した器形を呈する大型の壺である。193～196は袋状口縁壺である。193～195はほぼ完成品である。口縁部下、頸部中位及び頸部つけねにぶい「M」字状突帯を巡らせる。195は胴部にも2条「M」字状突帯が巡る。外面は横方向のヘラ磨き、頸部には暗文を施し、口縁部内面は横方向のナデ、頸部内面にはシボリ痕が残る。外面には赤色顔料が塗布され、193・194は口縁部内



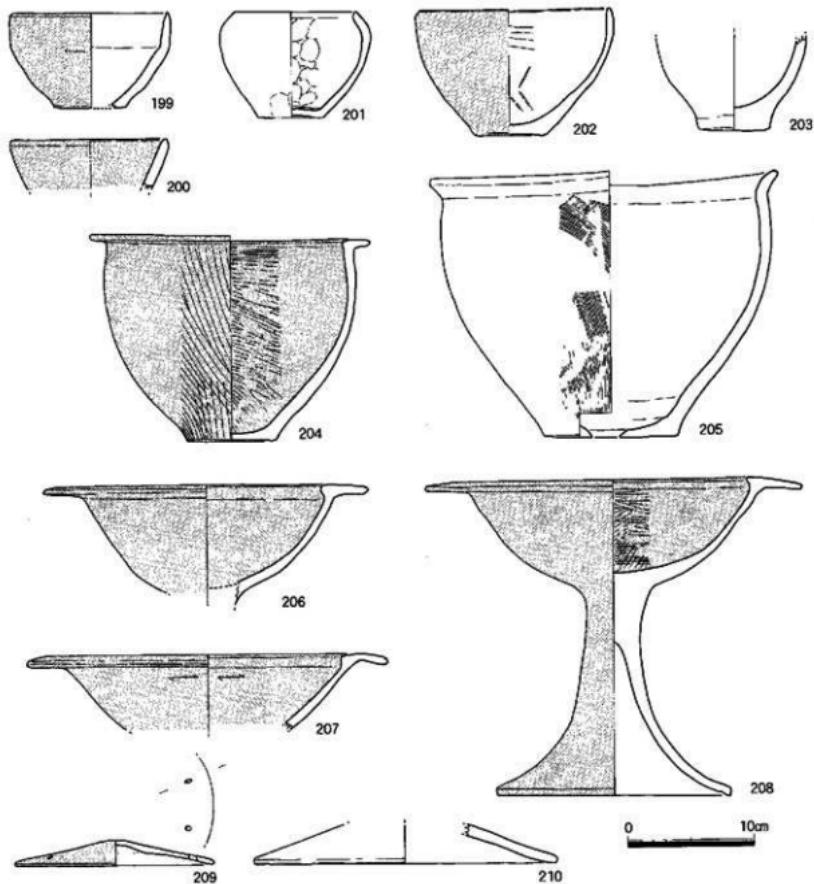
第28図 SD01 10層出土遺物実測図⑤ (190・192は1/6、他は1/4)



第29図 SD01 10層出土遺物実測図⑥ (1/4)

面にまで及ぶ。196は口縁部片で、口縁部下に「M」字状突帯を巡らせ、頭部内面にはシボリ痕と指揮さえの痕跡が残る。内外面に赤色顔料が見られる。197はほぼ完形の無頸壺で、最大径は胴部中位にあり、口縁部は強く外反する。口縁部の中央に径2.5mmで、2.5cmの間隔で対峙する位置に穿孔をもつ。器面は磨滅しているが、研磨調整と思われ、口縁部直下内面には指揮さえが残る。外面から口縁部内面にかけて赤色顔料が塗布され、内面にも点々と垂れている。198は口縁部を欠損する。胴部に2条のにぶい「M」字状突帯が巡る。外面には細かい刷毛目調整、内面には指揮さえが残る。

199～205は鉢である。199は底部から直線的に開き、体部中位で屈曲して口縁部へと直立する。200は体部が直線的に開き、そのまま口縁へと至る。200・201は口縁部が内湾し、口縁端部は丸くおさめる。203は厚い不安定な平底の底部から丸味をもって胴部に至る。204は逆「L」字口縁を有し、胴部



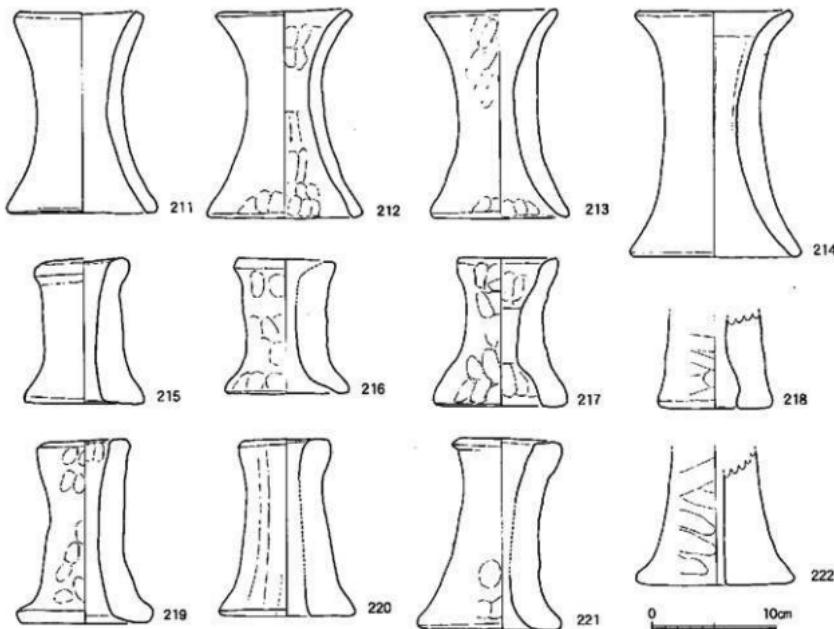
第30図 SD01 10層出土遺物実測図⑦ (1/4)

は丸味をもち、底部は上げ底氣味である。外面には粗い刷毛目調整が見られる。内面上位は横方向、下位は斜方向の細かい研磨調整をおこなう。205は大型の鉢で、底部には焼成後の外面からの打ち欠きがある。器面はほとんど磨滅するが、口縁部内面に赤色顔料が一部残る。

206～208は高壺である。鋤先状の口縁部を呈し、わずかに外傾する。206・208は体部に丸味をもち、207は直線的である。内外面ともに研磨調整で仕上げる。外面と壺部内面に赤色顔料を塗布する。208は完形品で、口縁の外傾の度合いにばらつきがあり、壺部形は歪んでいる。

209・210は蓋である。209は無頸蓋の蓋で、復元口径17.6cmを測り、穿孔は端部から2.8cmの部分に3.5cmの間隔で対をなす。外面には赤色顔料が塗布される。

211～214は円筒形の器台で、上下対称に近い器形を呈する。214は大型、他は中型である。わずかに

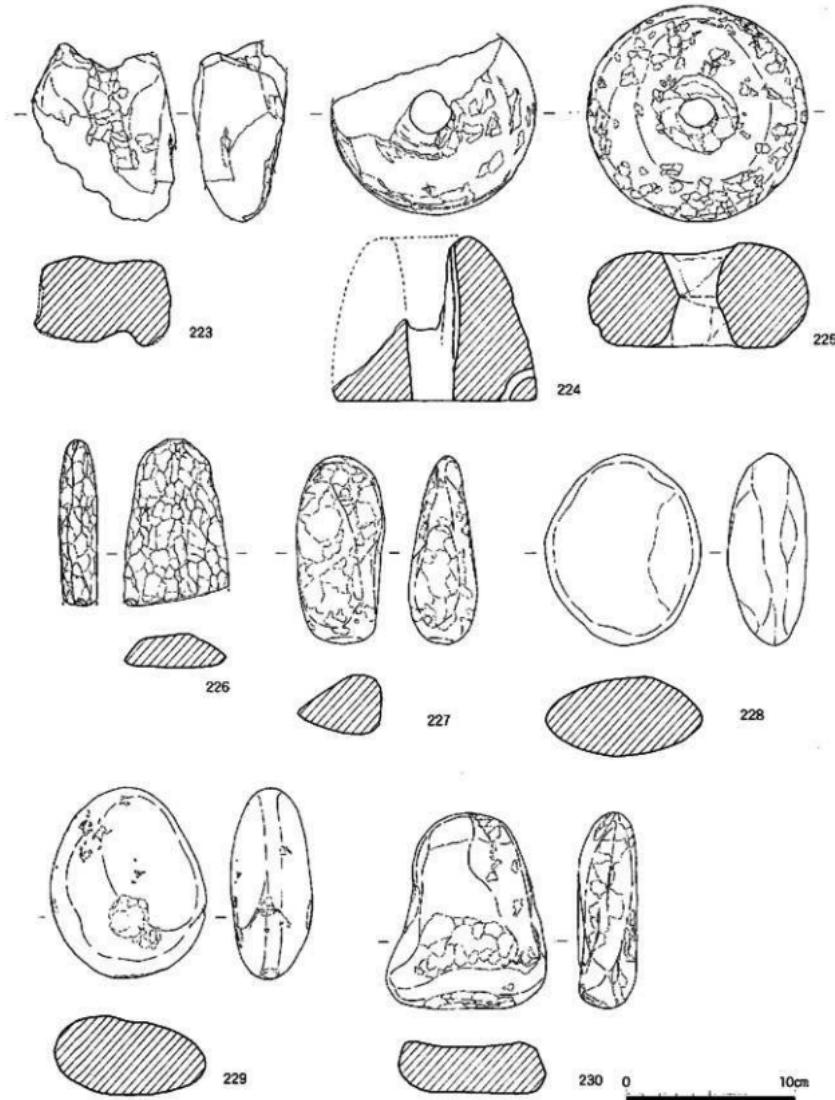


第31図 SD01 10層出土遺物実測図③ (1/4)

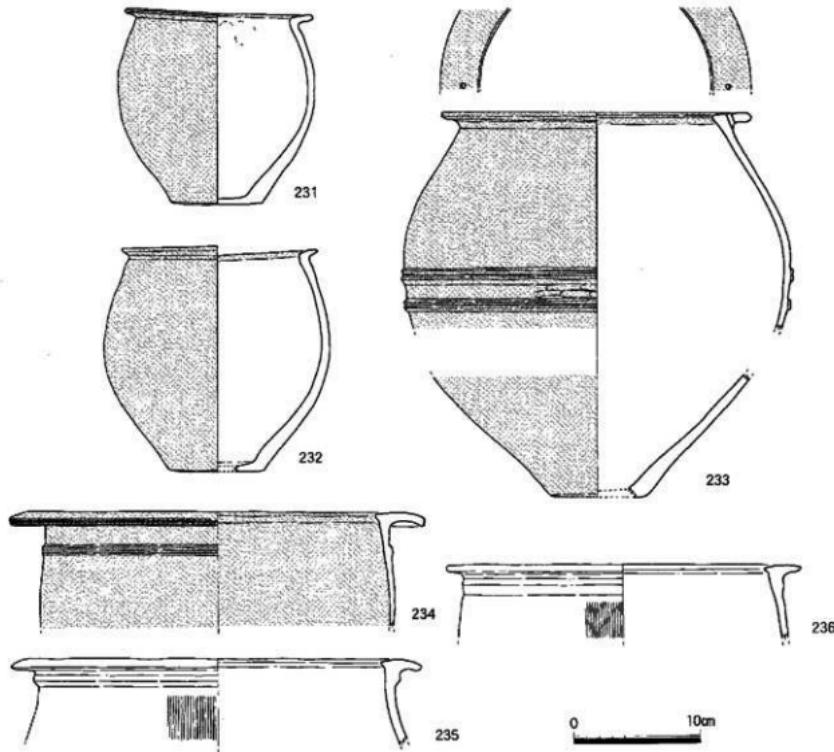
指押さえが残るもの丁寧なナデで調整する。214の内面にはシボリ痕がある。

215～222は支脚である。215・216は小型、222は大型、他は中型である。220はヘラ状の工具で縦方向に削るように調整する。他は指押さえ、指ナデで調整する。いずれも器壁が厚く、接地面を広く作っている。219は受部付近が剥落し、被熱によるものと考えられる。器形は218のようにほとんど開かず円筒形のもの、222のように比較的大きく開脚するものがある。

223～230は石器である。223～225は滑石製の石錐である。223は打欠石錐で、半分欠損する。両側面に抉りを入れ、抉りの間に溝を刻んでいる。重さは518.94 gである。224・225は環状を呈し、中央に両面穿孔をもち、断面形は224が台形、225は梢円形である。224は側面下方から底面を結ぶ径0.6cmの円形の小孔が穿たれる。1/3が欠損するが、重さは1153.86 gである。径12.1cm、高さ11.6cmを測る。225は欠損した部分があるが、ほぼ完形品で径13cm、高さ6.1cm、重さは1624.55 gである。226は石斧の基部片である。玄武岩製で、風化している。すべて調整は敲打で行っている。227～229は磨石である。227は玄武岩製で、端部を敲打した痕跡がある。重さは315.88 gである。228は玄武岩製で、敲打痕は見られず、側面に使用した痕跡と思われる稜線が入る。重さは708.42 gである。229は緑色の堆積岩で、非常に硬質である。河原石をそのまま用いたと思われ、磨いた面は平坦となっている。228と形態が類似している。上面、下面ともに中央部に径2cm程の敲打された痕跡がある。重さは784.86 gである。230は玄武岩製の小型の石皿の完形品である。略三角形を呈し、側面はわずかに窿んでいる。上面は大きく凹状に隆み、底面には多量の敲打の痕跡が残る。重さは600.87 gである。



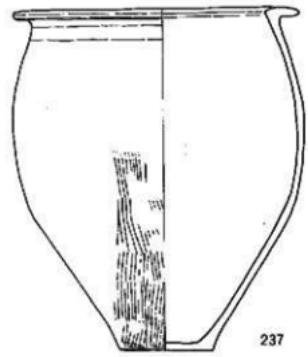
第32図 SD01 10層出土遺物実測図⑨ (1/3)



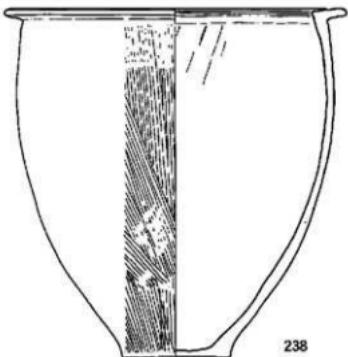
第33図 SD01 11層出土遺物実測図① (1/4)

11層出土遺物 (第33~40図、図版11・12)

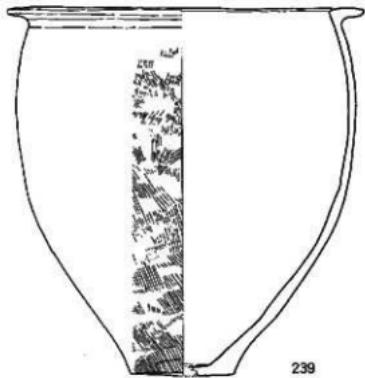
231~258は甕である。231・232は小型の甕で、口縁部と胸部がわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。逆「L」字口縁を有し、口縁部はやや内傾する。ともに口縁部内面から外面にかけて赤色顔料が塗布される。231は口径15cm、器高15.5cm、底径7.3cmを測り、底部は不安定な平底を呈し、丁寧にナデている。外面上位は横方向、下位は縦方向の研磨調整で仕上げる。232は口径15.5cm、器高17.9cmを測り、底部は不安定な平底を呈する。口縁部内面の稜は弱く、口縁端部は尖らせ気味に仕上げる。231同様、外面上位は横方向、下位は縦方向の研磨調整をおこなう。233~247は逆「L」字口縁を有し、233・236~242は口縁部上面がほぼ水平(A)、234・235は外傾気味、243~247は内傾(B)する。233は胸部が大きく張り、鈍い「M」字状突帯が巡る。口径は24.3cm、底径7.7cmを測る。口縁部中央には径0.4cmの焼成前の穿孔が、対になるように上方から下方に向かってやや斜めに穿たれる。研磨調整で仕上げられ、口縁部内面から外面にかけては赤色顔料が塗布される。234は器蓋が薄く、端正な作りの赤色顔料が塗布された甕である。口唇部には横方向に1条の沈線を巡らした後、工具による刻目を施す。口縁下には低い「M」字状突帯が巡る。235は口縁直下に鈍い三角突帯を巡らす。外面には模が付着す



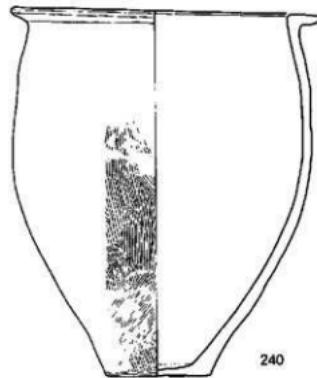
237



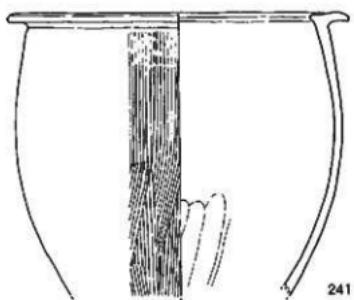
238



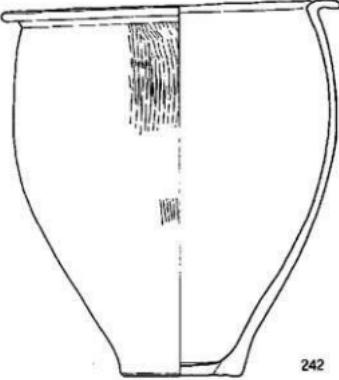
239



240



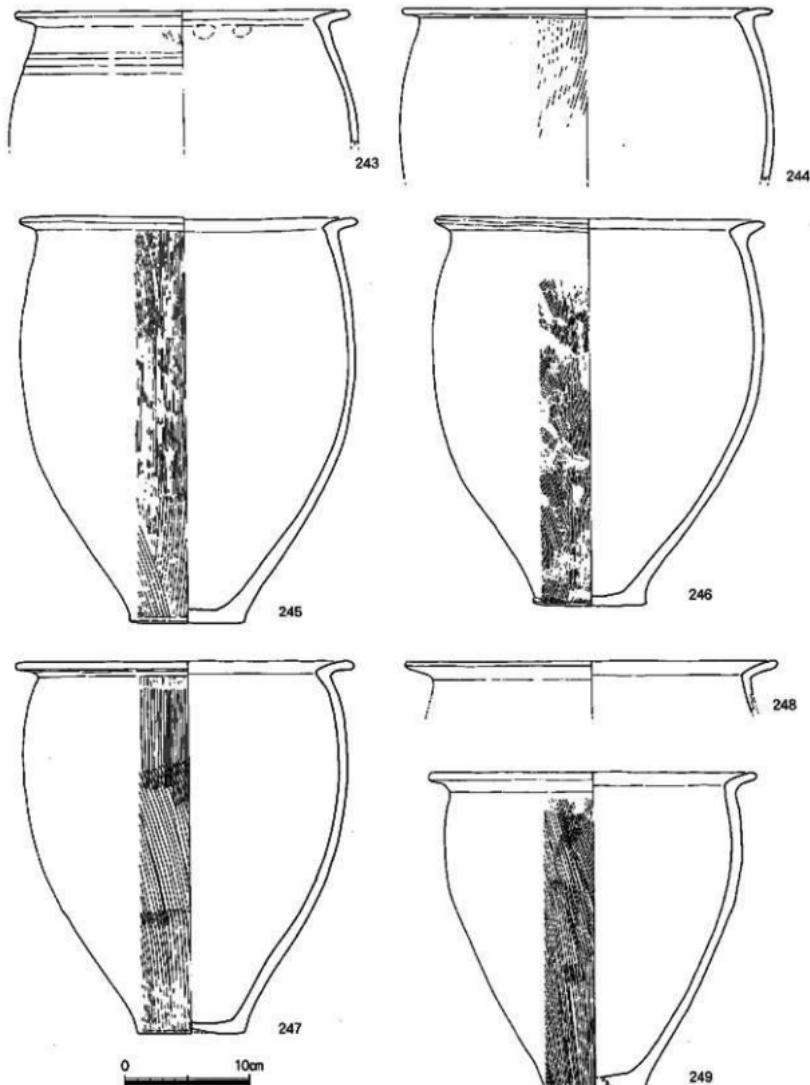
241



242

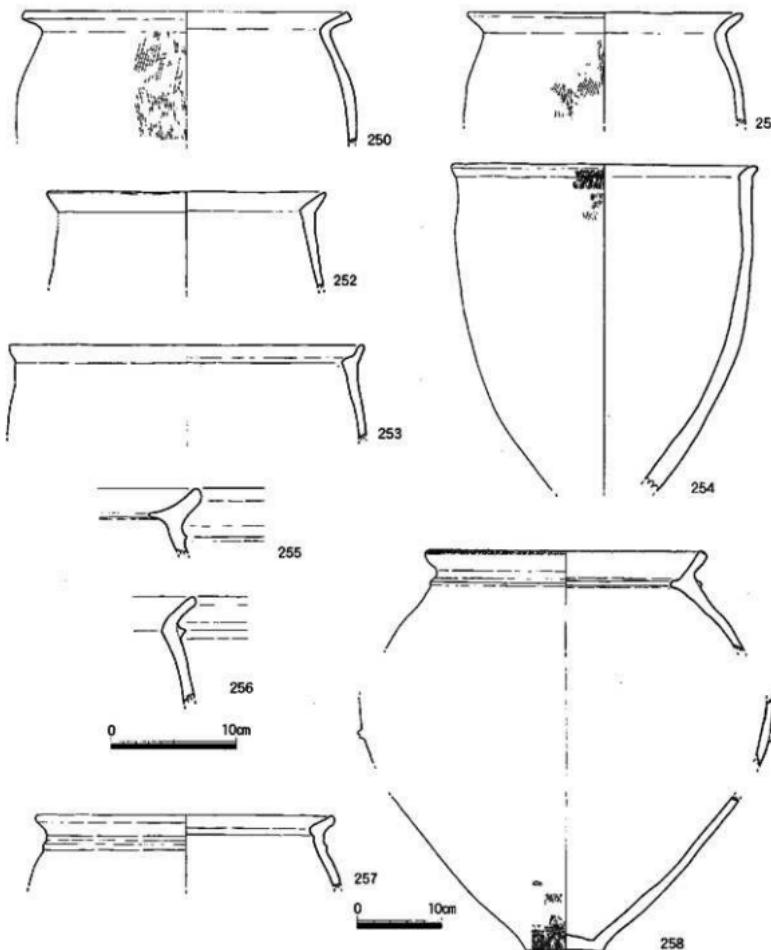
0 10cm

第34図 SD01 11層出土遺物実測図② (1/4)



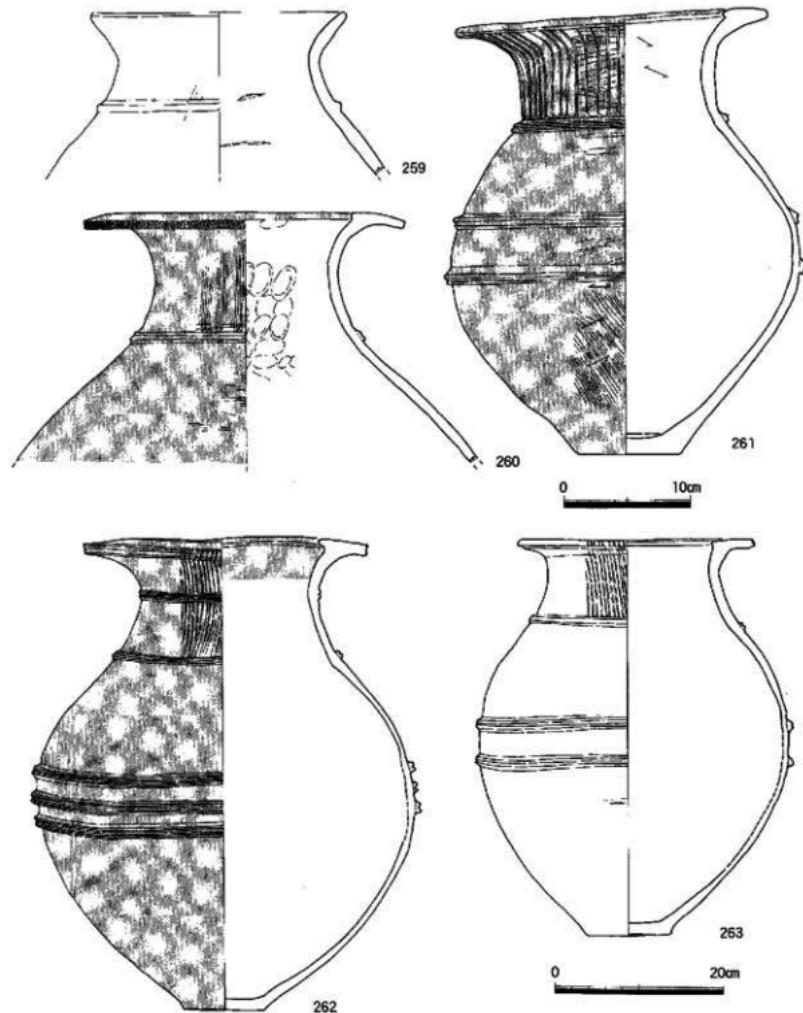
第35図 SD01 11層出土遺物実測図③ (1/4)

る。236は強い横ナデによって口縁下に鈍い突帯をつくり出している。外面には一部縱方向の刷毛目調整が見られる。口縁部が水平なもののうち、238・240は胸部が張らず、底部に移行するが、他は胸部



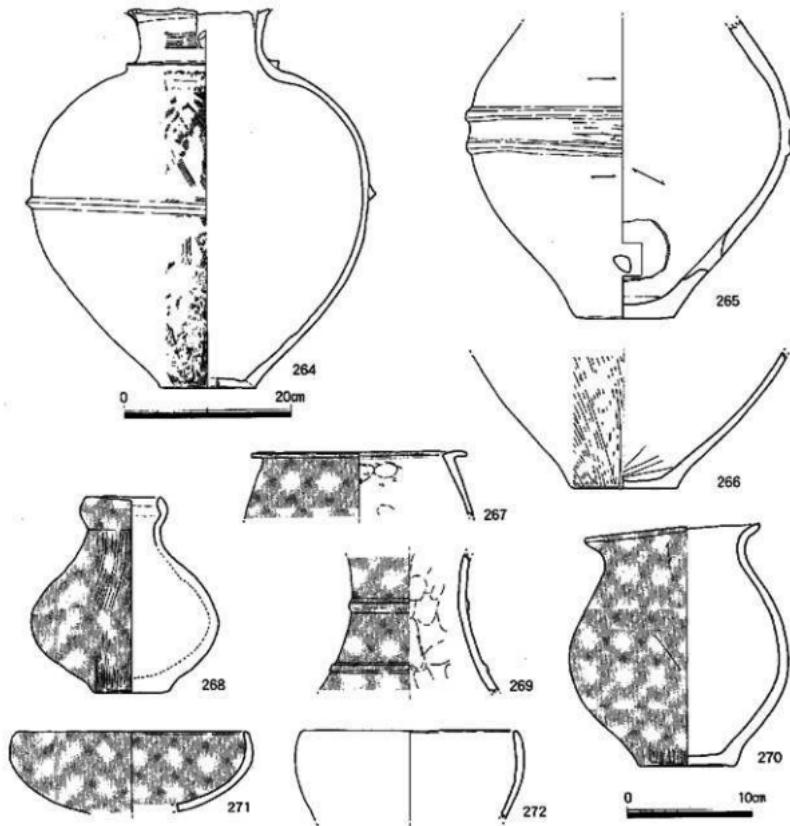
第36図 SD01 11層出土遺物実測図④ (257・258は1/6、他は1/4)

が中位よりやや上で張り、洞部に移行する。底部は平底で、すべて内湾気味に立ち上がる。洞部外面は縦方向・斜方向の刷毛目調整、口縁部は横ナデ、内面は指ナデ、工具によるナデの調整が見られる。238の外面上には煤が付着する。242は外面中位から口縁部にかけて煤、内面中位から底部に焦げが多量に付着する。口縁部が内傾するもののうち、243～245は口縁部内面下の強い横ナデによって内唇部が内側に張り出す。243は口縁下に2条、強い横ナデで沈線状の瘤みが入る。245～247・249は外面に煤、内面に焦げが多量に付着する。249の口縁部は内面の稜が弱く、洞部もほとんど張らず、直線的



第37図 SD01 11層山上遺物実測図⑤ (262・263は1/6、他は1/4)

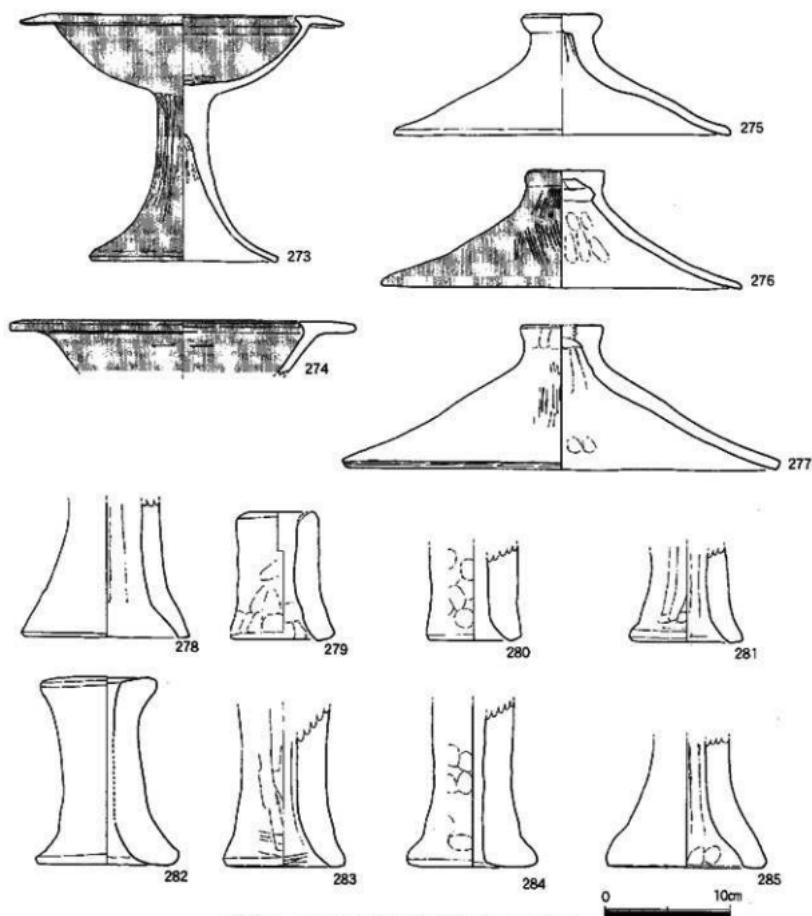
に底部に至る。250・251は口縁部が「く」字状を呈する壺である。内面の縁は不明瞭である (E-2)。250の口縁端部は肥厚し、口縁部内面から胴部外面にかけては多量の縫が付着する。252～254は口縁部が上方に短く立ち上がるるものである (D)。252は口縁端部を尖り気味におさめ、口縁部から胴部に向かって直線的に延びる。253は252と類似した口縁部で、口縁内面中央部を強い横ナデで縛ませてい



第38図 SD01 11層出土遺物実測図⑥ (264は1/6、他は1/4)

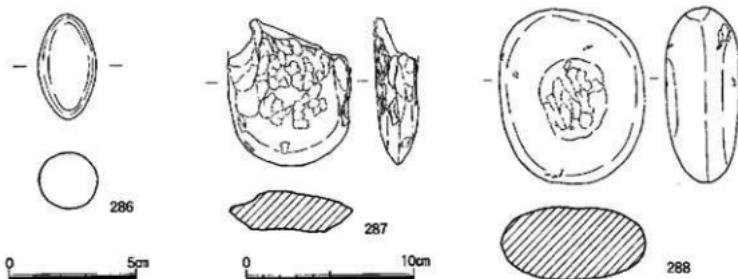
る。端部は丸くおさめる。254は口縁部をわずかに上方に延ばしたもので、胸部は膨らまず、そのまま底部に至る。器壁は厚く、外面には多量の煤、内面底部付近には焦げが付着する。外面には密な刷毛目調整が見られる。255～258は胸部が張り、口縁下に三角突帯を巡らす大型の壺である(C)。256は口縁部内面が凸面を帯びるが、他は凹面を呈する。258は平底の底部から直線的に胸部へ立ち上がり、胸部には1条の「M」字状突帯が巡る。口縁端部は肥厚し、口唇部には工具による刻目を施す。内唇部は内に大きく張り出し、面取りされる。

259～263は広口壺である。259は素口縁を有し、肩が張らず、そのまま胸部に移行する。頸部下には低い三角突帯を巡らす。器面は磨滅し、胎土には白色砂粒を大量に含む。頸部内面には接合痕が残る。260～263は動先状の口縁部を呈する。260～262は口縁部内面から外面にかけて、赤色顔料が塗布される。260の口縁部は外傾し、口唇部には横方向に1条の沈線を巡らした後、工具による刻目を施す。頸



第39図 SD01 11層出土遺物実測図(7) (1/4)

部には暗文を施し、頸部下には1条の「M」字状突帯が巡る。頸部内面には指押さえ、胴部内外面には刷毛目調整がわずかに残る。261は口径24.85cm、器高33.8~35.5cm、底径8.1cmを測る完形品である。口縁部は厚く折り返し、端部は丸くおさめる。頸部外面には横方向の研磨の後、暗文を施す。頸部下及び胴部に2条のやや下方に垂れた「M」字状突帯が巡る。胴部外面上半は横方向の研磨で調整し、下半には刷毛目調整が残る。262は口径34.4cm、器高57.3cm、底径9.5cmを測る完形品である。口縁部はやや外傾し、口唇部には横方向に1条の沈線を巡らした後、工具による刻目を施す。頸部には暗文を施し、頸部中位と頸部下、胴部に3条の「M」字状突帯が巡る。頸部内面には横方向の研磨が残り、頸部から胴部にかけては弱い稜線が入る。263は口径28.6cm、器高47.9cm、底径10cmを測る完形品である。口縁部がほぼ水平で、口唇部には工具による刻目を施す。頸部には暗文を施し、頸部下と胴部に



第40図 SD01 11層出土物実測図(8) (286は1/2、他は1/3)

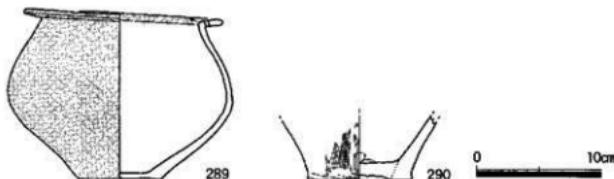
2条「M」字状突帯が巡る。頭部はあまり縮まらず、肩部の張りは小さい。内面はナデ調整、外面は器面の磨滅が著しい。264は口縁部を打ち欠いている。底径11.5cmを測るやや上げ底気味の底部から大きく張った胴部へ至る。胴部は球状をなし、1条の三角突帯が巡る。また、頸部つけねにも三角突帯が巡り、頸部は直立する。頭部外面には横方向の研磨調整が見られ、胴部外面には細かい刷毛目調整が残る。265はやや綾長の球状の胴部にやや不安定な平底がつく。胴部には「コ」字状突帯が2条巡る。胴部下半には焼成後の打ち欠きがある。内側から打ち欠いているため、内面の打ち欠き径は4.7cm、外面は1~1.7cmを測る。打ち欠きは丁寧に器面を少しつつ剥いでおこなわれている。266は底部片で、平底の底部から内湾気味に立ち上がる。外面には赤色顔料の付着が見られる。267は無頭蓋の口縁部片である。口縁部は強く外反し、外面から口縁部内面にかけて赤色顔料が塗布される。外面は横ナデ、内面は斜めの刷毛目調整の後、指おさえを施す。268は袋状口縁をもつ小型の壺である。口径6.1cm、器高15.6cm、底径6cmを測る完形品である。やや不安定な平底から胴部が大きく張る偏球状の体部をもつ。外面には縦方向の刷毛目調整がわずかに残る。また、外面には赤色顔料が塗布される。269は袋状口縁壺の頸部片である。頸部中位及び頸部つけねに「コ」字状突帯が巡る。内面には指押さえが多く残り、外面には赤色顔料が施される。270は口径24.1cm、器高19.2cm、底径7.8cmを測る小壺の完形品である。長胴の体部に口縁部が緩やかに外反する。外面底部付近には刷毛目調整が残る。外面はナデで仕上げた後、赤色顔料が塗布される。

271・272は素口縁の鉢である。口縁部が内湾し、端部は丸くおさめる。271は口径に比して器高が低い浅鉢である。内外面に赤色顔料が塗布される。

273・274は坏部が鋤先状の口縁部を呈した高坏である。坏部内面から外面にかけて赤色顔料を塗布する。273は口縁部がやや外傾し、体部は丸味をもつ。口縁部内面から坏部外面にかけては横ナデ、坏部内面底部付近は指押さえの後ナデ、脚部外面は縦方向の磨き、坏部内面にはシボリ痕が残る。坏部外面には一部煤が付着する。坏部径25.5cm、器高19.6cm、脚部径14.6cmを測る。274は坏部片で、口縁部は水平をなし、内外面ともに研磨調整を施す。

275~277は壺の蓋で、天井部につまみを有する。つまみ部は薄く、裾部は大きく外に開く。276は完形品で、裾部径28.6cm、つまみ部径6cm、器高9.3cmを測る。外面には刷毛目調整が残り、赤色顔料が施される。内面には指押さえ、つまみ部内面にはシボリ痕がある。277は裾端部がわずかに凹状に窪み、つまみ部内面にはシボリ痕がある。276・277の裾内面端部には一部煤の付着が見られる。

278は大型の器台の裾部片である。器面は磨滅し、内面にはシボリ痕が見られる。



第41図 SD01 17層出土遺物実測図 (1/4)

279～285は支脚である。279は小型、280～282は中型、283～285は大型である。281～283はヘラ状の工具で縦方向に削るように調整し、他は指ナデ、指押さえで調整する。279・280は裾部がほとんど開かず円筒形である。284のように内面は開かず、裾外面のみを開いたものも見られる。また、ラッパ状に開いたものでも285は接地部が踏ん張るように内湾気味に仕上げる。281～283は裾部内面・外面ともに緩やかに移行して端部をおさめている。

286は土製品で、投弾である。丁寧なナデで仕上げ、断面は正円形をなす。長さ4.2cm、最大径2.3cmを測り、重さは19.55gである。

287は石斧の刃部である。玄武岩製で、風化が著しい。敲打によって整形され、刃部は研磨で仕上げる。幅は7.3cmを測り、厚さは最大でも2.1cmと薄い。重さは196.81gである。288は玄武岩製の磨石である。上面中央には敲打により長さ3.8cm、幅4cm程、わずかに窪んでいる。下面にも同様の痕跡がある。また、側面には一部剥離痕が残る。重さは633.16gを量る。

17層出土遺物（第41図、図版12）

289は無頸壺で、口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形品である。口径15.9cm、器高13.4cm、底径6.5cmを測る。最大径は胴部中位にあり、口縁部は強く外反する。口縁部の中央には径3mmの小孔を3.8cmの間隔で2個づつ対峙する位置に穿孔している。底部は平底を呈する。調整は胴部外面上半は横方向の研磨、下半の方向は不明であるが、研磨調整である。底部内面から口縁部にかけてはナデで仕上げる。口縁部内面から外面にかけて赤色顔料が塗布され、内面にも少量垂れている。

290は甕の底部片である。中央部が上げ底を呈し、底部から内湾気味に胴部に立ち上がる。胴部内面はナデ、底部内面は指押さえが残る。胴部外面は粗い縦方向の刷毛目で調整し、底部付近には工具痕が残る。胎土には細かい金雲母・白色砂粒を含む。

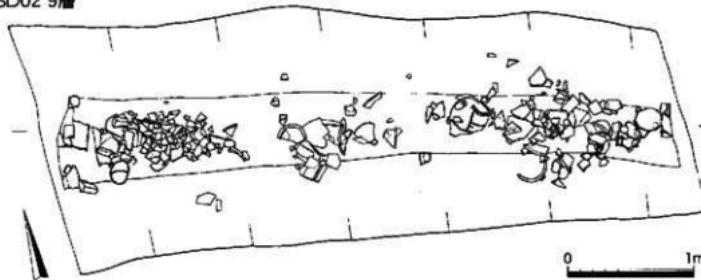
SD02（第42図、図版4・5）

SD01の北側を東西方向に走る溝である。約5mを検出した。SD01とは約5mの間隔で平行に走る。東側、西側ともに調査区外へ延びるが、第3次調査では検出されていない。調査区北側にはほぼ直交するように東西方向のトレンチを入れたが、SD02の続きは検出できなかった（第3図）。小学校のプール内で溝は途切れる可能性が大きいと思われる。狭い調査区内であるが、溝はわずかに北側に弧を描いている。溝の規模は東側で幅1.5m、深さ30cm（標高4.45m）、西側で幅2.0m、深さ43cm（標高4.35m）を測る。西側の方が幅広で、やや深くなる。溝の断面は「U」字状を呈する。溝の状況はSD01と非常に類似している。7層（暗黄褐色土）と9層（黄褐色土）に大量の土器の投棄がみられる。西側の土層図（第42図）からは、7層と9層の間に遺物をほとんど含まない8層（黄色土）が見られる。上層の7層は西側では30cmと厚く遺存している。遺物は弥生時代後期初頭のものが主体である。9層は遺物が部分的に集中して出土する。中央部では潰れた状態の完形品の甕の中から小型壺が出土して

SD02 7層



SD02 9層



SD02 東壁

H=6.40m

SD02 西壁

H=6.40m

SD02 東壁

1. 灰色褐色土(蘆上)
2. 灰色灰褐色土
3. 灰褐色褐色土, 粘質土
4. 灰褐色褐色土, 黑褐色土
5. 黑褐色土
6. 黑褐色土
7. 灰褐色土, 灰色粘土(建物多く含む)
8. 灰色土
9. 灰褐色土(建物多く含む)
10. 灰褐色粘土
11. 黑褐色粘土(蘆上)
12. 黑褐色粘土上(蘆上)

SD02 西壁

1. 灰色褐色土(蘆上)
2. 灰色灰褐色土
3. 灰褐色褐色土, 粘質土
4. 灰褐色褐色土
5. 灰褐色褐色土
6. 黑褐色土
7. 灰褐色土上に灰色粘土混入(建物多く含む)
8. 灰色土(建物はとんどなし)
9. 黑褐色粘土(建物多く含む)
10. 灰褐色粘土(蘆上)

第42図 SD02 7層・9層遺物出土状況実測図(1/40)および土壠実測図(1/40)

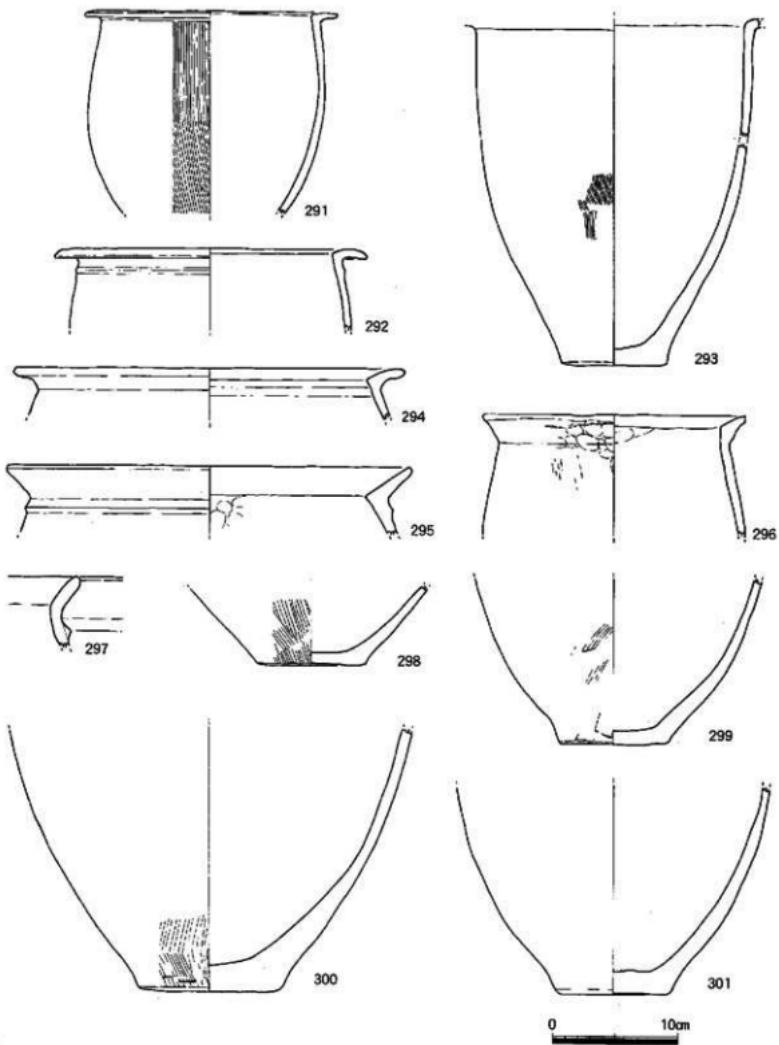
いる。時期は弥生時代中期末に位置づけられる。最下層は灰褐色粘質土となり、やや砂質土が含まれる。SD01程明確に水の流れた痕跡は確認できないが、水の痕跡は窺える。

7層出土遺物（第43～47図、図版13・14）

291～306は甕である。291は口径20.1cmを測る小型の甕で、逆「L」字口縁を有し、口縁部はほぼ水平である。内外面ともに磨滅が著しいが、外面には刷毛目調痕がわずかに残る。内面には焦げが付着し、黒褐色を呈する。292～294は逆「L」字口縁を有し、292は口縁部上面がほぼ水平（A）、294は内傾する（B）、292は口縁下に三角突帯が巡る。293は口縁部と胴部を欠損する。器壁が厚く、内面には多量の焦げが付着する。295・297・306は胴部が張り、口縁下に三角突帯を巡らす大型の甕である（C）。295は口縁部内面が直線的に内傾し、内唇部は強く内側に張り出す。297・306は口縁部内面が内面を呈し、内面の稜はやや弱くなる。306は底部を欠損するが、口縁部は口径32.1cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデで調整する。胎上には5mm大の赤褐色粒を多量に含む。296は口縁部が上方に短く立ち上がるるものである（D）。口縁部内面には粘土帯を貼り付け口縁部を作っている。雑な作りのため、接合痕が残る。外面には煤が付着する。298～301は底部片である。298は平底、299～301は不安定な平底を呈し、胴部の立ち上がりの稜線は弱い。302～305は口縁部が「く」字状を呈する甕である（E）。302・303・305は内面の屈曲部がやや不明瞭（E-2）となる。302はほぼ完形品で、口径28.2cm、器高30.4～31.8cm、底径9.3cmを測る。平底の底部からやや張った胴部へと内湾気味に移行する。305は胴部を一部欠損するがほぼ完形品である。口径27.8cm、器高45.7cm、底径11.9cmを測る。平底の底部から直線的に胴部へ立ち上がり、頸部が縮まり、口縁が「く」字状に外反する。304は内面の稜はなくなり、長く上方に引き延ばした口縁（E-3）となる。底部は不安定な平底を呈する。

307～309は広口甕である。307・308の口縁部は鋤先状を呈し、307はやや内傾、308はやや外傾する。307は口縁部片で、口唇部に工具による刻目を施し、頸部中位とつけねに鈍い「M」字状突帯が巡る。肩が張らず、そのまま胴部に移行する。外面は頸部に横方向の研磨痕がわずかに見られるが、大半は磨滅している。頸部内面には指押さえが多く残る。308は頸部中位とつけね、胴部に2条の鈍い「M」字状突帯が巡る。307・308は口縁部内面から外面にかけて赤色顔料を塗布する。309は口縁部が素口縁をなし、ほぼ完形品である。口径30.8cm、器高33.5cm、底径7.5cmを測る。胴部中位には外面からの丁寧な打ち欠きが認められる。頸部内外面と胴部外面上位には横方向、胴部外面下位には縦方向の研磨痕が見られ、外面には赤色顔料が施される。310～315は複合口縁甕である。310の口縁上部はやや外傾し、端部は丸くおさめる。肩の張りは全くなく、そのまま胴部へ移行する。胴部欠損部には内側からの打ち欠きが見られる。外面には赤色顔料が塗布される。311は短頸と思われ、頸部のすばまりは急である。内外面とともに器面が荒れ、頸部外面には指押さえの痕跡がわずかに残る。312は緩い稜線をもつ口縁部で、頸部は緩やかに立ち上がる。外面はナデ、内面は指押さえとナデで調整する。313は胴部片で、胴部から頸部が緩やかに立ち上がる。外面は縦方向の研磨で調整され、赤色顔料が塗布される。内面はナデで調整され、頸部つけねには粘土帯の堆積目が残る。314は口縁部を欠損する。やや上げ底気味の底部から大きく胴部が張り、頸部へ至る。頸部つけねには三角突帯が巡る。外面上位には縦方向の刷毛目、底部内面には指押さえが残るが、他は著しく磨滅する。315は底径6.1cmを測る厚い平底を呈する。体部は球状を呈し、丸味をもつ。316は長胴で、短く頸部が内傾し、口縁部が外反する。口縁端部は面取りされる。外面底部付近には工具の小口痕を横方向にヘラで調整する。317は底部片で、不安定な平底を呈し、外面底部付近には小口痕が多く残る。

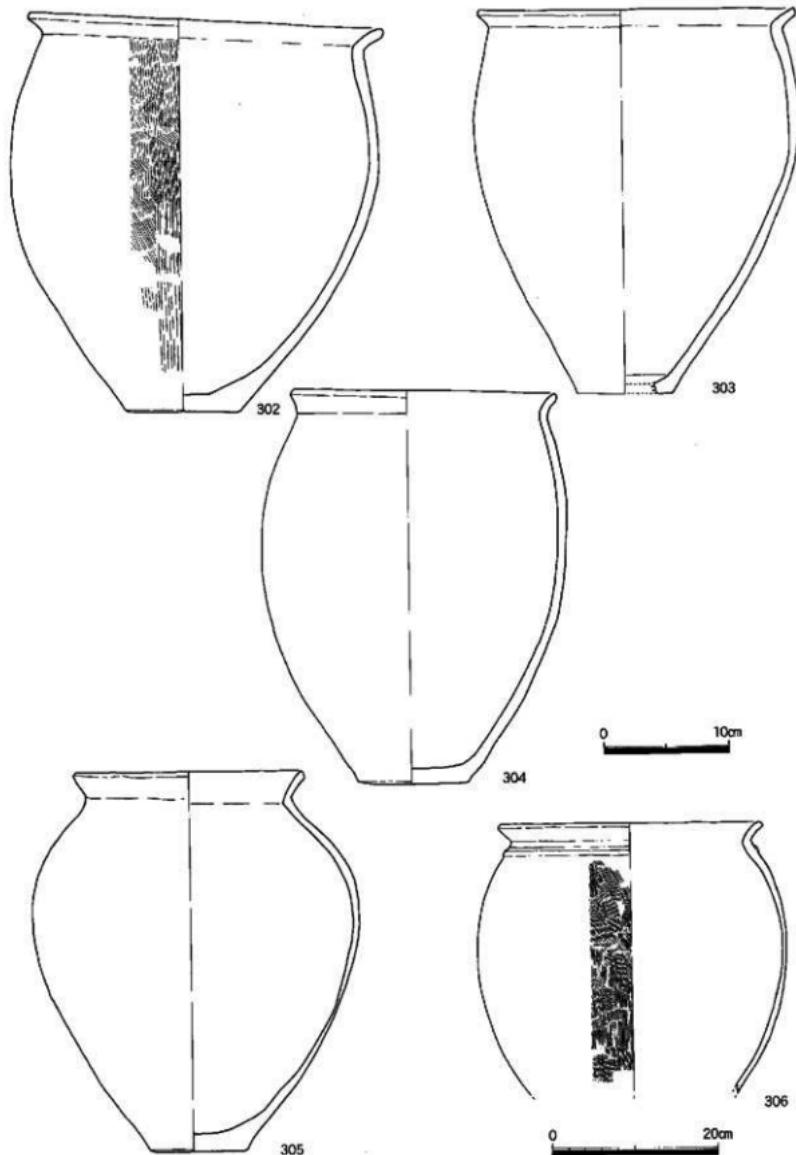
318・319は鉢である。318は口縁部を「く」字状に外反させ、内面の屈曲は明瞭である。体部は直線的である。内外面に指押さえが多く残る。319は体部が直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内



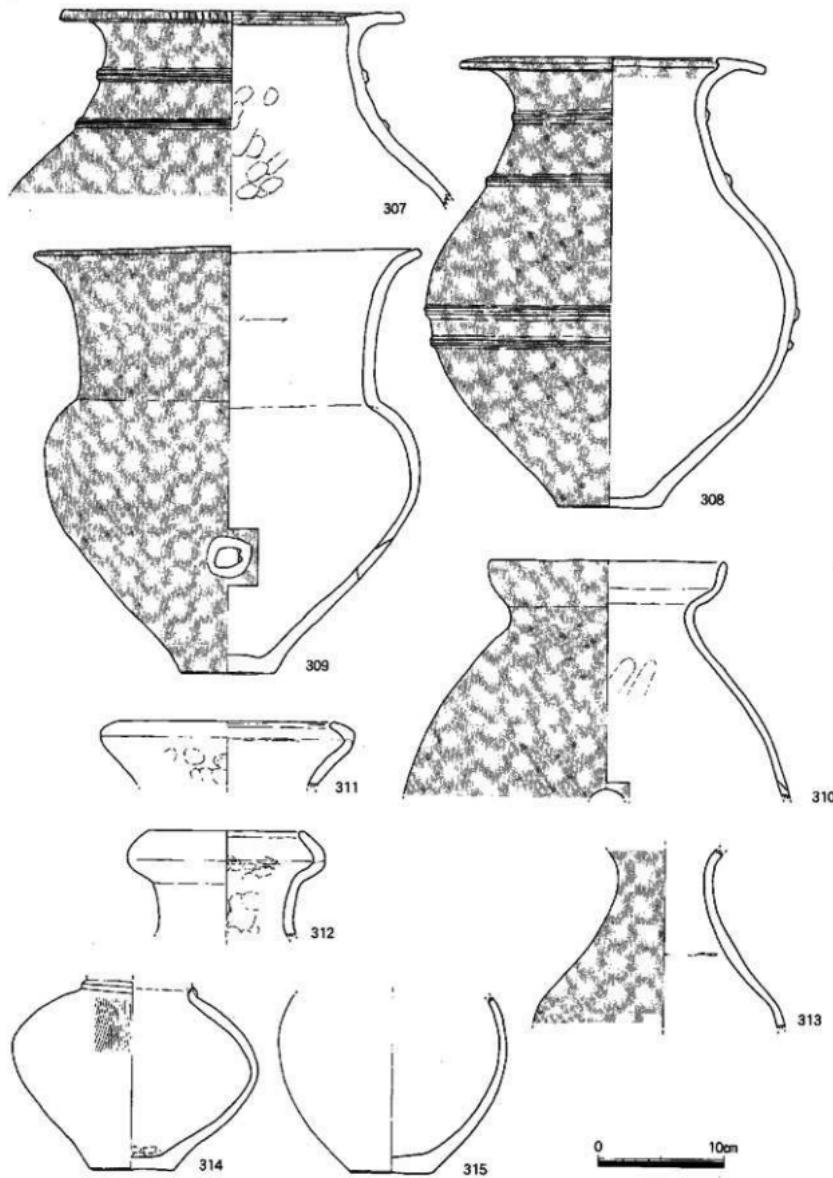
第43図 SD02 7層出土遺物実測図① (1/4)

外面ともに研磨で調整され、赤色顔料が塗布される。

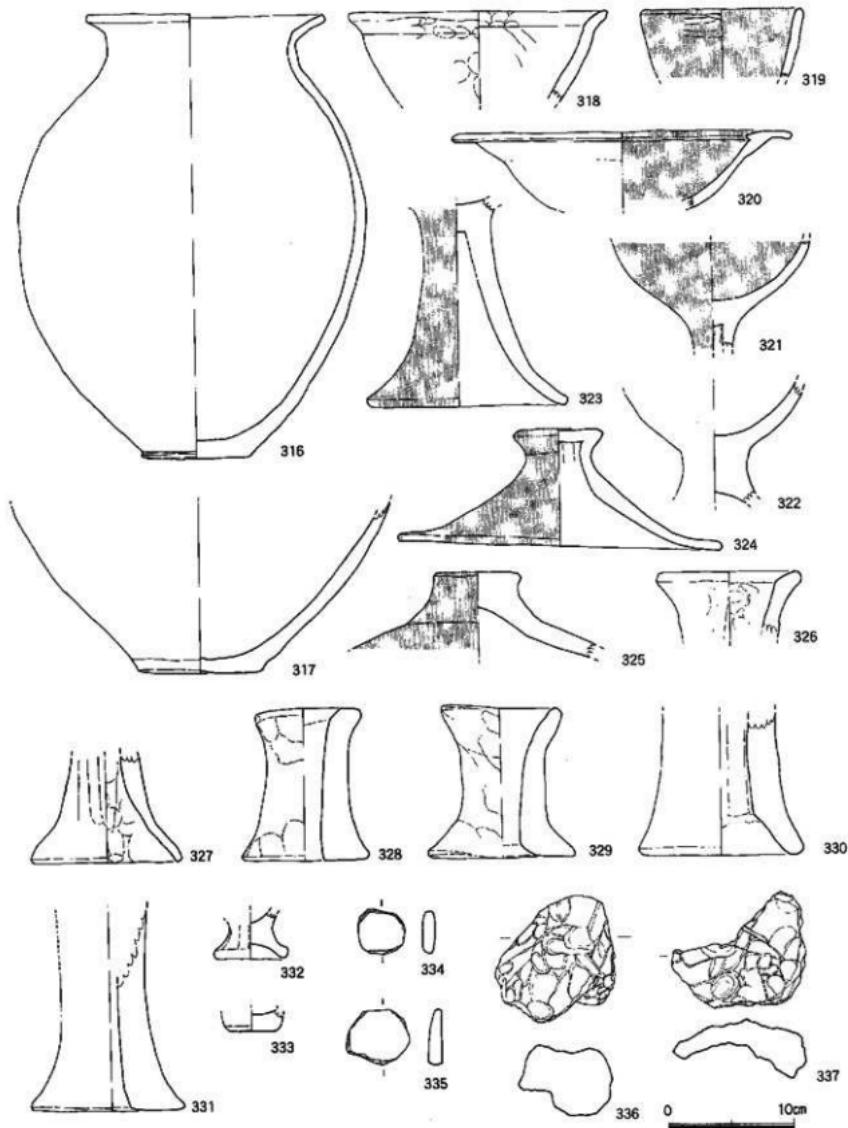
320～322は高坏である。320は坏部片で、口縁部は鋸先状を呈し、口縁部内面はほぼ水平である。器面は著しく磨滅し、坏部内面にわずかに赤色顔料が認められる。321・322は坏部片で、椀状を呈すると思われる。坏部は丸味をもって立ち上がる。321は内外面ともに研磨調整され、赤色顔料が塗布され



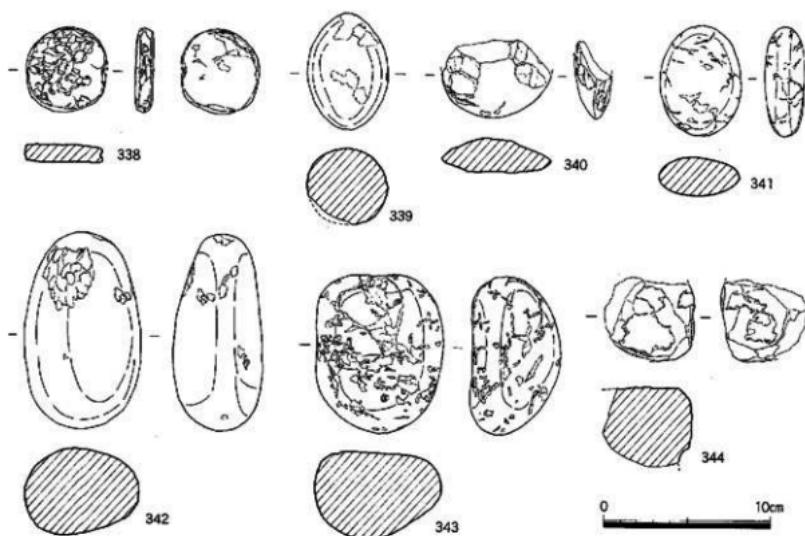
第44図 SD02 7層出土遺物実測図② (305・306は1/6、他は1/4)



第45図 SD02 7層出土遺物実測図③ (1/4)



第46図 SD02 7層出土遺物実測図④ (1/4)



第47図 SD02 7層出土遺物実測図⑤ (1/3)

る。脚部内面にはシボリ痕がある。322は内外面ともに著しく磨滅する。323は長脚の脚部片である。器壁は厚く、内外面ともに著しく磨滅する。外面には赤色顔料がわずかに残る。

324・325は天井部につまみを有する壺の蓋である。324のつまみ部分は薄く、裾部は大きく外に向く。裾部径25.8cm、つまみ部径7.3cm、器高9.8cmを測る。つまみ部内面にはシボリ痕がある。内外面に煤が付着する。325はつまみ部が厚く、内外面ともにナデで調整する。外面には赤色顔料が塗布される。

326・327は円筒形の器台である。指押さえの後、ナデで調整する。327の外面には縦方向にヘラナデの痕が残り、裾部は内湾気味に開く。

328～331は支脚である。328・329は中型、330・331は大型のものである。指押さえ、指ナデで調整する。器壁が厚く、接地面を広く作る。器壁は全て著しく磨滅する。

332・333はミニチュア土器である。332は脚部片で、指押さえ、ナデで整形する。333は底部片で底径4.6cmを測り、平底を呈する。体部への立ち上がりは丸味をもち、ナデで調整する。

334・335は円盤形土製品で、ナデで仕上げる。

336・337は粘土塊で、指頭痕、指ナデが多く残る。この層からは他にも大小7点ほど出土する。

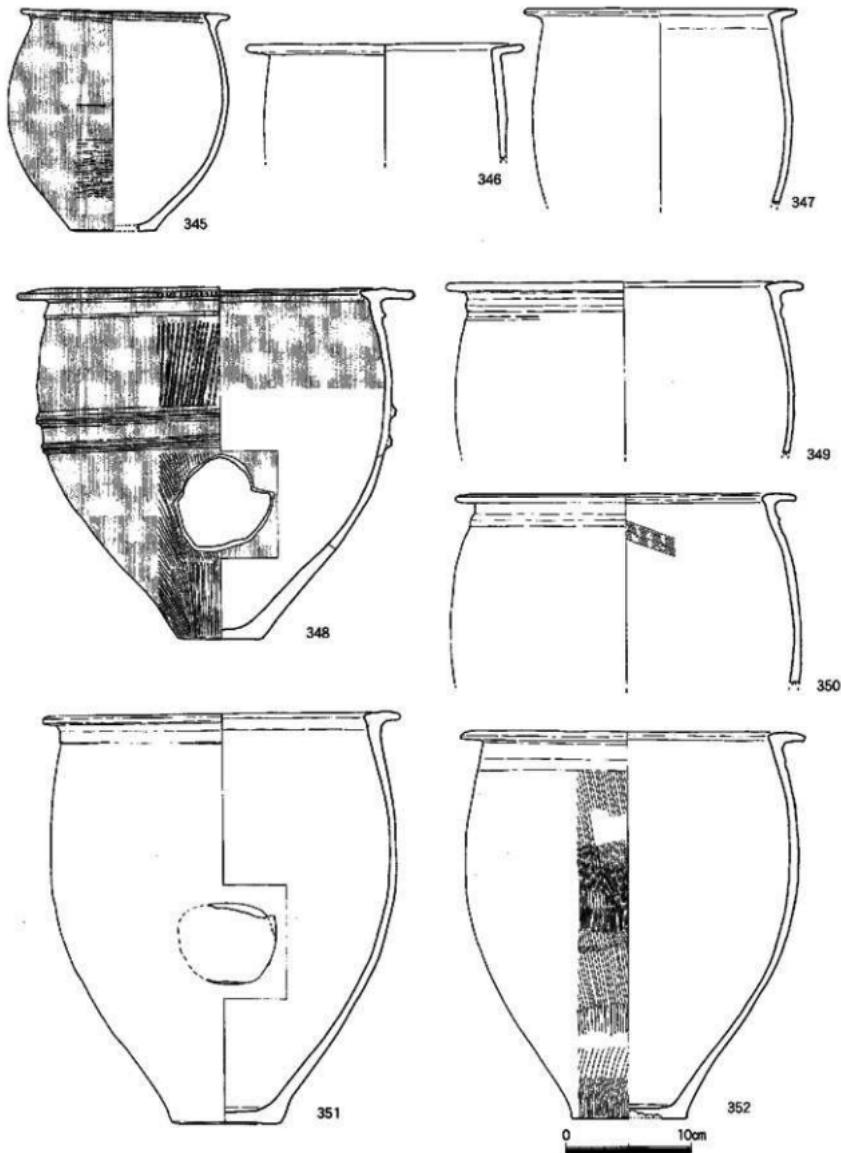
338～344は石器である。338は紡錘車の未製品である。滑石製で、径4.6～5cm、厚さ1.1cmを測り、重さは40.7gである。整形途中のもので、磨かれているが、穿孔の痕跡は見られない。339は砂岩製の投弾である。表面が一部薄く剥がれています。長さ6.8cm、最大径4.8cmを測り、断面はほぼ正円形をなす。重さは207.33gである。表面は丁寧に磨かれる。340は玄武岩製の石斧の刃部片である。側面は敲打、刃部は丁寧に磨かれている。刃部には敲打痕が見られる。重さは64.9gである。341～343は磨石である。341の石材は白色を呈した硬質の堆積岩である。平面は橢円形を呈し、長軸6.5cm、短軸4.8cm、最大厚2.2cmを測る。重さは99.3gである。擦痕等は確認できないが、表面は敲打にも使用さ

れたと思われ、部分的に剥落する。342は花崗岩製で、上端部と側面は敲打も行ったと見られ、薄く剥落する。長さ11.5cmを測り、重さは592.97gである。343は緑色の堆積岩で、非常に硬質である。部分的に白色を呈する。河原石をそのまま用いたと思われ、磨いた面は平坦となっている。敲打具に転用され、敲打痕が多く残る。長さは9.4cm、重さは612.49gである。344は玄武岩製の叩き石の破片である。敲打の痕跡が見られ、不規則な平坦面もみられることから磨石として使用した可能性もある。また、火を受けて表面が剥落し、部分的に赤色化した部分と黒色を呈し煤の付着がみられる部分がある。重さは199.15gを量る。

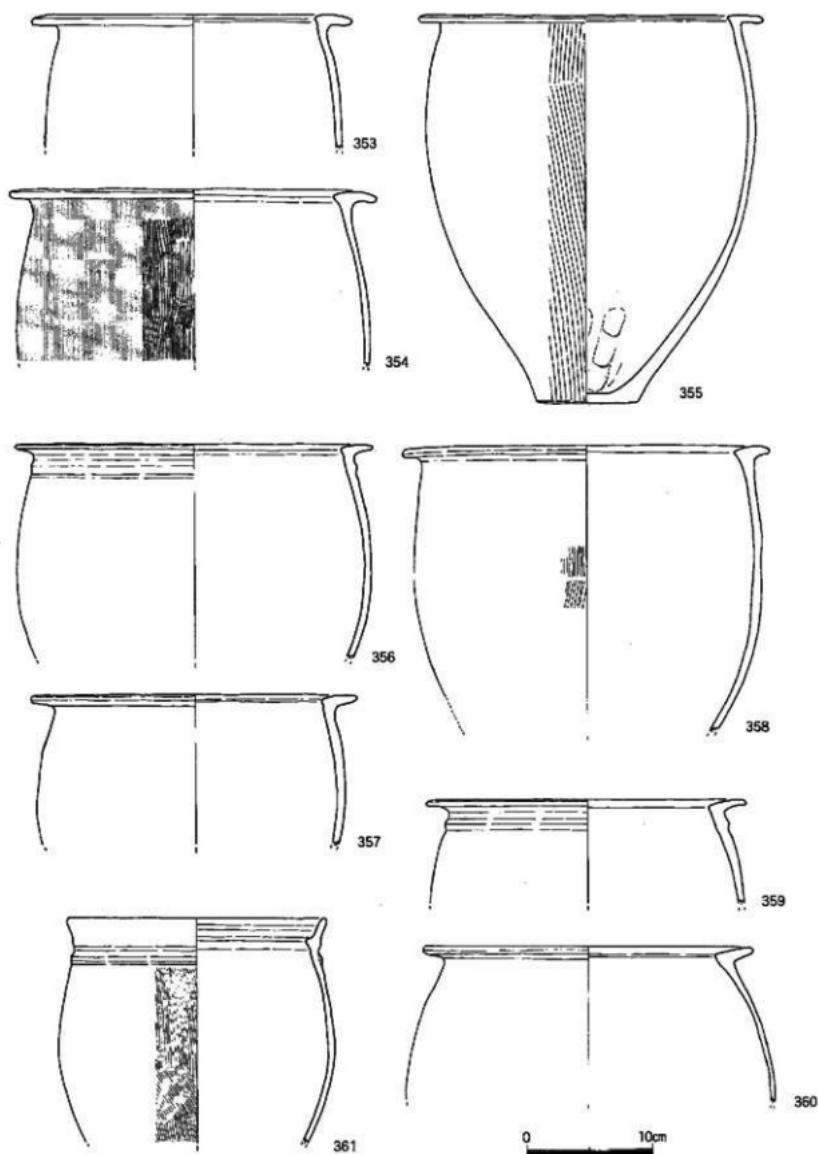
9層出土遺物（第48～52図、図版14）

345～366は甕である。345～360は逆「L」字状口縁を有する。345～347は小型のもので、345は口径16.5cm、器高17.6cmを測る。外面は横方向の研磨調整、内面はナデで調整する。口縁部内面から外面にかけては赤色顔料が塗布される。346は口縁部が内傾し、ほとんど胴部は膨らまず、直線的に移行する。外面には煤が付着する。347は復元口径21.6cmを測り、口縁部はやや内傾する。器面は磨滅し、調整不明である。外面に煤、内面に焦げが付着する。348は内面上半と外面に赤色顔料が施された甕である。完形品で口径31.4cm、器高28cm、底径6.6cmを測る。長く延びた口縁を有し、口縁部上面が凸面を呈する。口唇部には工具による刻目を施し、内唇部が強く内側に張り出す。口縁下に三角突帯、胴部に2条の鈍い「M」字状突帯が巡る。三角突帯と「M」字状突帯の間には横方向の研磨の後、暗文が施される。体部下半は縱方向の研磨で調整する。内面はナデである。体部中位には焼成後、外面からの打ち欠きがある。349～352は口縁部上面がほぼ水平（A）で、349・350は口縁下に三角突帯、351・352は沈線状の瘤みが巡る。351は口径28.4cm、器高32.5cm、底径8.7cmを測る。口縁下には強い横ナデによって沈線状の瘤みが部分的に見られる。内面はナデ、外面は著しく磨滅する。体部中位には外側からの丁寧な打ち欠きが認められる。352はほぼ完形品で、口径27.3cm、器高30.7cm、底径9.2cmを測る。外面の沈線状の瘤みより下位は縱方向の刷毛目、口縁部付近は横ナデ、内面はナデで調整される。外面上半は煤、内面には焦げの付着がある。353～355は口縁部上面がやや外傾するものである。354は口径28.9cmを測り、外面は縱方向の刷毛目、口縁部付近は横ナデ、内面はナデで調整する。外面には赤色顔料が施される。355は平底の底部から直線的にやや張った胴部へと移行する。外面は粗い刷毛目、内面底部付近は指押さえが残るが、他はナデで調整される。外面には煤の付着が見られる。356～360は口縁部上面が内傾（B）し、356・359は口縁下に三角突帯が巡る。356～358は口縁部内面下の強い横ナデによって内唇部が内側に張り出す。357は外面に煤が付着する。359は口径25.4cmを測り、胴部の張りが強い。360は体部が大きく張り、口縁部が強く外反する。体部の器壁が薄く、内面はナデ、口縁部付近は横ナデで調整される。361は底部を欠損する。口径31cmを測り、口縁部が上方に長く立ち上がるるものである。内面の頸部には三角突帯を巡らし、口縁端部は丸くおさめる。また、外面の口縁直下には低い三角突帯が巡る。外面は粗い縱方向の刷毛目で調整する。362～366は底部片である。平底を呈し、内湾気味に立ち上がる。すべて外面には煤、内面には焦げの付着が見られる。

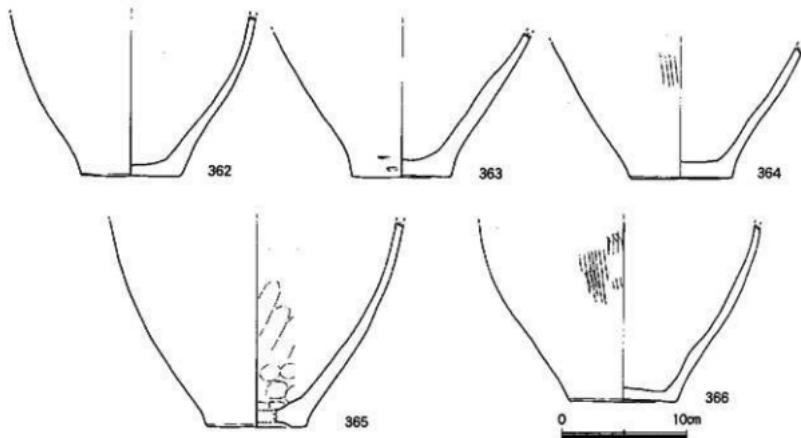
367～369は無頸甕である。367は完形品で、口径11.7cm、器高10.2cm、底径4.8cmを測る。最大径は胴部中位にあり、14.2cmを測り、口縁部は緩く外反する。口縁部の中央に径2.5mmの小孔を2.3cmの間隔で2個づつ対称する位置に穿孔している。底部は平底を呈し、内湾気味に胴部に至る。胴部外面は横方向の研磨、底部内面から口縁部にかけては丁寧なナデで仕上げる。口縁部内面から外面にかけて赤色顔料が塗布され、内面にも少量垂れている。368は底部を欠損し、最大胴部径は体部中位より上にある。口縁部は緩く屈曲し、端部は丸くおさめる。体部中位には外側から打ち欠きを行い、途中でやめている。長さ3.7cm、幅2.3cmほど、外面が薄く剥がれています。赤色顔料の痕跡がわずかに残る。369



第48図 SD02 9層出土遺物実測図① (1/4)



第49図 SD02 9層出土遺物実測図② (1/4)



第50図 SD02 9層出土遺物実測図③ (1/4)

は復元口径15.4cm、器高17cm、底径6.6cmを測り、口縁部を半分程欠損する。肩部の張りは弱く、口縁部は強く外反する。外面は横方向の研磨、内面底部付近は指押さえで調整する。外面には赤色顔料が塗布される。370～373は底部片である。370・371は小型の壺で、371は底径4cm、372は5.8cmを測り、上げ底を有する。内外面ともに磨滅し、どちらも赤色顔料の痕跡が残る。372は上げ底気味の底部から内湾気味に肩部へ移行する。内外面ともに横方向の研磨調整が行われ、外面には赤色顔料が施される。373も372同様、上げ底気味の底部を有し、器壁は薄い。底部内面には指押さえが残る。内面に1個所赤色顔料の痕跡が認められるが、磨滅のため不明である。374は鋤先状口縁をもつ広口壺である。口縁端部を欠損するが、ほぼ完成品である。口縁部内径15cm、器高48cm、最大胴部径40.5cm、底径9cmを測り、大型である。頭部中位とつけねに「コ」字状突帯、胴部に2条の鋸い「M」字状突帯が巡る。肩の張りはなくナデ肩で、体部は球状を呈する。器面は著しく磨滅している。

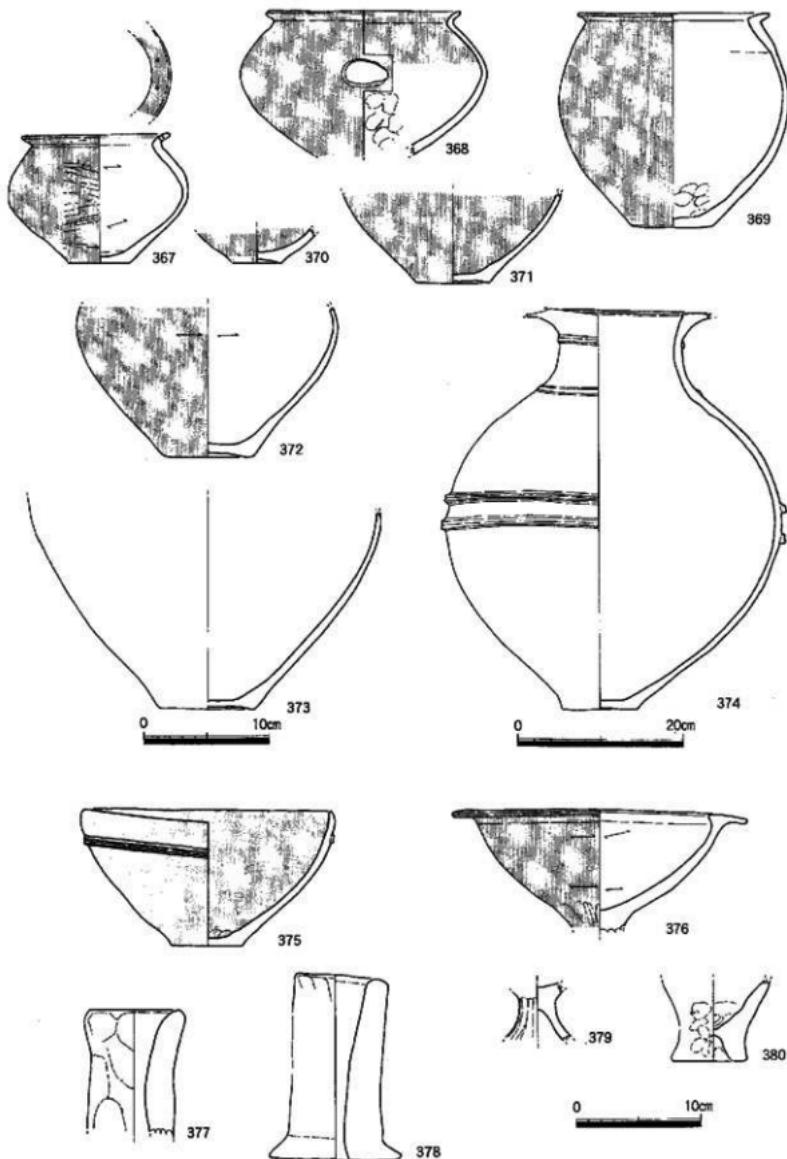
375は鉢である。一部欠損するが、口径20cm、器高9.8～10.8cm、底径5.8cmを測る。平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。口縁下には「コ」字状突帯が巡り、突帯の上下は強い横ナデを施す。磨滅が著しく、底部付近には指押さえが認められるが、調整は不明である。内外面ともにわずかに赤色顔料の付着が見られる。

376は高壺で、脚部を欠損する。口縁部は鋤先状を呈し、口縁内面はわずかに外傾する。体部はやや丸味をもち、本部は内外面ともに横方向の研磨、脚部とのつけね部分は縱方向の研磨で調整する。外面には赤色顔料を塗布する。壺部口径23.6cmを測る。

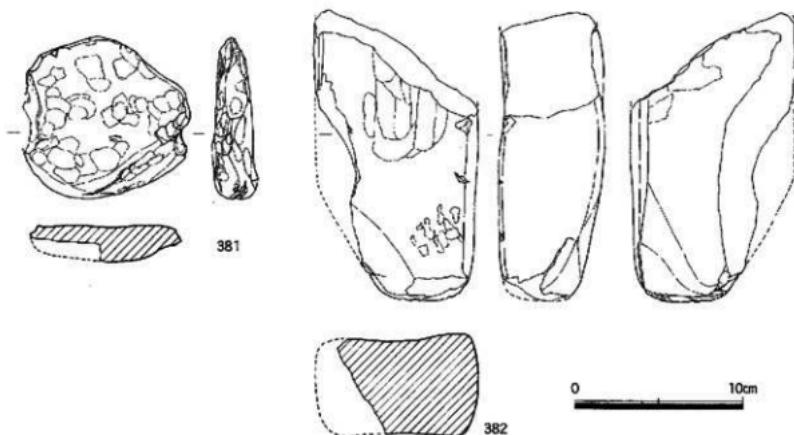
377・378は中型の支脚である。指ナデ、指押さえで調整され、器面には凹凸が残る。

379はミニチュアの高壺で、壺部と脚端部を欠損する。脚部外面は丁寧なヘラナデ、内面はナデで調整される。380は手捏ね土器の脚部片と思われるが、壺底部内面が「V」字状をなすため、天地逆の可能性もある。全面指押さえで調整される。

381は玄武岩製の打欠石錐で2個所側面に抉りを入れる。一部欠損するが重さは254.48gを量る。382は花崗岩の石皿である。部分的に欠損するが、丁寧な研磨で整形されている。使用した上面と下面はどちらもわずかに瘤む。また、中心には敲打痕も残る。



第51図 SD02 9層出土遺物実測図④ (374は1/6、他は1/4)



第52図 SD02 9層出土遺物実測図⑤ (1/3)

SD09 (第4図、図版6)

調査区の南側を東西方向に走る溝状の造構である。東側は水道管により削平されている。西側は調査区外へ延びる。遺存状況は悪く、深さ3cm程度である。覆土は灰褐色土に黄色土、黒色土が斑状に混入する。遺物は白磁、青磁、須恵器、土師器の小片、鉄滓（鍛冶滓か？）、炉壁（ガラス質状に溶融）が出土する。

2) 土坑

SK03 (第53図)

調査区の中央に位置し、西側を水道管により削平されている。平面プランは梢円形を呈し、長さ2.5m、幅1.5mを測る。遺存状況は悪く、深さは13cmである。覆土は灰褐色土を呈する。遺物は青磁小片、黒色土器A類の胴部片、土師器小片、鉄滓（鍛冶滓か？）が出土している。

出土遺物 (第53図)

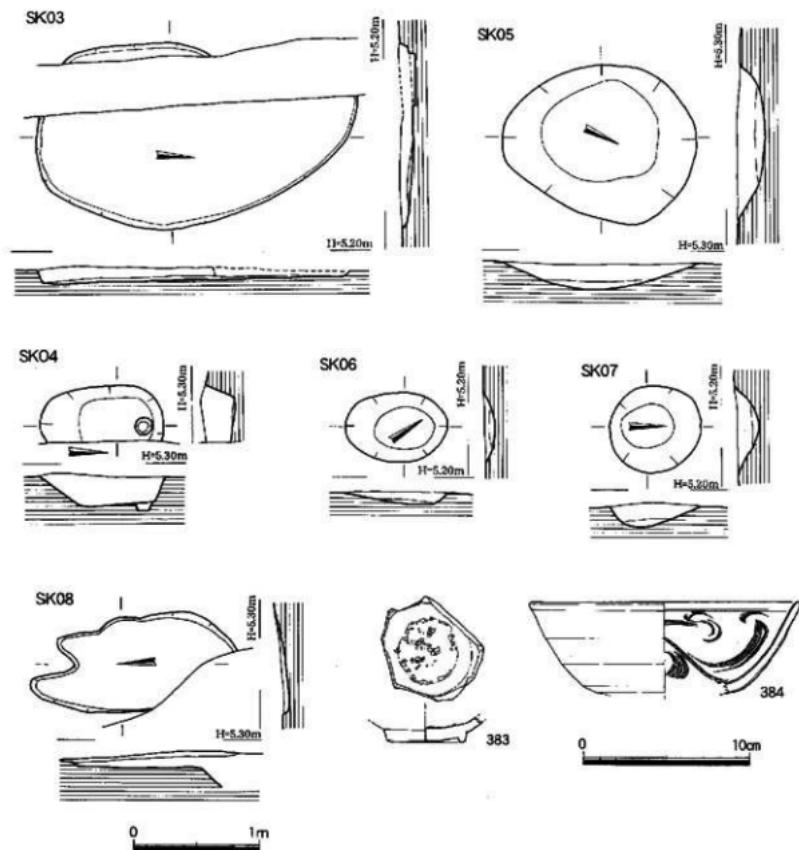
383は白磁の高台付皿のⅢ類である。見込み部分の釉を輪状に搔き取っている。見込みには日跡が多く残る。底部は露胎である。極め細かい白灰色の胎土にやや緑がかった白灰色の釉が施される。384は龍泉窯系の青磁碗I-2類である。底部は欠損する。内面には草花文をもち、砂粒を含む灰色の胎土に淡いオリーブ色の透明釉が施される。全面に貫入、外面にはピンホールが見られる。

SK04 (第53図、図版6)

調査区の南東隅に位置し、東側は調査区外へ延びる。平面プランは梢円形を呈し、長さ1mを測る。深さは最も深い部分で25cmである。覆土は灰色土に白色土がブロック状に混入する。遺物は土師器の高台付碗の底片が出土する。

SK05 (第53図、図版6)

調査区の南側に位置する。平面プランは梢円形を呈し、長さ1.55m、幅1.25m、深さ20cmを測る。



第53図 SK03~08実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

覆土は灰褐色土に黄色土が混入する。遺物は白磁、土師器の小片が出土する。

SK06 (第53図、図版6)

調査区の中央東側に位置する。平面プランは梢円形を呈し、長さ80cm、幅55cm、深さ10cmを測る。覆土は灰褐色土に黄色土、黒色土が斑状に混入する。遺物は土師器の高台付碗の底部片、土師器小片、鉄滓（鍛冶滓か？）が出土する。

SK07 (第53図、図版6)

調査区の中央西側に位置する。直径70cmの円形を呈する。深さは20cmを測る。覆土は灰褐色土である。遺物は出土しない。

SK08 (第53図、図版6)

調査区の南側に位置し、西側を水道管に削平されている。不定形をなし、最も深い部分でも13cmを測る。覆土は灰褐色土である。遺物は白磁小片、鉄滓（鍛冶滓か？）が出土する。

IV. まとめ

今回の調査では第3次調査で確認されていた弥生時代の溝（SD01）の続きを検出した。また、この溝に並行して北側にもう1本溝（SD02）が走ることも確認した。2本の溝はほぼ同時期に掘削され、廃棄された時期もほぼ同時期と出土遺物から考えられる。表土を剥いた段階で土器が露出し、破碎していたため、当時の掘削面はもっと上である。この2本の溝は幅5mの間隔で並行に走っており、ともに大量の土器が廃棄された状況であった。今宿五郎江遺跡では第1次・2次・3次調査で溝が検出されているが、いずれも大量の土器が投棄されていた。これまでの調査で、弥生時代中期～後期にかけての集落のあり方が概ね明らかになってきている。遺跡の立地する台地は第2次調査で確認されたSD100によって北台地と南台地に分離される。SD100からは弥生時代中期中頃～後期初頭の遺物が大量に出土しており、後期初頭には埋没している。これと連動して南台地では中期中葉に集落の萌芽が認められ、後期初頭まで続いている。今回検出したSD01・02の溝は弥生時代中期末に掘削され、後期初頭まで土器の廃棄は続く。ほぼ北台地の集落の存続と時期を同じくする。SD01の遺物出土状況は土器の南側からの廃棄を示している。SD100が東側にどの様な方向で延び、南台地がどこまで伸びるのかは今後の調査で明らかにならうが、SD01と南台地の集落との関係が考えられる。次に北側を走るSD02であるが、この溝がどのように延びているかは今回の調査では判明しなかった。この溝の北側には北台地が伸びているが、ここでは弥生時代の遺構は未検出である。やや後続して北側の第1次調査のSD01、西側の第2次調査のSD50からは弥生時代中期後半～後期中頃までの遺物が出土する。遺跡内を巡る溝の性格、溝への大量廃棄の意義付け、集落の変遷等は今後の調査の課題としたい。

次に溝出土の遺物について述べる。SD01では10層で大型の完形品が目立つが、9・10・11層では復元可能な破片が主体であった。遺物出土層は無遺物層を挟み、分類可能な状況であったが、無遺物層を挟まない部分では整然と分類し得たとはいいがたい。特に10層遺物は完形品が多いためか復元を行うと、他層からの出土も多い。また10層出土の59・60は10層全体から破壊した状況で出土する。接合したものの大半は近隣のグリット間での接合であった。出土した遺物は壺、壺、鉢を中心に、高杯、蓋、器台、支脚等である。土器の器形は全体的にやや弛れた傾向を示す。糸島平野ではこの時期の資料は充実しており、変遷も確立している。今回出土した遺物もこの範疇に当てはまる。図化してない破片遺物を含めて特徴を述べる。壺は大きく5つに分類したが、下層の11層では（A・B）が圧倒的に多い。10層では（E）の割合が増え、量的には半々となる。上層の9層・21層では（A・B）が激減し、（E）が主体となる。（C）は各層にまんべんなく出土するが、下層の10・11層に大型のものが目立つ。（D）は11層・10層に多く見られるが、9層で少量となり、21層では出土しない。壺は10・9層で多く出土し、袋状口縁壺は10層の段階で増加し、丸味を持った口縁は9層の段階になると、明瞭な屈曲をもつようになる。鉢は10層で個体数が増え、底部に穿孔をもつものが見られる。9層になると、器形・サイズにバリエーションが見られ、大型品には底部穿孔をもつものが多数見られる。21層になると減少する。器台は岡面土では9層で最も多く見られるが、10層でも破片が多く出土する。11層・21層では少量である。支脚も同じ傾向を持つ。底部形態はやはり平底が圧倒的に多く、丸底は少量ながら10層段階から見られる。土器の出土量は10・9層が最も多く、21層では上面の削平を考慮に入れても少量となる。これは集落の消長とも関連すると思われる。SD02も同じ傾向をもつ。溝の長さはわずか5mであるが、土器の出土量は底部の器形、直径とその遺存率からSD01の壺・壺・大型の鉢だけでも293点以上、SD02は34点以上である（最小値である）。時期は下層は「須玖Ⅱ式」、上層は「高三浦式」に比定される。

図 版



SD01・02 (北から)

今宿五郎江遺跡第5次調査

図版1



(1) 調査区周辺（北から）



(2) 調査区全景（北から）



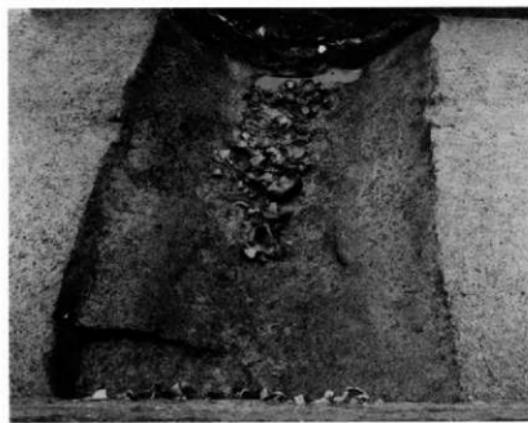
(3) SD01 21層遺物出土状況（東から）



(1) SD01 9層遺物出土状況（東から）



(2) SD01 10層遺物出土状況（東から）



(3) SD01 11層遺物出土状況（東から）



(1) SD01 完掘状況（北から）



(2) SD01 東壁土層（西から）



(3) SD01 西壁土層（東から）



(1) SD02 7層遺物出土状況（北から）

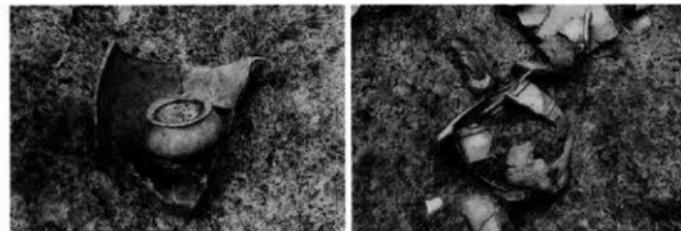


(2) SD02 7層遺物出土状況（東から）

(3) SD02 7層遺物出土状況（南から）



(4) SD02 9層遺物出土状況（南から）



(5) SD02 9層遺物出土状況（東から）

(6) SD02 9層遺物出土状況（東から）



(1) SD02 完掘状況（東から）



(2) SD02 東壁土層（西から）



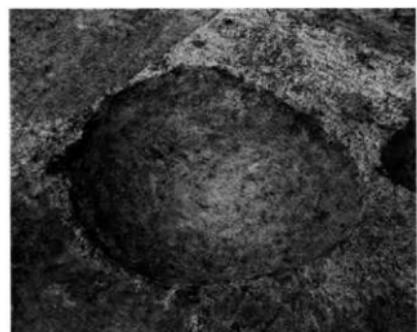
(3) SD02 西壁土層（東から）



(1) SD09 (西から)



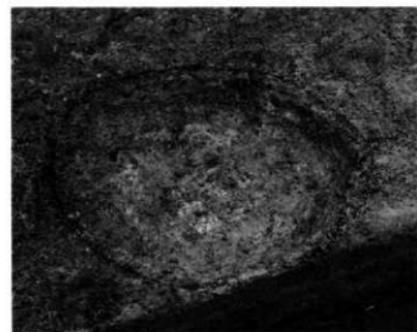
(2) SK04 (東から)



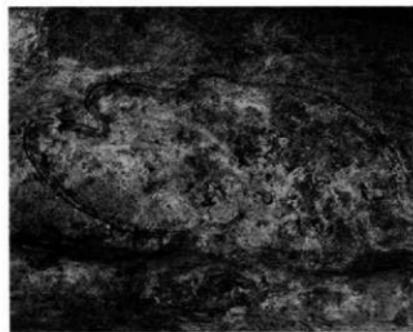
(3) SK05 (西から)



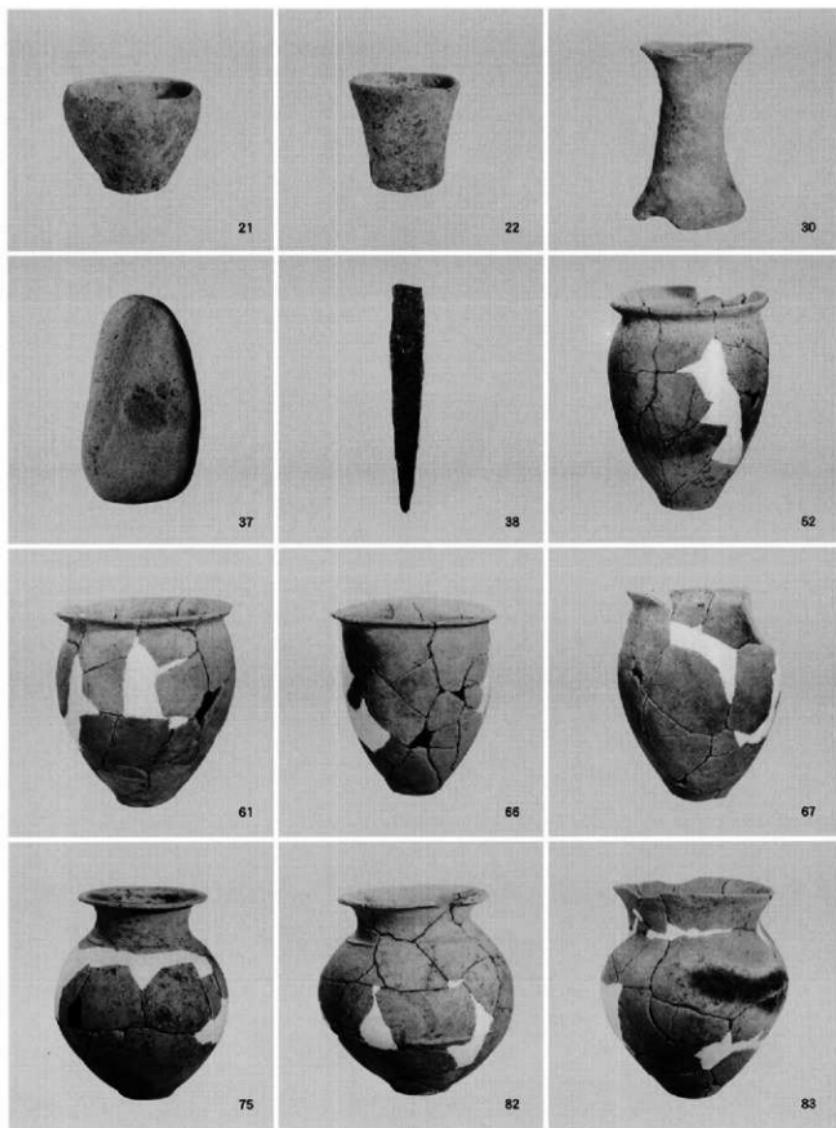
(4) SK06 (東から)

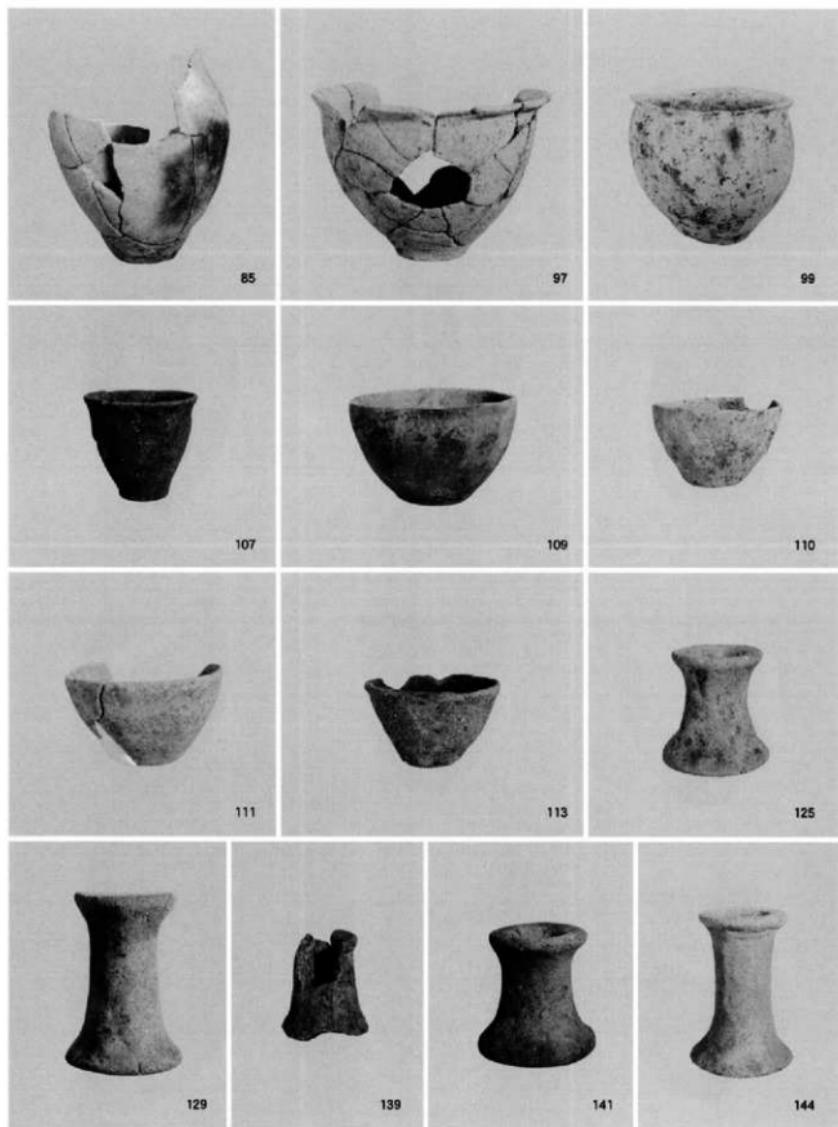


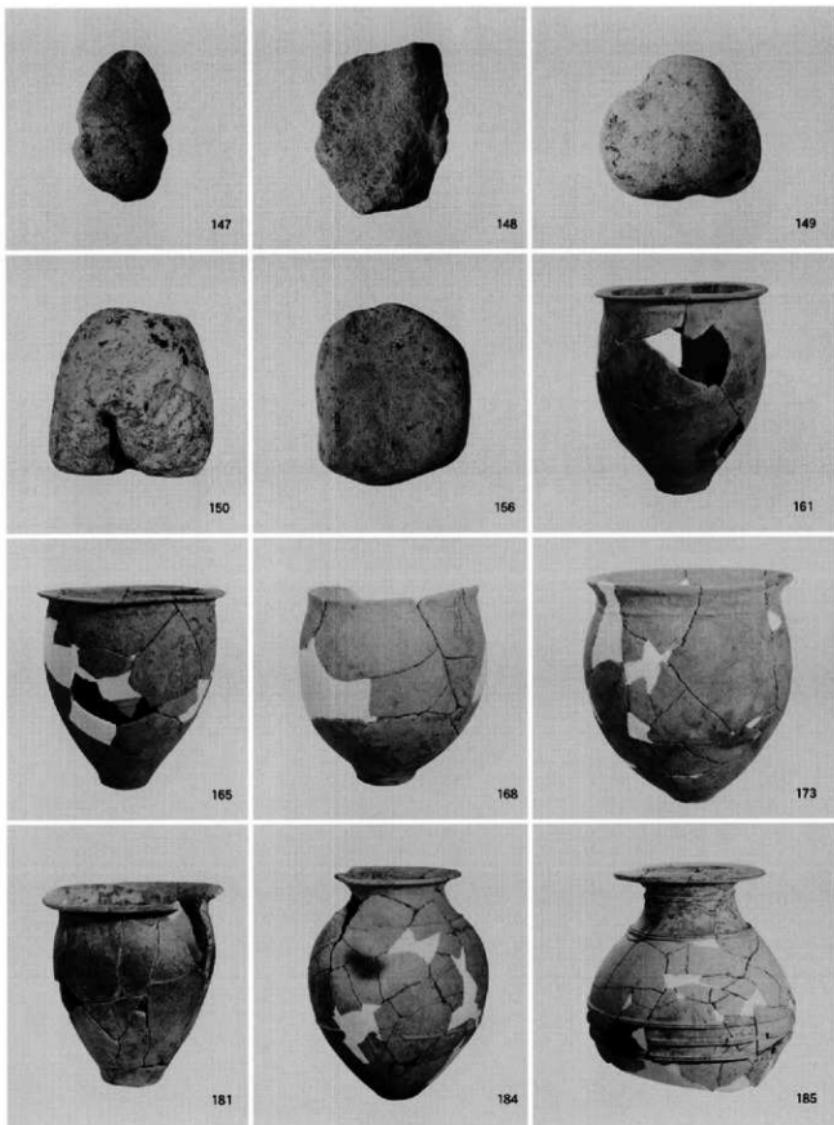
(5) SK07 (西から)

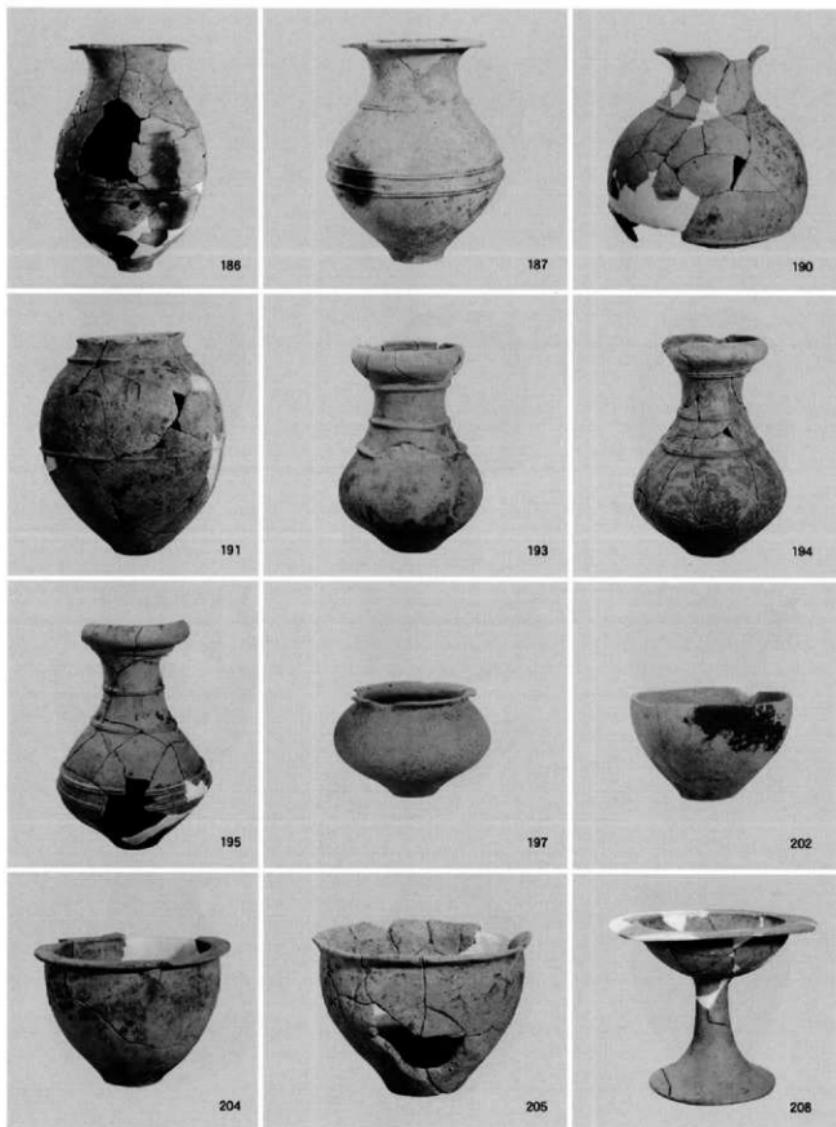


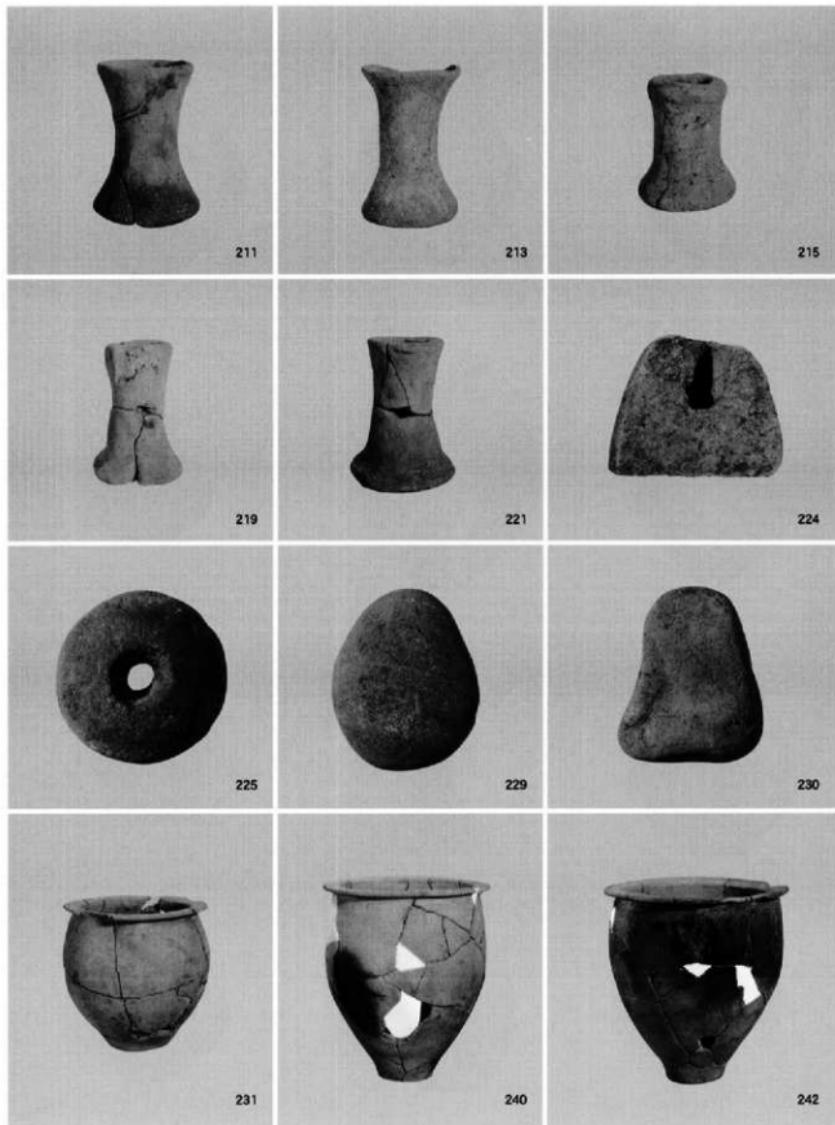
(6) SK08 (西から)

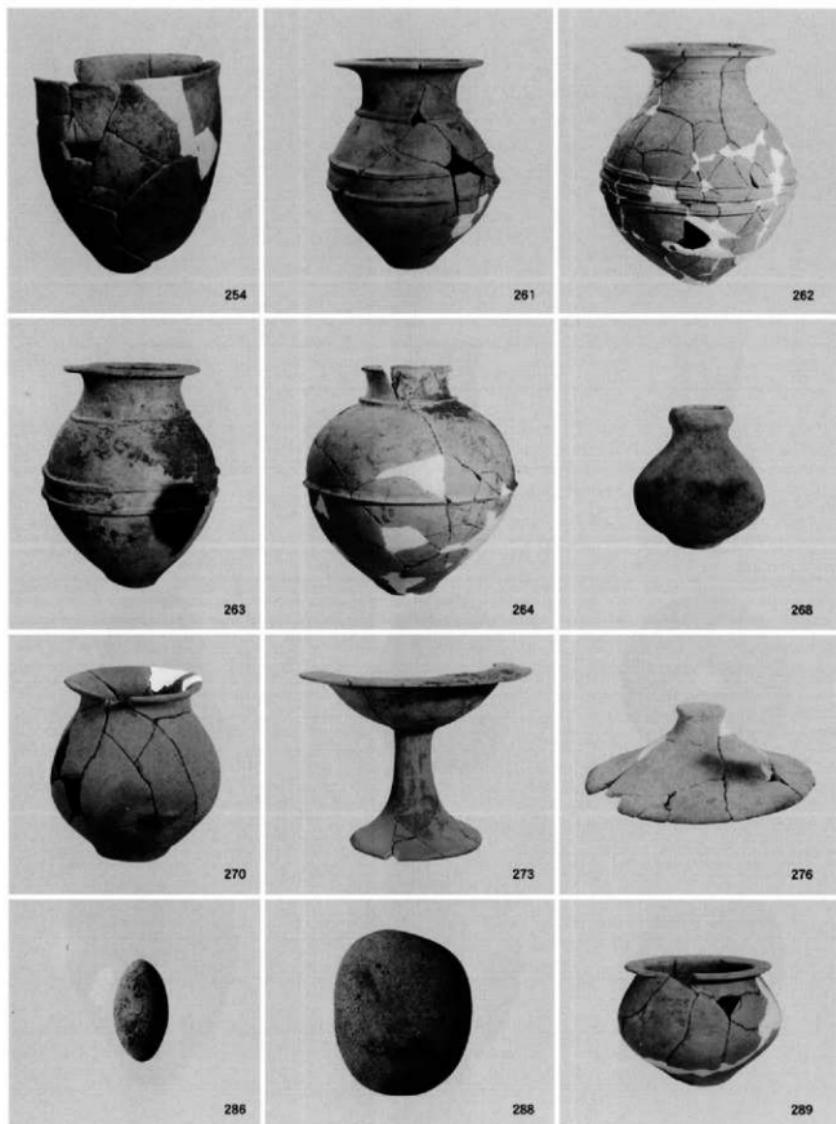


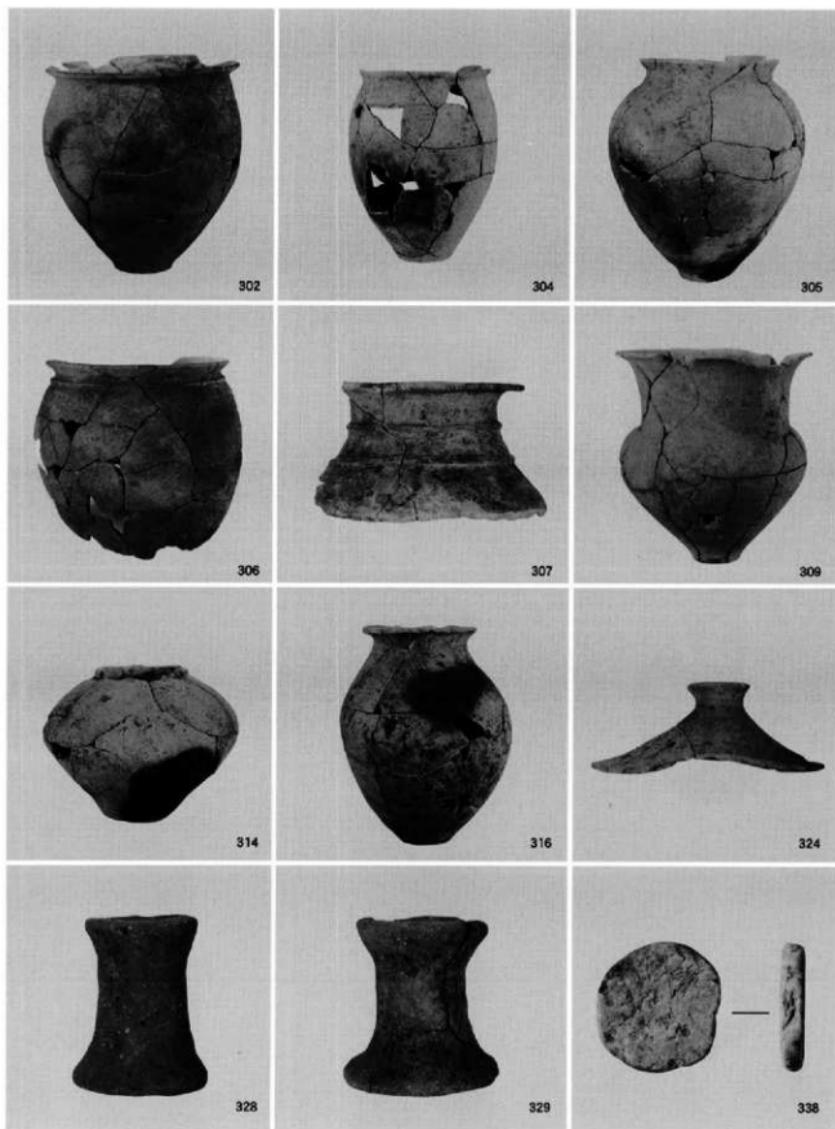


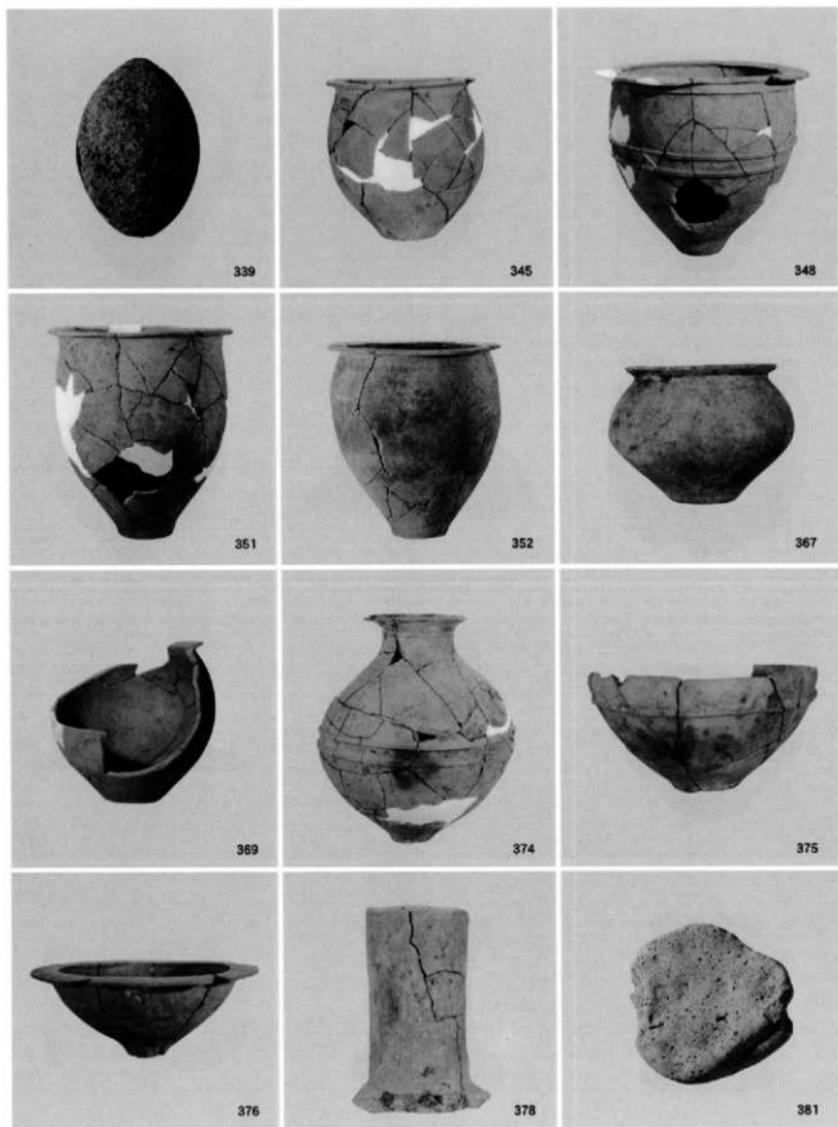












今宿五郎江遺跡 IV
—福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集—

2003年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 田堀印刷有限会社
福岡市中央区草香江一丁目8番24号

